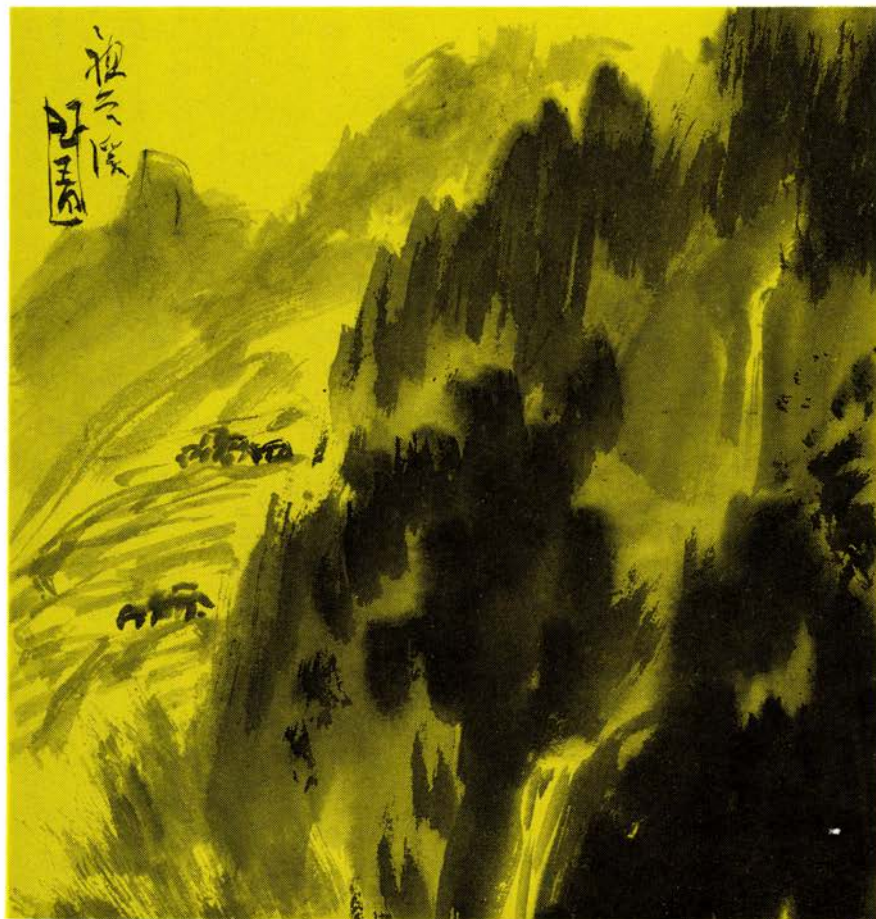


川柳塔

昭和四十一年一月九日
昭和六十一年六月二十五日
昭和六十一年七月一日発行
（毎月一日発行）
印刷
創刊大正十二年 通卷七一〇号



日川協加盟

No. 710

七月号

予

告

麻生路郎二十三回忌

麻生霞乃七回忌

中島生々庵一周忌

追悼川柳大会

明昭和六十二年は麻生路郎二十三回忌、麻生霞乃七回忌、中島生々庵一周忌に当りますので、追悼川柳大会を左記のとおり催すことになりました。

日時 昭和62年7月5日(日)

場所 高野山 普賢院

電話 ○七三六五(六) 二二三二番

●詳細は逐次誌上に発表致します

川柳塔社

一本の自由を、



入って、さみしかったり、うれしかったり、いろいろあつて。一本のボトルをキープする。それはつまり、自由な時をキープする、ということ。いい酒だから自由になれるのか。自由だからいい酒になるのか。心開いて、いつものオールドにたどりつく。

今夜も会う。酔う。酔う。

サントリーオールド キープする。

製造・販売 サントリー株式会社

白櫻忌

西尾 栞

いうのがあった。藤子さんの答えは、私は東京で生れて東京で育ったので、その経緯はわかりませんと言われると、市の方が、目下記念館を建てる準備をして史料を集めています。

明治三十七年、かの有名な「君死にた

去る五月二十九日、堺の覚応寺で情熱の歌人と謝野晶子の第五回白櫻忌が修された。その日は生憎の雨であったが、本堂一杯の参加者があった。殆んど女性の方で、百人中男性は十人程であった。正面に晶子のパネル写真が飾られてあった。

一時半予定通り読経から始まった。最後に晶子の一番末娘の森藤子さんがお母さんの憶い出を語られたのが印象的だった。そのあと、藤子さんにお聞きしたい方があればということで、色々と質問された中で、晶子が、堺の生れであるのに、堺にいられないのはどうしてですかと

おごりの春のうつくしきかな

一、西本願寺堺別院

劫初よりつくりいとなむ殿堂に

われも黄金の釘一つ打つ

一、泉陽高等学校

晶子の母校旧堺女学校の後身

「君死にたまふことなかれ」の詩

一、浜寺公園

ふるさとの和泉の山をさわやかに

浮きし海より朝風ぞ吹く

因みに歌碑巡りを書いてみると、
一、堺市立図書館

堺の津 南蛮船に行き交へば

春秋いかに入りまじりけむ

座右の句

飛ぶ鳥へ飛ばざる鳥へ初光

(薫風)

私の句

寝そびれて時打つ音に焦る闇

茂見 よ志子

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

白櫻忌

西尾 葉……(1)

不肖の孫弟子

西田柳宏子……(2)

川柳塔(同人吟)

西尾 葉選……(4)

自選集

東野 大八……(28)

川柳太平記(98) 川柳の群像 山本浄平

黒川紫香選……(36)

連載 誹風柳多留廿六篇研究(二十六丁)

榎谷寿馬……(31)

水煙抄

宮園射月芳……(53)

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

橘高薫風選……(54)

愛染帖

不肖の孫弟子

西田柳宏子

今月は路郎忌である。路郎先生逝かれて既に二十一年を経た現在、同人の中ですら路郎先生を知っている者より、知らない人の方が多くなっている。常任理事の中でも全然路郎先生をご存知ない人も増えてきている。本当に時代の移り変りの激しさをしみじみ感じさせられるものがあります。

古稀はよし 弟子に孫弟子 曾孫弟子と詠われて盛大な祝賀句会で満面笑みを浮べておられた路郎先生が諷の裏に残っている。

恐らく不朽洞会員(路郎先生直門の会員)

としては最後に近い、甘やかされた不肖の孫弟子であった私は、大先輩方が畏敬しておられた万代の先生のお宅(不朽洞)にお伺いしても、遠慮もせず怖いもの知らずで先生のベッド(居間兼書齋に大きなベッドが据えられ

モンゴルの太陽……………東野大八…(58)

三つの橋……………岩井三窓…(60)

メッセーじの憂うつ……………紀市郁栄…(63)

いずも創立60周年記念川柳大会参加の記……………春城武庫坊…(64)

初步教室……………阿萬萬的…(66)

「思」……………仁部四郎選…(68)

一路集「交替」……………藤後実男選…(68)

「団地」……………片上明水選…(69)

柳界展望……………(70)

本社六月句会……………(72)

各地柳壇(佳句地10選／堀端三男)……………(76)

■各地句会だより(翠洋会)／中西兼治郎……………88

■7月各地句会案内……………89

■編集後記……………91

座右の句

風みどり梅の実みどり手もみどり (甲吉)

私の句

この道も空もつづいている他人 古川 美津枝



ていた)の処までツカヅカと寄せて頂いて雑談……もう少し川柳のご指導を頂いておけばよかったと後悔……していたことなども、謹

厳居士後藤梅志さんが玄関に端座して、先生のお声があるまで長時間待ち続けたことや、

生々庵、栗、好郎、白柳、他鈴々たる大先輩の方達が路郎先生に對して実に丁寧な物腰で

接しておられ、言葉遣いも丁寧なことなどと思ひ合せて洵に汗顔の至ります。

更には先生のお葬式にも参列出来なかったことも今なお心の底に悔いが残っている。

先生歿後、生駒の次男アート氏の許におられた霞乃奥様をお訪ねしていろいろ想い出話をさせて頂いたこともなつかしく、その奥様も亡くなられて五年になりました。

季移り時流れて、先生を知る人は少なくなつても、遺された先生の情熱は確かと川柳塔に受継がれていることは嬉しい限りです。

「川柳は人間陶冶の詩」

「いのちある句を創れ……一句を遺せ」

これは先生が常に私達に言われた言葉であるが、未だいのちある句も、遺すべき一句もない私はやはり不肖の孫弟子と恥じている。



西尾 栗 選

近江八幡市 前川 千賀子

貝割れのみどり信じていいものか
ささやきは悪女になれと初夏の風
疵癒やすにグルメの旅行とはおんな
利減りして土の甕など欲しくなる
五月の空が一番好きなアドバールン
時に愛苦しくなりて胡桃割る
雑踏を二人で歩くえにしなど

兵庫県 遠山 可住

有頂天になってどんぐり転げ過ぎ
五分進んでいて目覚しが叱られる
霧島つつじが真つ紅金持ちになったよう
夫からあくびをもらう初夏の風
電話鳴りつつき天ぶらあげている
背伸びしてみても六尺五月晴れ

八尾市 高杉 鬼遊

七月に会える人あり雲の峰

妻がいて鬼の棲家に花が咲き
にんげんが住んでいるのに鬼遊亭
不器用に生きればもつと楽なのに
たこ焼をダイヤの指で買ってゆき
もの言えはこの世は寒い金のこと

松原市 谷垣 史好

これこそはロマン人体解剖図
湿度計女が湿気もってくる
良心を家に残して逢いに行く
葬式セットそんなギフトを下さいな
ゴボ天を揚げるリズムは腰でとり
もぐら叩きは身につまされる円相場

桜井市 岩本 雀踊子

長いながい喧嘩相手の妻なりき
七月の暑さの中の他人事
遠花火K子が死んだ風だより
健康がある貧乏をなげくまい

あれからの故郷へ流れている月日
明後日が僕にありますが懐手

松江市 恒松町 紅

思ひ出は牡丹の島の旅日記
意気軒昂五臓六腑へ感謝する

キャンドルで一人娘を持ってかれ

朗らかな音厨房は大安日

たったひとりに手こずっている父の舟

男尊のイメージ残す角かくし

伊丹市 檜谷寿馬

春雨を天音と聞く昼の酒

子の積木血筋を受けた几帳面

漫才はほんとに可笑し立候補

弁当に無理な愛情詰めてある

もうそろそろ女子大生の免罪符

母の日に三人の子の品定め

岡山県 土居耕花

重態へ友引などが囁かれ

瞑想をすれば痔核が喋りだす

退院をしてお隣のゴミも掃く

食えぬとはお前の事よ葱坊主

集金が笑い中風に引っ掛かり

デートして一杯指紋付けて来る

米子市 林瑞枝

玉音のだからそうかがお優しくて
タイムトンネル潜り不思議な国に出る

草餅にくるんだ母の泣きよ

舒して山は悩みを吐くところ

飽食の陽だまりにある指定席

折返し点から転がりゆく月日

富田林市 岩田美代

生真面目で女の毒にすぐ当る

なたね梅雨逢いたい人が多すぎる

泣くためのハンカチ高い方にする

葉桜やまだ落ちつかぬ女たち

マル優の話に飽きて梅雨に入る

一言で五月に背くうつの顔

堺市 河内月子

B型の妻で時々ちよんぼする

単細胞同士でサラッとした喧嘩

若葉から青葉のんびりしておれず

行く春へ人それぞれに地図を買う

面倒なことはカアちゃんお母さん

一つだけ大事にしてる花言葉

八尾市 宮西弥生

この世でおきた解決急ぐ仏の間

席ゆずる今日も世のため他人のため

保険金万が一をおもう旅

百花繚乱窓ぎわ族に育てられ

淡白な情車窓を開かない

独身の話題思い切ったことばかり

和歌山市 福本英子

亡夫へ酌む空しき零す経机
室生寺の石段を行くメヌエツト

大手毬小手毬映えて磨崖仏

円高のチャンスへ切れたパスポート

自惚れすぎたスペースシャトルと原子炉と

道一つ隔てて地価が跳ね上り

和歌山市 松原寿子

揺れ動く想いが胸を熱くする

忘れ得ぬひとを花芯に抱き続け

逢いに行く爪の先まで炎えながら

雑踏にまぎれ想いを突き放す

片想い天使の耳が重くなる

コンパクトへ独り芝居を伏せておく

大和高田市 岸本豊平次

廿一世紀の空気も吸うか鯉のぼり

這い這いに武者人形が慌ててる

紙襦袢どうのこうのと育児欄

其処に來たついでの話が込入って

騙されているとも知らぬ高笑い

寄せ書きの色紙に鬼籍の名を数え

大阪市 江城修史

つまずいた父に重たい家系譜よ

隙のない男で無風帯を行く

思想なき男で貯めている噂

子へつなぐ鎖よ錆びる事勿れ

みどり憂し渴いた心持ち歩く

大阪市 津守柳伸
早起きをして夜遊びをカパーする
たまさかにはずしていたいドアチェーン

ちよばちよばで何所か似通う苦勞性

独り身の氣軽どこかで放射能

自由業女に歳がないように

大阪市 天正千梢

異端者の孤独ハンカチ白すぎる

ある時はリーダーとも見ゆるガードマン

入札じやないんだよ病院三つかえ

觀光の糧ともなりぬお吉塚

富士の山さかさに写し孤独かな

大阪市 西出楓楽

幸せですとかけておく自己暗示

そつのない人で聞き役ばかりする

初夏の風つんば機敷をふき抜ける

しまい忘れのカーディガンと梅雨を待つ

昼の月見果てぬ夢を見えています

大阪市 本間満津子

捨て難いものばかりある小引出し

逆の立場から考えてみる余生

上るかと思えば上る血圧計

わたしの選んだ色が朱に馴染まない

腹割って見せたいキューイの無精髯

大阪市 北勝美

好奇心ちよつぱり残して未だ老けず

居眠りを瞑想してますよい言葉

ガードマン仮眠の夢も鍵握る

メモ一つおろそかならず焼却炉

バードウィークリング一つに無駄論議

東京都 増田次章

知らぬこと多し花の名も草の名も

平穏だからささいなことに腹が立つ

幸せは他人から見たもののよう

旅占拠老人連れと若いギャル

主導権とうの昔に妻と子へ

和歌山市 西山幸

るすばんでんわの無言話に肩が凝り

ざるそばを食べる平和な孤の音で

書きかけの手紙へかばちや煮崩れる

人恋し忍び返しの家について

好転へ神を信じることにする

和歌山市 内芝登志代

円高へてこずる企業の知恵くらべ

母からの血を受けついで針が好き

ポケットで合鍵去就を考える

大切な娘も遠くなる華燭

蝶も又野辺の送りへ低く舞う

和歌山市 牛尾緑良

一本の白髪満足感がある

ライバルがバックミラーの視野へくる

雄弁ではないが花束抱いている

胃の痛い話で妻に話せない
深呼吸タイムカードを押してから

美祢市 安平次弘道

自画像の仕合せ彩は褪せ易し

敗走の記憶が消えぬ土踏まず

風媒花やさしい風と旅に出る

母と子の絆にふれぬ紙オムツ

賽銭箱神を買収できますか

柳井市 弘津柳慶

女強く男へエブロン掛けさせる

ボケ老人それから家庭狂い出し

童貞のままで戦地へ狩り出され

夢いつか破れて故郷の人となり

仏壇の花取り替えて独り言

倉敷市 野田素身郎

肝心なところで黙る男親

婦人会が行く老人会が出る五月

後遺症幼稚園児に追い越され

太鼓囃子打ち手に義足の友がいる

顧みて忸怩たるものあり定年

倉敷市 小野克枝

責任の半分降りた大安日

裁ち鋏母の歴史の音で切れ

萎れない胸の造花と旅に出る

笑うことこんなにあるよ車椅子

味噌汁の具の心配は母のもの

弘前市 波多野 五楽庵

定年のない藪医者も疲れます
役付きの席で胃散の瓶が増え
なんという肺だ風船曇り出す
あの人がとうとう来ない箸袋
償いにゆく菓子箱の重いこと

熊本市 有働 芳仙

肩書の一つに汚職の匂いがし
母の日の亡母は瞼の奥で生き
地価もつと騰るまで待つあわだち草
泡一つ二つ金魚の愚痴が浮き
親と子のパイプ時々つまりかけ

下関市 石川 侃流洞

鏡台の不運鰥夫が髭を剃る
三面鏡親と同居はせぬつもり
掃除機に追われ散歩の粗大ゴミ
風邪位一本飲んで寝ろと医者
老いて子に従うつもり皆別居

岡山市 嘉数 兆代賀

陽のあたる場所には出ないカタツムリ
つまずいた石の言葉を聞いている
娘と枕並べて侍せだとおもう
エンマサマまだ行きません喜寿の坂
婦人科の隅でわたしも女です

岡山市 川端 柳子

悲しみの中から青い井戸を掘る

思い出へ人差し指の影長く
カラオケがお好き上手と限らずに
あてにせぬ情が戻る金戻る
皆いい いい人ばかり眠い日々

倉吉市 奥谷 弘朗

じつくりと男の花道考える
一筋に打込むものがあつて耐え
古里の誇りやつぱり伯耆富士
小言まで妻そっくりの娘に育ち
腹割って話せる友を持てる幸

兵庫県 辻 文平

言い切つてちよつと若さを誇張する
骨を抜く愛語八重歯からこぼれ
齢だから馬鹿になろうと学んでる
捨て切れぬ夢を偏平足で追う
敵のない暮しが欲しい父の靴

米子市 小西 雄々

手許には何時も仮面の二つ三つ
訪ねたい気持を変えた曲り角
減塩へ手許に置かぬ調味料
小細工もできぬに期待されつづけ
文化にも功罪があり使い捨て

米子市 石垣 花子

磨いても言葉をにぎす三面鏡
淋しい日少し値の張る本を買う
熱い茶を入れてペンを軽くする

先頭の裏切り知らぬ蟻の列
人形に慕われている人形師

米子市

林 荒介

旅の続きで乗り換えの駅ばかり
唐芥子甘い話を聞いている
座蒲団に水をこぼした事ぐらい
乗り換えの駅にも咲いていた桜
アングルを変えても一度山を見る

米子市

野 坂 な み

朝日を吸って明るい心もらいます
春の陽の温みを夜具にたたみ込む
薄化粧心の中も飾ろうよ
実年の背広の裏が綻びる
目標へすすめ進めと鬼の笛

米子市

政 岡 日 枝 子

鼻がひくくて何度も転ぶダルマさん
小さな風に意外に弱い男傘
禁酒禁煙せめていびきは憚らず
老いらくもあって長寿も夢もてる
寝たきりの長寿ですってささやかれ

米子市

青 戸 田 鶴

炎えたぎる一途さ想う柿若葉
詩書いて胸のすき間を埋めている
花影で花のうつろい聞いている
片仮名の言葉ばかりになるこわさ
よく笑う九官鳥を飼っている

満ち足りた人形指はしゃぶらない
燕来てメダカも少し大人びる
子に勝って負けてくれたという将棋
又来たい気持にさせた忘れ物
なま臭い話仏に聞かせてる

米子市

寺 沢 みど里

渋滞の列から生命もちかえる
親指のとつぜん欠ける日と思う
明日へ足す言葉はしくてチャイム押す
瞳が合うと溜めた言葉は出てこない
ふる里を慕う毯藻の失語症

米子市

澤 田 千 春

指が動く今朝も私は生きていた
ポケットに明るい話入れておく
杭打てば空気が叫ぶ声がする
渡し場に來る迄の道崖の道
山椒の木笑ってうえて枯れました

米子市

茂 理 高 代

後指聞えぬ振りがうまい猫
呆けだすと九九を数えて確かめる
失敗を声なき声で裁かれる
死ぬことに勝ち実年の地図ひろげ
指が鳴く堪忍袋がぬえなくて

アドリブを本音に取っていいですか

米子市

光 井 玲 子

もう一言欲しくピエロを演じてる
左指を少しいじめてやろうかな

九人目の敵は案外老婆だろう

すぐに湯が出る俵せを忘れない

豊中市

安藤寿美子

五月晴れおたふく豆が鉄漿^{かぬ}をつけ

毛虫から見れば私は鬼婆

夏なれど梅雨冷えなども候らへば

自慢ではないが痴漢に遭わず生き

内需拡大風呂の蓋なと替えましょか

京都市

松川杜的

能舞台白足袋の裏は見ない事

この寺の由来朱印を押しながら

○一つ画けず俳画習うてます

霊柩車きつと美人が乗っている

春愁や水子地蔵に花がある

京都市

都倉求芽

安心して悪口を言う禁猟区

やわらかな緑の風を掬う坂

指先の力に本音がひそんでる

影法師のうなだれているのを見つめ

地図に載るあたりから川が汚れ出し

京都市

山本規不風

慎重な女で怖がりやで大胆

新しい恋へ男の裏ばなし

悪いのは相手で不倫にはしない

占いが当って夫二年目に帰る
還暦の夫婦に少しある嫉妬

堺市 高橋 千万子

おしゃれ着が少し寒い花の冷え

打ち合せだけが進んで今日も雨

目かくしにいつもと同じ匂いする

喪が明けて女は別の面を買う

かがり火へ鶴匠も鮎も必死なり

松原市 玉置 重人

アリバイがまだ崩れない以下次号

犬も古い夫婦も老いた我が家の灯

パチンコ屋出てストレスが又溜り

親類に一人博士がいる自慢

かにかくも何か哀しき老人証

松原市 佐藤 藤子

卒業の晴れ着にいれる母の紋

米櫃の米がきれてる花曇り

熱の子へ行平の粥できあがる

藤棚は五月わたしの生れ月

雑踏のひとりぼっちに詩がある

松原市 小池 しげお

国訛り短い舌でよくしゃべり

サインコサインそろそろ父もなめられる

釘穴違え紳士の大あくび

ニコニコした坊主で忙しそうに往く

幼稚園喧嘩してくるもう五月

富田林市 藤田泰子

ばあちゃんが召されていった花祭
四十から男のためでない化粧
見てたげる男は空を泳ぎなさい

一線を引いて渚に立ち尽す
きれいごと胸ポケットのハンカチーフ

富田林市 田形美緒

耐えている男の夢に賭けている
ポケット七ツ七ツ道具で策を練る
決断が内ポケットにある強気

計画は東大コースの幼稚園
計画になかった無念のギブスはめ

竹原市 小島蘭幸

サッチャーも女ダイアナ妃も女
救急車の後追いかけて行く父よ
鈴を鳴らして鈴を鳴らして逢いに行く

父の日の父をひとりにしてあげる
鯖一尾猫の親子に似て食べる

竹原市 森井菁居

パンジーの花芯に童話が詰めてある
NGが続いて大きくなる男
安定所に来たことがない果報者

円高を逆手にセールスマンが来る
衣食住足り薬草の名を忘れ

尼崎市 春城年代

鹿野町の祭に招かれて(一句)

明治大帝の額を掲げて三世代

この町の人の情けは生き継がれ
あぜ道の道祖神なら信じよう

土橋渡って一文菓子を買いにゆく
四つ足から立って歩いている驕り

伝説は深く詮索せぬもので
イヤリングつけ丁寧な口をきく
国境を知らず散らばる放射能
鎮守の森に亡父の言葉が残ってる
脇役の道一筋のベレー帽

尼崎市 春城 武庫坊

行雲流水尾崎放哉東大出
晩酌をばけて夜中にまたも飲み
五月雨に猫も見上げる空模様
夫々のロマン舞台の上と下
本能で蜘蛛の巣見事幾何模様

西宮市 草刈墮駄

盗まれた話に尾ひれが付いていた
人間の思案へ星のいさぎよし
境界線引くよしも無し蝶の恋
迷わずに選んだ道で迷い出し
六道湖の夕陽夫婦の旅日記

西宮市 西口 いわゑ

オンオンと泣きにきました夜の岸
電話口顔しかめてるのが見える

西宮市 奥田 みつ子

飽食の絵から知性が逃げてゆく
二世誓う夫婦に少し嘘がある
渡らねば母にはなれぬ母の川

平田市 久家代仕男

分校に赴任リユックに不安詰め
職安に金の成る木は置いてなし
思っても詮ない夢は猿にやる
自我と自我三角波に似て尖る
溜飲を下げた言葉が重くなる

松江市 柳楽鶴丸

結婚という交差点もある
ビルの谷間で肥満児が育ち
首相が笑うとだまされぬよう身構える
玉砕の島で派手に甲羅干
葱坊主の首が転がる菜種梅雨

松江市 舟木与根一

裏側が読めなくなつて好々爺
足継ぎを覚えた孫へ油断する
中流を認める固定資産税
住み心地悪くなつてる住民税
大関が負けてニュースにならぬ場所

出雲市 吉岡きみえ

プライベートのはなし暗がりのほうがいい
すねの傷もう時効にしてほしい
割り引いて見ても値打ちのないわたし
花びらを数えきれずに声変り

たのしさが溢れてまわる花時計

出雲市 園山多賀子

焼酎は庶民的だと思ひ込む
伏せ縫いに亡母の掟の温かみ
菜の花の黄に十字架の祈りあり
自作自演観覧席に妻一人
馬耳東風姑の悟りに負けている

島根県 西村早苗

知りすぎてネオンの媚へ背を向ける
クレヨンで月の兎を画くは黄
ホタル飛ぶ別れ話の目にしみる
しあわせを忘れた指はどれだろう
運命線いますぐ女捨てと言う

島根県 小砂白汀

職人の目が一ミリを許さない
ロングラン男と女の物語
むらさきの味を食わせる茄子の艶
待つべきか待たざるべきかヤジロベ
無駄な線断じて引かぬ飛行雲

島根県 堀江正朗

見えそうな緑五月の窓の雨
風みどり燃やす闘志はまだ残り
結論を急ぎつまずく阿呆らしさ
或るときは疑うこともと妻は言う
合掌の長さは欲の大きさか

島根県 堀江芳子

背かれて一つ賢くなりました

夫の掌にゴメンナサイと書いてから
連休のワイワイガヤガヤ血のぬくみ
眠られず優しい月と風の私語

押しくらべこころで夫に負けておく

島根県

錦 織 文 子

生きのびる夫婦が探す白い道

遠い娘へ思いとどかぬ流れ雲

豊かさへ過去には触れぬやぶ椿

招かれて逢う日明るい春を着る

新築の音がこだます過疎の風

島根県

石 田 清 泉

サミットのニコニコ腹のさぐり合い

万能の科学ちよつぱり隙間風

唯物論そろそろ仏陀の出席待ち

鯉のぼりはくは小さくてもいいよ

不倫の不消さんがための離婚劇

島根県

松 本 は る み

諦めたように出て行く終電車

許そうか指にからめたネックレス

人ごみを喰い人ごみの中にいる

蝶の自我じつと見つめてあげましょう

一粒のぶどう哀しい絆かな

唐津市

田 口 虹 汀

喜寿に居て猶妻の座の自若たる

何もかも妻に委せている平和

火の国のピーク鹿毛と朝を馳け

青春のシンボル亡父の臭いする

慰めの言葉だけでは癒えぬ傷

唐津市

久 保 正 敏

またしても一人よがりのボトル瓶

余生いま妻と机がある安堵

天も地も汚れキリスト又瘦せる

騙されに行くのに妻の目を盗む

婦道から外れる動悸のジンフィーズ

唐津市

浜 本 久 仁 於

湯治にもうかうか行けぬ伊豆の火事

遮断機の向うも心急ぐ人

栄転のような左遷を口説かれる

桜ほど浮かれもせずに藤の下

サミットへ見せる日本の鯉幟

高知県

松 岡 三 吉

男だつたら男だつたらと米洗う

商店街抜けると早い妻の足

シンデレラ姫にはなれぬ皿洗い

歯みがきのチューブが瘦せてくる素顔

温泉に浮世忘れた首が浮く

高知県

赤 川 菊 野

居眠りの姑が仏の顔をして

飽食の視野から消えぬイモのつる

飛行雲遠い記憶が駆けぬける

ポーナスを知らぬ生活へ夕焼ける

手話の娘に人の情けを教えられ

名古屋市

越村 枯梢

花が散る別れ話を聞くように

目無しダルマのまま果ててゆく漫画

人形よ時には相槌うつて欲し

帽子あみだに被つてストレス吹つ飛ばす

右顧左眄半熟卵に笑われる

笠岡市

松本 忠三

天狗から嘘八百を授けられ

患者から風邪を貰つて医者寝込み

目に余る十八番マイクを離さない

好きなもののお食べと医者が匙を投げ

自分だけいい子になってけつまずき

今治市

矢野 佳雲

大望があるので目立つてはならぬ

真実の一つでそれも霧の中

啄木の雨ジャガイモの花に降り

こんな首かと不機嫌なネックレス

罪障を持たぬ遍路の荷が軽い

浜田市

中川 幸一

問われても言うた覚えのない寝言

詩情には遠く月夜に腹が減る

反省はせぬが言い訳考える

修身が大人の恋の邪魔になる

苦しみも遊びも知った果ての呆け

西条市

片上 明水

洗濯機好きなシャツから先に出し

風呂敷へ米を包むと円くなり

墓からは見えない母の好きな藤

下駄履くとリズムが戻る祖父の足

本堂の畳が冷える春の雨

桜井市

河合 茂雄

結局は下で責任とらされて

世渡りの下手が竹光さしている

どんぐりが並んで審査迷わせる

弾んでもかけ込み寺へ遠い毬

カレーライス食わしておけば子も育つ

鳥取市

両川 洋々

そして幕褪せた叛旗を折りたたむ

寺一步出ると邪心が目をさます

あつけない幕切れでした癌でした

拿捕覚悟生き抜く船を北へ向け

神だます女へけもの道つづく

鳥取県

川崎 秋女

思い出を溜めまんだらの坂のぼる

思い出がほしくて二枚切符買う

人憎むそんな思い出だつてある

オルゴールだけが知つてた思い出を

捨てられて猫よお前も哀しかろ

八尾市

宮崎 シマ子

母の日に来る娘へ母の五目寿司

母の日に風邪で臥ている母と知る

本が好き花好き人好き母の趣味
いつ起きても母が起きてた七不思議
熱愛という花言葉持つ花もらう

岸和田市

古野ひで

淋しくて遺影に愚痴る菜種梅雨

ふと我にかえると古稀という齢で

大正の女の青春は六十路から

風薫る心の扉開けました

煩惱をたち切る数珠が見当らず

寝屋川市

稲葉冬葉

それからの女に恐いものはない

転んでも魅力になつているおひと

春の雨私の傘が増えている

夫婦茶碗の朱に厳しすぎないか

仏壇を閉じて余生の炎を灯す

藤井寺市

吉岡美房

蝶の舞う高さへ豆の蔓は伸び

世界地図豆が弾けている火種

自転車駐在さんと会う野道

定年後昔話が美しい

願望の句だと言うのに誤解され

姫路市

人見翠記

古都税と祇園遊びのヤジロペー

ナイターが私の夜を豊かにす

五月雨のそば降る中を労働歌

藤娘の藤の簪に暮おそし

人恋し人また憎し春の宵

寝屋川市

宮尾あいき

薫風に豆がふくらむ散歩道

玉ねぎに泣かされたところへ御来客

皆既月蝕藤原道長如何にとや思う

ダイアナ妃御来日ソ連から原子灰

母の日の母御先祖の墓参り

大阪市

西森花村

女もう五十は昔に過ぎた声

日曜は済んでもバラは赤い色

六代目の話明治か大正か

ツインビル程双子でかくなし

更衣どのポケットもふくれてず

富田林市

板尾岳人

四天王寺辺りの鬼はお人好し

七月の雨に騙されている日傘

土砂降りを憎む真夏の置手紙

曼珠沙華男の罪は許されよ

大阪市

河井庸佑

それなりの苦勞があつて今日の椅子

人は人已は己と言ひ聞かせ

仲良しのひとり走ればみな走る

素振りにも出さぬが管理職孤独

大阪市

黒田真砂

種袋に軽いジョークをつめて春

胸の内見せぬ笑顔で盃をおく

分け前へ矢じりみがいて居る他人
よっぱどの事か夫がラブソング

大阪市 神夏磯 道子

いやな梅雨と言うまい紫陽花の美しき

固まって咲けば聞える花の私語

状況を読んで無口になっている

熱いお茶ころのしこり取ってくれ

大阪府 坂口 公子

主役だけ心痛めている楽屋

母の忌へ衿を正して惚れなおす

言いわけをせぬライバルのさわやかさ

亡母の年齢とうに越えてる甘えん坊

大阪市 長谷川 春蘭

締めるとこしっかり締める妻が居て

突然に生徒の列を裂く毛虫

何思うて飛んでいるのか鳩の群

街角の時計が動く暮れせわし

大阪市 藤田 頂留子

南港野鳥園

緑地ゆく耳に野鳥のハーモニ

ダイアナ妃に浮かれてるうちも放射能

市町のダンジリばやしは亡兄の声

好きずきに生きて近道まわり道

大阪市 大塚 節子

朝市へまださめやらぬ宿浴衣

現代児も紺の背広の顔やよし

菜種梅雨竿にからんだ鯉のぼり
同年の計報に我も検診す

大阪市 鈴木 節子

死ぬまでの勉強ゆつくりついてゆく

とって置き茶筒を出して午後の友

掛けつけ欲しいものなどない満期

春の花芝居上手に咲き誇り

大阪府 渡部 さと美

ダイアナ妃に魅せられながら惹きざむ

母の日の母のリュックは尾瀬を越え

一目惚れつばめ返し口説きよう

突っかって来ぬのは親の底を知り

鳥取県 森田 熊生

先頭もビリも持つてるマイベース

マイベース守る自信がやと出来

子がみんな見てる努力の汗をふく

さわやかな門出へ青い服にする

鳥取県 清水 一保

大正の部品で補修する命

夫婦独楽今日もしっかりネジを巻く

人間ゴツコ核と核とがする恐さ

葉桜が盛者必滅説いている

鳥取県 林 露杖

寂しいな色っぽいなあ木瓜の花

アイリスに女神の吐息残らばや

背く人背かれる人嗤う人

五月雨に心の裳が濡れてくる

鳥取県 森田布堂

推理いま女体を刻むペンを持ち

空気枕で肺活量の自慢

何を取りに来たのか部屋に来て忘れ

すきやねんというラーメンを食い過ぎる

鳥取県 金川満春

新緑に眠った恋が目を覚ます

飽食に何れ此の裏来る覚悟

へアースタイル日毎に替えて翔ぶ女

不可解なものに地球のいがみ合い

鳥取県 中原諷人

貧乏に耐えた亡父より母が好き

点点点みんな平和な譜となれり

さかろうて詫びて老母から賞められる

おしどり夫婦の鼻高くても低くても

鳥取県 中原みさ子

念願へまだまだ鶴を折り続け

サルカニ合戦の応援してくれる

濁点の言葉ふる里から届く

娘の便り点点点と喋らない

鳥取県 中原汲香

ふた心持たぬ証拠のあやとりよ

国宝の茶碗も指でこねました

千年の吐息つづけてみ仏よ

甘樫の丘やさしくて母に似る

鳥取県 新家完司

空は青く郵便受けは空っぽだ

城落ちぬ萎れた花を抱きしめて

勤勉な男に今朝もベルが鳴る

勝ち過ぎた男むなしい風に逢う

唐津市 仁部四郎

GNP襟付け替えて付け替えて

ステーキもコーラも史書を狂わせず

留守番のイソノカツオにギヤラが要る

泥水も吞まずベルトの穴が減り

唐津市 浜本義美

春愁や乳房の重み知るおんな

旅の宿南も北も知らず寝る

狸寝のいつの間にもやら眠り込み

リハビリへ冬も泳いでまだ癒えず

和歌山市 堀端三男

片減りの靴から過去を聞かされる

買うてする苦勞が自分を太らせる

定刻に来たのは一番遠い人

スベアキーにこころの扇は開かせぬ

和歌山市 若宮武雄

花ほめる顔へ一輪さしあげる

独りでも二人なおよし菖蒲園

しゃあしゃあと嘘を並べてもてている

金バツジ定数は正をもて遊び

和歌山市

神 平 狂 虎

旅終えてガイドの恋路ふと浮べ

岸和田市

福 浦 勝 晴

ぎこちない動作で敵の真似をする

負けてからとても陽気になっていた

船の跡追うと心が鳥になる

町工場の隅で芽生えて消えた花

和歌山市

福 井 桂 香

梅雨空に心はいつもクリスタル

酒の上の約束でしたとも言えず

とまり木で飲んでアダムが淋しそう

恋多き女イニシャル弄ぶ

和歌山市

細 川 稚 代

一日が上手に生きた茶器仕舞う

矢草草征ったまんまで空の果て

カルチャーで内緒話がしたくなり

新婚の部屋カラフルな風通る

和歌山県

寺 田 裕 美

覗かれておたまじゃくしが足を出す

春蟬が鳴けば力がぬけてくる

私よりわたしを知っている他人

律儀にもキャベツが巻いてきた月日

和歌山市

玉 井 豊 太

指定した場所で日傘を回してる

女女女笑い事では無い産湯

母の日も達者で回る洗濯機

下請のその下請の鉄を切る

生涯を大と稼いだバタ屋の死

北浜の帰りに長者とコップ酒

梅雨空を支えるようにノッポビル

岸和田市

清 野 こ う

茄子植えて予報通りの雨となる

改築の挨拶に行く両隣

期待した人來ず思わぬ人が来る

目のやり場迷う電車のさし向い

岸和田市

島 崎 富 志 子

流行に背を向け達者な母で居る

一人娘結婚

模様がえしても気休めだけのこと

客のように招かれて行く娘の新居

逢えば親娘時の流れが消えている

岸和田市

原 さ よ 子

金言を心に抱いて日々豊か

倅と思う人にもあった愚痴

七十キロの渋滞にあい旅終る

墨の香が部屋いっぱい雨の午後

豊中市

田 中 正 坊

孫に似た笑顔に逢うた日の和み

夫婦より強い母子の血の絆

美人ではないが魅力の片えくぼ
サイン・コサイン忘れた歌がよみがえり

豊中市 奥田満女

御免なさいいいえ五月の風みどり

悪人も馬鹿正直も栄えてる

師の喜寿を祝うて一寸淋しゅうて

奥さんの忙しいという百貨店

寝屋川市 江口度

嫁きおくれ手に職つけた親心

自殺などせぬが人形の首をぬく

分け前をみんな少うし言い過ぎる

肩の凝る話は止そう藤の花

寝屋川市 平松かすみ

お母さん結婚します糸電話

無口から出れば嘘にも誠にも

無表情だからロボット恐くなり

伝説の山を裸にさせる税

東大阪市 森下愛論

留守番で老いの孤独を知らされる

目覚しを外して週休二日制

若いからではすまされぬ軽はずみ

花の宴下戸は下戸なり位置を決め

東大阪市 崎山美子

生きることの尊さを知る五月晴

ささやかな福祉が守る子の笑顔

上役に上役がいる宮仕え
女ひとり生きる覚悟で脱ぐ喪服

尼崎市 西村かすみ

朝の箸置けば男のゴング鳴る

スベアーのない主婦の座にある誇り

改まる妻の敬語へ身構える

一生の願ひ女に多すぎる

尼崎市 奥山美智子

甘えると遠心力が弱くなる

指一本なくしてからの思いやり

さりげなく話してくれる雨が好き

空缶が自嘲の音で転がった

尼崎市 角野かず子

あす続くしあわせ信じ布団干す

速い人遅い人にも拍手わく

殺されて毛皮になって売れ残る

売る姿勢いつも低いと限らない

倉敷市 稲田豊作

自画自賛しなけりや誰も褒めに来ぬ

人体解剖おやおや良心がない

正義感抱いて孤独の風に遭う

苦の世界さりとて幕は下ろされず

倉敷市 藤井春日

金貯めて人の情に背をむける

春眠暁を知る頑張り屋

倅から日頃の不満を聞く寝ごと
髭剃りに一苦勞する顔の皺

倉吉市 渡辺 菩 句

大吉のくじを朗読して歩く

孔雀の依怙地が羽根をひろげない

男がひとりだけのいくさに辞書をひく

タイミングをはずすとどつと馬鹿笑い

倉吉市 淡路 ゆり子

母の味煮つめて作るきやらぶき煮

春の陽にまずわたくしの布団干す

この吐息持ち行く先の花の冷え

ながらえて文化の渦に残される

島根県 榊 原 秀 子

久々の街アドバールンみて帰り

プライドにこだわり過ぎてはいませんか

胃の痛み忘れた馬鹿になれてから

山菜の味とこころを賞でる膳

島根県 藤 原 鈴 江

白内障手術成功

素晴らしい空が戻ってきたその日

目の玉を入れ替えてもらった緑衣

病院のしじまに滲みる風の彩

弦月よ私になが語りた

高槻市 辻 白 溪 子

聞込みが昔勤めた店まで来

まだ人気があるからスター離婚する

賽銭が届くとこまで出て拝む

花置いてある席ライバルとは皮肉

高槻市 竹 内 花代子

ローソクを米寿の息で吹くケーキ

分骨をされて二ヶ所にある法事

趣味の日と法事重なるパスツアー

うっかりと上つて宗教進められ

出雲市 原 独 仙

孫十五誇大妄想それも佳し

その家にはその屋のしきたり過疎に住む

春や憂し別れた女の計報聞く

紫香氏、雀踊子氏に逢う

久方に大阪弁と出雲弁

出雲市 石 倉 芙佐子

夏が来てもまだ話せない一言を

我が家にも恋に恋する娘は十九

どの道を辿つて見ても同じ月

悪筆は鞭打症のせいにする

岡山市 井 上 柳五郎

自己弁護開きなおりの虚虚を組み

迫真の演技虚構を組みたてる

伝統へ温古知新を入れ継がれ

雨雨雨三連休も若葉ぬれ

岡山市 行 吉 照 路

ルンルンセールス陽気に駆け出せり

新緑の画布に出番の幸を知る

駅長の振り出し無人駅に降り

老兵は使い捨てなり会社です

岡山県 岩道博友

人間の枯葉で旅はまだ達者

お茶だけと言うて男の靴脱がす

傘一本探す時間で乗り遅れ

素麺を食べに帰ればすれ違い

岡山県 二宗吟平

おおらかな心になろう深呼吸吸

よい悪い運三叉路に来て迷い

汚れ水に慣れて清水に寄らぬ牛

心経の合唱柳師の訃を悼み

守口市 羽原静歩

草の根の声は知らない円高に

老いの坂自作自演の影法師

奨学金恩を忘れた顔ばかり

血糖値そろそろ老いの坂を知る

守口市 野呂右近

忘れたい忘れたくない過去を持つ

喜寿過ぎて婦唱夫随も苦にならず

独り言言ひ独り書く雨の午後

蕎麦枕してふる里の音を聞く

米子市 田中亜弥

無口ですが言葉の数は知っている

バランスへいたずら好きな風がくる

親不孝で水がさかさに流れ出す

築地松の緑が過去を知っていた

榎原市 岩井本蔭棒

こころ急く朝を縛れる糸である

新人を組上に乗せるティールーム

安全な場所では旗色見比べる

うつ病の条件はみな揃ってる

呉市 横田英詩

肩書の重さよ羽目が外せない

命名の由来はとある物語

絹を着て絹の肌ではない女

革新の軽さを笑うヤジロベ

宇部市 平田実男

椎の実とどんぐり森にもある派閥

母の目が嘘発見器より恐し

癌という言葉を医者も避けたがり

日の丸の旗を見下げる鯉のぼり

町田市 竹内紫鍔

好きな数字のわけは名打者

窓際を去り消息を断つ

黙禱さすは無理な老若

そば処とは水だけ国産

仙台市 川村映輝

敷かれてる男ダンスがうまくなり

栄転は単身左遷は家族つれ

円高に笑う社長と泣く社長

頼られて頼っているから老い楽し

今治市

越智 一水

嘘言うな言うなとゆれるイヤリング

女ごころバス停で編み駅であみ

頂上は近いと登る人に言う

僕よりも母相談は妻にかけ

新宮市

川上 溪水

不況風私もあつさり飛ばされる

呼吸しているから死んだ気になれず

成り行きの怖さ自殺など思う

自殺記事私を誘っているように

玉野市

小谷 仙山

すばらしい仲間と思う鬼と思う

若葉風余白は広くあけて置く

可愛さがくい違つて居る父と母

満ち足りて私の影が見当らぬ

浜田市

佐々木 裕

鎌と鋏錆びて土地成金を生む

猫撫で声これからが正念場

適齢期待つは待つとは毛糸編む

とほけても目元口元隠し得ず

奈良市

森田 カズエ

スパイスに頼る夫婦の共稼ぎ

イロハニホ昔たて書きしたノート

宿命と思う器用で貧乏で

新年の賀状に揺れる文字が無い

七尾市

松高 秀峰

両親がなくとも二人の金屏風

優勝の裏にしごきの記事があり

先生と町で出逢つた立ち話

ダイヤナ妃去つて息抜く警備陣

弘前市

田中 叶

家政婦が二階で日記読んでいる

終列車降り自転車鍵がない

母とよく風呂の帰りに見た夜汽車

夜桜の陰にいつしか来たボート

西宮市

野呂 鶉汀

形の良い口で美人が毒を吐く

虫籠の中の虫からにらまれる

燃えつきた不倫静かに外は雨

迷い子が親を捜していると言う

羽曳野市

中村 優

薬包紙姿を替えて鶴になる

嗤わせるこつは哀しいピエロだな

素晴らしい知恵が湧くまで待つ紫煙

テレホンの声は美人にしておこう

境港市

細木 歳栄

妬心発止はつしと卵割る

紫陽花よあの日おまえに欺かれ

風かおる心の襷をこじあけて

海のたりのたりと暮れておぼろ月

神戸市

仲 どんたく

旅カバン景色のカタログ見てかえり

駘蕩に溶けて化身の蝶となる

ウオッチングの中で孔雀は演技する

チェーンソーいまわの木の声聞いている

兵庫県

中 田 白 李

筋書きと違うセリフが炎えてくる

肩書が消えると変る酒の量

蹴とばした小石が行先聞きにくる

子育てを終えて座席に荷物置く

宝塚市

丸 山 よし津

手の届く幸せだけで満ち足りる

缶ビール対話の要らぬ喉を越す

世帯持つて母はいいもの長電話

風みどり弾む若さと乗り合わす

枚方市

二 宮 山 久

社訓にはないが受けつけ美人いる

ライバルが先手とつてる棒グラフ

グループの中に気になるのが一人

冷蔵庫詰まるふる里宅急便

大阪市

柳 原 静 香

指をさす指もみどりの風の中

吊橋のときめきもなく手をつなぎ

街の軒泳ぎきれない鯉のぼり

大阪市

坂 本 仙吉郎

十字路で気ばかりあせる老いの足

長崎の鼻は台風御幸筋

名匠あり伊部の里に立つ煙

大阪市

中 西 兼治郎

ジョギングに楽しみ添えてくれる花

竹に雀都会の雀竹知らず

み仏も古都税だけは匙を投げ

大阪市

塩 田 新一郎

倒産工場煙突だけが毅然たり

席につき隣の鯛と見くらべる

燃え尽きた体を茶毘で又燃やし

大阪市

北 山 悟 郎

国鉄がもみ手の商売やらされる

自分が自分の影に苛まれ

根廻しに何時の間にやら輪の中に

大阪市

吐 田 公 一

控え目な言葉の中に母の芯

父と子のかけ違つてる釘穴

しっかり者だった母への迷子札

大阪市

板 東 倫 子

一周忌待たずマンションになる旧家

我が子でも新人類と思うとき

民営にすれば儲かる御商売

大野市 町田達子

亡母思う紫陽花寺の昼の雨

思い思いに丸い話へ咲かす花

湯の町で空似の人に騒ぐ胸

大阪市 古川美津枝

魅せられてダイアナフアッション五月晴

ヘルスメーター五月無言の飛躍する

可愛らし天井カメラは紙相撲

島根県 榎みどり

歳時記へ母の歩んだいろは坂

七色の風に標的見失う

赤ん坊の目に魅せられて去りやらず

島根県 岸本輝水

その内に何んとなつた過去ばかり

民営化日の丸さまが邪魔をする

点滴のリズムが狂う笑い声

島根県 松本文子

急ぎすぎて鬼と握手をしてしまい

見わたせばやたら哀しい文字ばかり

忘れたい地獄仏の顔をして

島根県 北川民子

まだ稚い言うだけ言わすばんのくば

琴線に触れる十指がやわらかい

底辺をかばう女の泪つば

富田林市 松本今日子

過保護等知らずに伸びた麦畑

神代から男女のいきさつありまして

ポケットのハンカチやさしい風に逢う

富田林市 新開千代女

娘がくれた少し派手目の傘が好き

花も木も水とお日さま待ってます

中味より箱が立派なプレゼント

富田林市 片岡智恵子

片方の耳で聞いている愚痴話

耳元のあついセリフに酔わされる

国なまりミキサーにかけた人工語

和歌山市 坂部紀久子

コーヒーを挟んで生い立ち聞かされる

網の目の様な女の内緒事

舞扇閉じるけじめの音である

和歌山市 山川克子

人裁くあなたに落度ないですか

遠ければ遠い程よい愛の旅

一言に二言三言釣りがくる

和歌山市 後藤正子

こだわりのない大らかな語り口

かなわない相手だと知る波の音

選択の自由に自由縛られる

姫路市 大原 葉香
積んでは崩し積んでは崩し老いの夢

飽食の一家を狙う罌がある
人間という大敵に山は泣き

姫路市 松浦 輝月

帰国してわが家の新茶に生き返る

溪流と青葉に心洗われる

早起きで洗濯好きな若葉風

姫路市 丁坪 サワ子

友の影踏まず遅れず従いてゆく

亡夫呉れた余生の花を枯らさずに

ダイアナのブームの去った日のうつろ

吹田市 茂見 よ志子

こだわりは捨てよう広い空がある

ブラジャーがあげ底の役よくはたし

色褪せぬ余生にしたい種を蒔く

吹田市 園田 文子

罪ふかく滝に打たるる背の重み

母の待つ能登はやさしや土までも

植木鉢穴にみみずの春を待つ

西宮市 朝山 千世子

ダイアナファッション國中湧かす五月晴れ

老いらくの恋も又よし老化ふせぐ

八十路来て昔の派手な服似合う

西宮市 津山 冬子

森林浴生きるよろこびさつき晴
台風の目になりたがる人がいる
いつまでも友でありたい無心ける

倉敷市 小幡 里風

葱坊主頭で五月の陽をはじき

檜山へ行く近道は通らない

捨てられた目なしタルマに罪はない

寝屋川市 堀江 光子

近づいてみればレールは同じ幅

大人しい子のきっぱりという返事

返事書くことで心のけじめつけ

寝屋川市 岸野 あやめ

プレゼントいつも女は分がわるい

咳ばらいイエスでもなしノーでなし

この気持ち察して欲しい生返事

羽曳野市 佐野 白水

小女に似てカキツバタ清楚なり

あやめよりカキツバタの可憐さを好み

天皇が来るから野犬も捕えられ

羽曳野市 田中 隆二

煩惱を幾つ消せるか座禪組む

ふる里の味並んでる炉端焼

母の忌へ新茶の香り流れそめ

神戸市 山口 美穂

今更の涙を亡父に笑われる(亡父の一周忌)

内緒話をきいてイヤリングが揺れる
耳よりな話は一応疑おう

神戸市

山片紀雄

自販機は折目ない札ひったくる

世の中はとかくうるさし趣味に逃げ
食べて寝るただそれだけの福祉国

芦屋市

竹中綾珠

五月嵐琵琶湖を満水させて去る

留学の孫円高に助けられ

姫達磨達磨と結婚すれば良い

呉市

林野甦光

富士五湖の一つは雨に散りけり

犬も兎も寛ぐ草に足を投げ

むらさきの長き花房不倫めき

倉吉市

野中御前

男運うすい女の太い指

マジシャンの指からもう白昼夢

菜の花のムードに酔うた物忘れ

羽咋市

三宅ろ亭

粗大ゴミ扱い休日続くとき

長雨へ小さなストーブ出してみる

息子へは叱咤の電話たまにかけ

河内長野市

井上喜醉

でしゃばりの鼻に付いてる自己主張
老兵は弁当持参の職でよし

看護婦がクスクス大きな腹まわり

福岡県

横地雅風

廃止線できたら迂回の交通費

一一〇番来れば千鳥足が居る

不幸重なれば邪教のタイミング

貝塚市

行天千代

あの世でも宴会しよう花の墓地

母の日へ姉妹何やらひそひそと

良く食べて良く寝てその上やせたがり

岸和田市

芳地狸村

万葉を偲ぶ自慢の粥料理

お隣の温みが判る笑い声

拓本にはずんだ声の文学碑

和泉市

岡井やすお

国と国ここにも矢張りいじめ見え

殺し合う国に心の未開発

勉強と野球どっちの名門校

高石市

浅野房子

化粧塩振られて鯛はピンと焼け

友達を立てて亭主にうとまれる

桜散り毛虫が残る世の中で

堺市

柿花紀美女

老醜は見せたくは無し朝の櫛

日向ほこ隠閉すれば茫々の刻
まな板のリズムあせりの音がする

出雲市 板垣夢酔
会葬の読経に負けぬ蟬しぐれ
不倫かと思えば二度目の妻と言う

賞味期間過ぎた夫婦の倦怠期

米子市 金山夕子

実年に罪は持たない幕開き

目標に母のころを入れておく

確実な答えないまま朝がくる

鳥取県 土橋 螢

七光りする虹かけて渡ろうよ

夏至といういのち一番長い日よ

水中花恋が悲しいふりをする

兵庫県 藤後実男

それからの女の旅がまだ続き

口下手でお祝十分入れておく

決心をしたリーダーが還らない

尼崎市 伊藤春子

古稀ひとり雛を飾って春の彩

ゆきずりの歩調が合うた花あかり

予防線越えた無心の目に負ける

豊中市 上田登志実

根の生えたように禅僧街に立つ

率直さすぎて誤解の種を生み

若嫁もきつと姑になるだろう

交野市 山本テルミ

風が優しい団地サイズの鯉のぼり
時折りは息子の蔭口嫁と言ひ
見栄張って心淋しい団地妻

岡山県 直原 七面山

愛の目にシクラメン

雪を蹴る赤いマフラー

愚痴の捨て場を探す人妻

川西市 松本 ただし

亡妻を偲ぶ

本人に言えぬ涙の嘘もある

嬢天下それで持った屋台骨

その日からやめと言われる夕時雨

高知県 曾我部 裕

汚職議員それでも推すと言う地元

この辺で妥協をせねば外される

結局はわが身を守るための嘘

大阪市 坂本 仙吉郎

大鳴戸見下す海は渦もなく

国生みのオノコロ島に国分寺

島根県 城角 鶏生

でこぼこの石で庭師に見染められ

咳払い聞こえて押売背を向ける

高知県 小澤 幸泉

石ころのころを知った雨の道

初夏の風酔いにやさしく通り過ぎ

自選集

八木千代

風のことばを旅の火種として溜める

遠野からじつとわたしを見る私

ひたひたと私に迫る水の音

帆船の骨組をみて納得する

始末書を書いて眠れという枕

小出智子

五十九歳まだ花火には点火せず

五十九歳これから川へ洗濯に

まだ返事届けに來ない郵便屋

おふくろの味で息子と握手する

五十九歳還らぬものはいとおしき

月原宵明

すばらしい夕陽広場の無い子供

酒の味男が馬鹿に見えてくる

坂登りきつたら後悔もうしない

誘惑に勝った我が家がうす暗い

キザな男の背広の襟が折れてない

金井文秋

長生きの出来る話へ耳を貸す

憶病になつてきつちり薬のむ

雑学の知識をクイズから貰う

脇役に徹して我慢強くなる

体調のリズムが連休から狂う

尼緑之助

前身は毛虫ひらひら初夏を翔ぶ

グイアナの演技堂々翔び回り

円高の嵐列島まぜかえす

女子高の既に受けつぐ長電話

深山のみどり大きく独り言

藤村女

京の寺簪目美し枯山水

波静か浮かぶ屋形の嵐山

母と娘の話題に夾竹桃がもえている

朗かに生きて歳など考えぬ

遠ざかる尾灯に手を振る子と孫と

川口弘生

B型の夏の女神はルビー好き
前任の努力に重い椅子と知る
故郷の浜を団地に奪われる
創生の神の恩説き病床の
点滴の正体怖し女神像

正本水客

酔わないうちにと盃を置く
耳底に残る善人らしい声
おさなりの咳を少うし足しておく
愛情の不足をおんな口にする
川向うの灯が点々と身に滲みる

小林由多香

雑草の強さ土など選ばない
句読点打って小さな風を待つ
師の目にはひよこ出る幕もらえない
左遷地へ人形の鼻欠けて着き
看病のあくびとあくび峠越す

黒川紫香

また誰かハワイへ行くの飛行雲
いい天気ですなと見知らぬ顔が言う
日本海ですねと波の音を聞く
乳色の外湯に浸かる朝もよし（温泉津温泉）
芋代官の話でこころ救われる（石見銀山跡）

市川鈴魚

老いの旅する思いの曼珠沙華
此の辺で止めたい猪口が裏返る
人のよき父家中の瞳で支え
椅子の軽さで気ままな首を振っている
誤算でも最後の鍵は放さない

本田恵二朗

さりげない気遣いだから温い
妻老いぬ亡母の形見を着て似合い
頭痛種の押売りしあい長い友
背に腹を上手にかえる技を持ち
球春来テレビの前で老いも燃え

児島与呂志

妻が居る安心をして戸を開ける
初夏の妻沈黙ただだ毛糸編む
騙された欲を笑えぬ老いを持つ
気がかりないじめにじっとして居れず
手ぬかりを男の酔いで済まされず

工藤甲吉

天皇も人父よりという手紙
割箸の仲も割られるところまで
辛党は孫じいさんに似てござる
不祝儀でないから義理もよしとする
激昂はつんつるてんを殴られる

大矢十郎

藤井明朗

念入りに恩師の便り封を切る
人を知るにやはり古きを尋ねねば
電卓を横に商談五つ玉
カラオケバー欲求不満歌に乗せ
頼もしきかな婿達の鞆並ぶ

野村太茂津

水粉千翁

うとましい話届けた苦勞性
邪な風を切つてて怒り肩
手探りはまだ続いてる凭れ合い
聞き飽きた科白も真面目に受けておく
争いが出来る相手が居て楽し

長野文庫

米澤暁明

番犬も腹が太いと眠りこけ
豚まんのまるさ中味にユーモア味
殴られた二人それから仲がよし
司会者の訛りに和む同期会
死を選ぶそれも一つの道かいな

山内静水

高橋操子

ああそうか母の日だった灯を消して
食べて寝てしつぽが生えないのが不思議
旦那氏の目に職人の落ちた腕
じゃんけんをして結局は負けました
これからが本当の夫婦掌が合わせ

公園の眺め景気見えかくれ
家族の和大事にコーヒー好きになる
風はみどりひとそれぞれに和を探す
新緑の巣箱の中に鳥のぞく
ダイアナ妃にほんへ残るフアッション
この辺で見せしめという親心
古き良き時代老眼鏡のぞく
さしかける傘へがくあじさい歌う
ひと刷毛の水色にこそいのち棲む
この道の遠きを愛すべし素足
春闘よまず桜でも見ませんか
辻堂は何か異変のある舞台
炊飯器こげ飯少し食べたいよ
葉桜へ雨おちつきを取り戻し
尊敬と別先生と呼んでおく
ダイアナ妃のおしゃれ水玉好きになる
一宿一飯が適当という子のホーム
ブレハブは親住まわせる四畳半
母の日の花はリボンで持ってくる
気ぐみした動作むなしい日の母娘

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

櫻谷寿馬

一日一句を勵行されておられる方、各々の締切り前毎に大活躍の方、一ヶ月に半分以上は各所の句会に出席されている方々、何れにしても毎月数十数百の作品をものにしておられ、それだけ次々と新しい感動や新鮮な発見を続けておられるわけで、考えてみれば大変なことをしておられるわけですね。その大きな努力にお応え出来ない私の非力を悲しく思いつつペンをとっております。

女抱く軽々と抱く羨まし

こんにやくの馬鹿正直は生まれつき

谷垣史好

この人の作品を拝見して何時も思いますことは、寂しい笑いというか、自分を少しいじめておられているような悲しい笑いを教えます。しかも極めてなめらかな調へに、日本人らしいユーモアとでも申しましょうか。「ユーモアは悲しみを知っているが、それは他人を憐む悲しみではなくて、自分自身に對

する悲しみである」誰かの言葉を思い出します。

ポットからお茶も出ません妻は旅
割り勘になると忘れず呼びにくる

高杉鬼遊

今度はドンピシャリ。声を立てての笑いです。大阪人らしい、哄笑でない笑い。かと言ってお上品さを忘れてはいない。赤ちゃんのよう無欲の笑いではないが、他を傷つける無礼さは無い。こんなポットを投げやって、みすみす割り勘の場へ向う一人の男と作者とをダブルセテ笑いころげた私は、ピント外れの低次元の鑑賞者だったのでしょうか。

記念品贈つて職場縁を切り

辻白溪子

何気なく職場との別れのことなのですが、「記念品贈られ職場と縁が切れ」と詠まなかつたところに、作者の性格、現社会の無慈悲、切りという二字の怖ろしさを感じます。

深爪に痛みの残る夜泣きそば

越村枯梢

すらすらと読んでいき、泣きの一字に來てちよつと止り、念のため手許の辞書で見ると「夜啼き」とある。決して作者の意圖を云々するつもりもなく、又どちらにしても大したことではないんでしようが、深爪の句なるが故に夜泣きの方が夜啼きよりはずっと適切だと感じましたので敢て余計なことを申し上げた次第です。

米を研ぐ妻に野心など見えず

片意地で夫よりほかの愛知らず

辻文平

これはこうだと言いつつてしまふ場合、実はこよなき願望を現す場合の裏の表現である場合が多い。況してこの作品のリズムの上からどうしてもしようあつてほしい、あつてくれねばの強さとお好きさに溢れている。どうにでも、仲良くお好きさようにお暮し下さい。思いつつて湖は碧さを増すばかり

一生の願いに弱い父の酒

佐藤藤子

今仮りに極めて大胆な言葉を許して頂けるならば、川柳塔の作品を真つ二つに性格を分けるとすれば各々の側の平均となる要素を持つてゐるのではないでしようか。どちらが古いとか新しいとかでなく、路郎川柳に二つの面があるとすれば、それぞれの一面であるのではという意ですが。

病院の窓口にある命乞い

岩本雀踊子

老人ぶりを装いながらの若者そのものの骨格と筋骨。だまされまいぞ。

葉桜の下の広さへねむくなり

若宮武雄

少しお疲れの様子の五句ですが、お元氣をお出し下さい。

新しい椅子に落ちてたりトマス紙

仁部四郎

だから私も椅子の生活が余り好きではありません。私自身がリトマス紙になつてみたいなあ、とは思いますが。

川柳太平記 (98)

川柳の群像

山本 浄平

東野 大八

「まず、ふあうすと發生の主役をしたといえるものが三人ある。東洋樹さん、素生さんに私（浄平）である。そのうち私は年長者で何かと氣をつかった。その前に私は拍子木川柳社を氣に入らぬことがあって引退した。

ふあうすと創立後拍子木が廃刊になり、中沼芳蛙（大連汽船機関長）さんから君が拍子木をつぶしたのだと、こかいをうけ迷惑した。

私たちは下手ながら色紙短冊に絵を添えたというところで、絵の稽古をすることになり、関雪の門下松井閑月先生を私が知っていたので、灘区のお住居へお願いにいった。心よく引受けて下さったので紋太さんの二階を拝借七、八人が熱心に稽古した。川柳もむつかしいが絵もむつかしい。私がナマズを書きあげたのをみて「浄平さんそれはランプのホヤですか」ときかれがっかりした。

絵の稽古は費用も相当いる。これだけ使ったら川柳誌が出せる。この相談が東洋樹、素生、私（浄平）と三人でまとまり、これがふあうすと發生の糸口となる。最初紋太さんがよい返事をなさらぬ、尻が重い。でも立ち上ることを見抜いていた。ここらは神戸川柳史の裏面史の書きどころだ。

いよいよ発足となると、絵の連中をはじめ皆さんが力を貸して下さった。紋太さんは人望もあり、それに皆が若かったからうまくいった。創立同人18人、創刊号五百部それを私の家へ届けて下さった。百部二百部限度の同人雑誌の頃に五百部は大きいと愕いた。

創立句会は紋太句集わたちの閑心帳に出ている通り盛会で、紋太さんの筆にも安心感がみえる。受付に浄平。司会は夢遊と皆が明るい。（時の川柳）昭和37年11月号。ふあうすと

誕生の前後「山本浄平」

「拍子木」は純川柳人というより、どちらかといえば娯楽雑誌の投書マニアの集団で、そのグループのリーダーが浄平だった。昭和四年「ふあうすと」の誕生で「拍子木」を休刊し、川柳一筋に同誌創立同人として活躍したが、次第に自由律川柳に打込みはじめ、昭和13年3月、親田鶴太郎、石川兼郎らと図り自由律川柳誌「視野」（孔版8頁）を創刊。昭和16年1月には「自由律川柳合同句集」（和紙袋綴百二十頁）も発刊した。

「俳壇の井泉水、放哉、一石路の俳壇自由律運動に刺戟され」「視野」を出したが、これも川柳向上のための一つの釘のつもりで、意欲的に取り組んだ（筆者宛書簡）

この「視野」は、戦後ハガキ版で継続しNo. 284号で昭和53年で休刊したが、夢二郎、徳三、水声らも加え同人20人を擁していた。この「視野」と別に、自由律川柳系列の「川柳うずまき」（香川水声主宰）を昭和28年10月に創刊、ずっとその巻頭を浄平が担当した。（本誌は昭和52年6月No. 227号で終刊）

「ふあうすと」創立同人でありながら、鶴太郎、兼郎、擁一らと自由律に打ち込み、ふ誌同人を抜けて、専ら「うずまき」に拠っている浄平は「私は放哉、山頭火のような遊俳

の徒で短詩型を泳いだわけだ(筆者宛書簡)

山本浄平は本名徳蔵。明治27年2月28日神戸市生れ。初号浦路。その処生上の足どりは詳らかではないが、少年の頃からあらゆる人生の辛酸をなめ、職業も転々としたらしい。

「私は花隈一流の富貴楼の帖場もして芸妓をよく知っていますが、遊びは女郎に限りません。公娼廃止(昭33年)は当然と思ったが、このため離職は辛かった」(筆者宛書簡)

「〇こおろぎに去った女房は無事なそな浄平」私が20歳の頃、半ば自慢げによくこの句を口にしてた。哀愁をこめてきかされたこの句の主と、何年間世帯を持ったかは知る由もないが、その女房といた桶町界限では一人娘がいたが、その三沢美恵子さんも貰い子だったようにきいている(香川水声)

「うずまき」の巻頭言は、彼の川柳趣味をささえた大きな拠りどころであつたらしいが読んだり、聞いたり、眺めたりと穏やかな川柳持論が基調で、彼自身の抱く川柳持論の解明は全くみられない。

しかし筆者あてのおびただしい私信の中には、相当辛らつた川柳界批判がかなり目につく。たとえば叙太の「木の上人間が居り下駄がある」こんな句を手拭いに染めたりしてと亜鈍氏が指摘した通りこれは手拭いにする

ような句ではない。ふあうすとの旗本にこんなことを注意する人物がいらないからだ。東洋樹君は私の古い友人だが、どうも言うこと、書いてることがキザでいけない。詩論芸術論にはからつきしヨワイ私だが、キザな人間は大キライです!こんな調子のものが多い。

「私が『うずまき』を編集するようになって、最初から浄平老に一頁を与えることにした。それが生涯の生甲斐のように毎月書いてくれたのは有難い思いをしたのであるが、書き進むことによって自身尊大が見えてきたのは確かで、ある文章の中で「候」という活字を、昔のくずした字にせよと頑として譲らなかった凄じさを今も忘れない。こんな活字はないといっても、木版にせよと聞かなかつた頑固さには閉口した。木版一個何百円も出す当時の『うずまき』には余裕がない。文章を大事にすると言えばきこえがいいが、融通のきかない自信が多分にあつた(香川水声) このような性格的なわがままは、句会に行つても木戸御免で句会費などは一切払わない!これが当然と考へていたようだ。晩年の彼は、神戸柳界の「大久保彦左」を自認し、その横柄さは、地元柳界で白眼視される因をなしていたらしい。

「〇ベツトに座椅子丹前の私が牢名主に見

られ!病院の句三十句を作つたが、こんなのを発表したら、病気に甘えているとみられそうなのでやめにしました。病院で甘えるどころか死に気づきました。死にたくないが仕方が無さそう。ふ誌創立同人十八人も現在三人生きてる。死んだ同人の中で、生前おしやれで通してきたのが草のわらじに、ひたいに三角のマークをつけて棺に収っていた。私はおかしく仕様がなかった。こんなことを生きている近親者がやってくるのをみてると、伝統と定型を守っている古くさい連中にみえてきた。それといつしよにしてお葬いの場であいがこみあげてきた。

私の知人で金持ちがいて、死にぎわに博士を呼べとわめいているのをみました。情ない往生ぎわの悪い奴だと思つたが、本人は生死の境にいるわけだ無理もない。満開の桜は、散りぎわがよいといわれているが、そう気になつて急いで死ぬことはあるまい。死は枯葉が散る。これでもいいのだ。(筆者宛書簡)

昭和54年10月4日死去。享年85。釈浄平。彼の死について「ふあうす」誌だけが数行をもつて報じていただけである。

米横に米いっぱい毬つき唄が私をゆさぶる

浄平

★次回は「中野柳陽」

誹風柳多留廿六篇研究 (二十六丁)

鈴木 黄・石田晋一・南 得二

小野 真孝・本多正範・石田成佳

大屋 六郎・八木敬一・多田 光

故岡田 甫

431 にくひ事金をしゆもくてかき寄る

鈴木 〓「撞木」は檢校が突く撞木杖の略。

句意は、檢校が高利貸しで、金錢をバツタバツタとためてゆくさまを詠んだもの。

世の中にかねのなる木はしゆもく也

四六七

黒ぬりの撞木でかねがうなる也

九八六八

南 〓贊。撞木杖は勾当の片撞木もあり、檢校にあまり拘泥しない方が良くと思います。

また、その催促が峻烈なので、にくひ事になりまず。

多田 〓贊。

432 何ンの事ハねへ初会は御儀式

鈴木 〓吉原遊里の句。初会は初めて遊女を買って遊ぶこと。

初会では知らぬ同士だから、話題も少ないし客へのサービスもきこえない。だから初会

は儀式のようなもので面白くも何ともない。

石田晋 〓「何の事はねえ」には通人でない客をあらわしているか。

多田 〓贊。

433 よしの山これより上への句ハさす

鈴木 〓安原貞室の「是はく」とばかり花の吉野山」を背景にした句。あまりに美しい桜花のために十七文字でおさまらず、十八文字になったが、これ以上吉野山をほめた句はないというもの。

よしの山十七文字ではめたらす 七 16

よしの山十八文字でとどめたり 一八 39

南 〓貞室の句「これはく」をうけての「これ」であり、「これより上」は貞室の句以上秀れたの意。

大屋 〓贊。字あまりは関係がないと思います。

多田 〓贊。

434 最うよからふと藪入を母おこし

鈴木 〓藪入りから帰って来た息子。勤め先では出来ない充分な睡眠を取らせている母の愛情を詠ったもので、誠にほえましい句である。

藪入ハまさか寝られやせんと起 三九 20
くせに成つてはと宿下り母起し 傍 三 26

おもふさま寝る気ねられぬ宿下

六八11

多田 〓 賛。

435 あくる日の群集ハ聞て来たの也

鈴木 〓 はつきりしない句。

本多 〓 種々の事件にあてはまる句ともとれるが、句調から江戸で起きた事件と限定したい。綱宗が飛び込んだ豆腐屋は如何。

多田 〓 意見はいろいろあり、諸説あるが、私は何となく四十七士と考えていた。

436 むいはくや閑しい程しつか也

鈴木 〓 縫箔屋は縫箔を商売とする家、人。

句意は、このままの情景を詠ったものか。要するに金糸・銀糸を使用して作りだすし

ゆうは神経も使つし、音も出ない作業であるので、従つて忙しい程に無駄口もなく、作業場は静かであらうという所でしょう。

南 〓 賛。

ぬひはくやひつそりとするいそがしさ

天五高2

本多 〓 忙しければ忙しい程、口を聞く暇もない、だから静かになる。

多田 〓 賛。

437 門徒宗の仏壇を三分て買イ

鈴木 〓 私の故郷の新潟県新井市では割合に浄

土真宗が盛んで、その仏壇は誠に豪華で金色に燦然と輝いている。

石田晋 〓 仏壇が三分というのは高いのか安いのか、どうもその点がわからない。

南 〓 賛。

御持仏で稲妻する門徒宗

二七21

門徒衆娘も光るほどみがき

三八11

多田 〓 賛。漱石の「猫」の「四」に、「彼の一家は真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金をかけるのが古例である。主人は幼少の時その家の倉の中に薄暗く飾りつけられたる金箔厚き厨子があつて……」とある。

438 先生お目がさめたかなと玄徳

鈴木 〓 玄徳が三度諸葛孔明の私宅を訪れた時の故事を詠んだもの。三度目に訪問した時、孔明は午睡をしていた。その目覚めるのを待つて始めて玄徳と孔明が面会して、ここに孔明が蜀のために尽すことを確約する。

多田 〓 賛。

439 忠臣ハ根つよく申御諫言

鈴木 〓 よくわからない。忠臣といえは楠公父子、忠臣蔵、児島高德等が有名である。

石田晋 〓 根津宇右衛門の句。甲府宰相綱重の

近習で、苦諫のため毒刃にたおれるも、幽霊

となつていさめたという。為に彼を祭つたのが根津権現。「根津」と「根強く」に利かしている。

南 〓 賛。

忠臣の諫言昼夜根津の番

七四25

御手打になつても消ぬ御諫言

三三5

多田 〓 同。『帝國文庫』の『御家騒動記』所収「護国女太平記」の「左馬頭殿乱酒短慮之事并根津卯右衛門御手討の事」にくわしく述べている。

440 朝くさへる美しい不二の雪

鈴木 〓 はつきりしない。青楼の句か、又は結婚式の翌日か。御教示を乞ふ。

南 〓 不二は不二額であり、不二の雪はその化粧で、朝くさには消えるとのこと。美女朝起きの寝乱れ顔の艶を、不二の雪にたとえた句です。

不二山を額へ書きたい女

三七1

おしろいを雪程にぬる不二びたい

三七26

本多 〓 南説賛。

不二びたい其日ぬつてハ其日きへ

六五4

多田 〓 賛。

水煙抄

黒川紫香選

羽曳野市 吉川寿美

またの世も夫婦でありぬ比翼塚
一寸いびつに夫婦茶碗が伏せてある
いつになく傷まけている紙の鶴
おかめの面裏に泪をためている
お隣の庭の芝生が青すぎる

熊本市 永田俊子

定年を郵便受けがさびしがり
泣き羅漢の肩にやさしい蝶が来る
後塵を拝すに馴れてつまずかず
虚と実の隙間を埋める軽いジョーク
しんがりは情性で歩くストの列

佐賀県 寺中三枝子

逆らえぬ流れに鬼女の面が浮く
酔い覚めの水にも妻のいる安堵
水子考母の乳房の哀しかり
染まりたい朱もあり愛は熟れてくる

飛んできた礫のひとつ温かった

八尾市 高杉千歩

移された風邪を大事に梅雨に入る
弾めない訳は明かさず手毬うた
捨てて捨てて平行線を生き急ぐ
苦労話もやさしく聞こうね雨蛙
父の挽歌麦畑に消え五十年

藤井寺市 赤木和子

春や春君花聾に昇進す
Tシャツを着ると乳房がふたつある
勝ちいくさばかり自分を見失う
後ろにも眼のある人とまづい酒
まなうらに初めて逢った日の背広

西宮市 紀市郁栄

花のない表彰台で燃えてこぬ
料金が読めぬやっぱり酔うている
手をつなぐときに人妻意識する

生ビール職場になにも期待せぬ
図書券二枚これを原稿料という

米子市 小村 てい子

突然に翔び立つ蝶に花あかり
万緑は確実むぎの話し声

寂しくて赤い物だけ見て歩く
柿若葉カーテン揺れてミシン踏む

お花畑で歩くバランス疲れます

吹田市 井上 照子

メロドラマゆきちがいして気をもます

マイホーム建ててステーキ薄くなる

恋燃える舞台に太鼓ドドドド

陳情団ほんまを語る眼の光

野の草を炒めて昔ばなしする

富山市 舟渡 杏花

焼肉の匂い飼いだ弾ませる

余韻なお吹っ切る傘を陽に晒す

グツシュするかげにひっそり妻がいる

湯治場のたがいにかこつ男運

からっぽのびっくり箱で怒らせる

熊本市 大川 幸子

おどけても笑わぬ女よ何思う

餌拾う軍鶏に小鳥の目を見つけ

記念樹の梅が今年は五合程

夜が来て妥協しているのに気付き

オランダ村その気にさせる大風車

熊本市 宇野 昭代

ファミコンでお伽話が風化する

廃止線歩く老婆は振り分け荷

母さんの味がみんなの好きな味

さりげなく触れたあなたの手が温い

医は仁術畠違いの脈も取り

大阪市 清水 康恵

ごとと聞く背ながだんだん丸くなる

手のしわが語りかけてる深い夜

青い風森へ誘ってくれました

弾むのは私ひとりと影法師

陽が沈む良妻賢母の真似ごとで

名古屋 藤井 高子

太陽が好きで向日葵一本気

ロールキャベツの芯に時々妻の顔

はずむ日もあって独りの城の中

エンドマークは水平線に預けましょ

丁々発止と顔は笑っているけれど

長岡京市 木本 如洲

迷信に逆ろうてみる夜の爪

声だけが頑固にさせる父の部屋

内科から外科に廻れば癌と言う

太陽へ散歩れんげの道に出る

浅漬の茄子に明治の朝がある

久留米市 鶴 久 百万両

おしゃべりが近所を汚染して廻る
プロポーズが喉につまって口ごもる
もう一歩きみに近づく旗を振る
魂を売った男の絵は描かぬ
写経千遍女囚に黒い翳も消え

高槻市 川 島 颯云児

先頭ばかり走っていると落し穴
七十の勲章老人無料パス
四人目も不覚でしたと女の子
喝采も花束もなく幕降りる
許す気もないのに娘呼び戻す

和歌山市 桜 井 千 秀

運んで来た風が連れ去る波の音
野いちごもやや自己主張舌ざわり
霧囲気に合うファッションでいいマナー
すれ違うただそれだけの顔見知り
虫観図の視座で広がるはかりごと

大阪市 上 田 柳 影

送られて送って遠い駅になる
小指ふと昔の恋をなつかしむ
追伸にちよっぴりあった思いやり
ニコチンを説き説き医者が吸うている
背信も計算にある年の嵩

静岡市 永 倉 僕 川

意地悪の数だけ罪が深くなる
病み上り無茶に驚く万歩計
よく喋る女笑顔が酔っている
疑いは晴れたが世間の目がこわい
宿帳に妻と書かれた傷の痕

大津市 安 田 志 津

新人の仕事にかけの瞳がきれい
病床へ来てもらえない人があり
水筒の帰りも重いハイキング
粗大ゴミの机の汚れ拭いておく
割箸の真すぐ折れぬ日の不安

尼崎市 山 田 保 蔵

駅前のうまいお店に借りがある
社長室机と椅子も威張ってる
課長さん又あいました縄のれん
ジンマシン出そうな声で夜の蝶
手品師の箱の中にもウソがある

高槻市 河 瀬 芳 子

解いた帯とぐろ巻かせて夕仕度
不器用に生きた見本の高野
今日の憂さ流す女のしまい風呂
雑踏に身を流しても寂しすぎ

京都市 松 川 芳 子

御先祖のおかげ長者にランクされ
騙されてまだ信じたい自尊心

猫寺で野良猫の目に見下され
まんまるい月に愚痴など話せない

京都市 木村 たけし

吊り橋の風を庇えば星ばかり
迷うだけ迷う蒲団は背を向ける
売れぬ絵が一枚部屋に置いてある
再婚といえどめでたい袷縫う

今治市 野村 京子

指切りのドラマが続く花時計
善人で朝は目刺しときめてある
よそ行きの声で受話機を持ちかえる
けんけんぽ少女の石は行ったまま

竹原市 信本 博子

人形を着せかえてみる小雨降る
夕焼けをポケットに入れて夕仕度
春風にわたしの詩集読ませます
和服着る女絵になる竹林

東予市 小山 悠泉

初夏の陽へ真赤に萌える生姜の芽
勝算があるから受けて立つ余裕
山門の仁王がにらむ雨宿り
善男善女もうこだわりはない札所

兵庫県 脇田 米朝

根廻しが過ぎて風向き気にかかり
逆転が好きな野球とフライパン

男つていいな太鼓の乱れ打ち
線香の熱さに堪えている地藏

京都市 小玉 満江

つい見せた女心の一しずく
こころ一番ポケットベルが邪魔をする
水道はきっちり締めてと嫁が言う
若いよとおだてに乗った六十歳

高槻市 笠嶋 恵美子

幕切れの良さで始まる第二章
鬱々と猫の尻尾を踏んずける
口笛を吹こう帰ってきたつばめ
朧月カーテンの影艶めきぬ

岡山市 小林 妻子

いいことの境目にある丸木橋
二十一世紀の夢を貼ってる子供部屋
春雨へ濡れてばかりも居られまい
栄転のつもりか服が新しい

西宮市 松本 一郎

信心が胸つき八丁登らせる
この人を選びましたと連れて来る
宿浴衣小さな孫も旅の人
病む母の記憶は遠い過去ばかり

尼崎市 鈴木 良征

向う岸で誰が唄うかきのき節
賞状の飾った部屋で悦に入る

ナースの顔が菩薩になった二十日間
盾となりし日から老後が暗くなり

岡山県

千原理恵

良い方の癖はなかなか似てくれず
お開きの頃には下戸はもういない
見えすいた嘘に指切りさせられる
宿かりのような暮しをする男

熊本市

黒田緑

若い芽を包んで枯れた草の色
倒影のゆらぎにも似た恋のあと
デパートの鏡に変なわが姿
雑念が遠のいて行く仄明り

広島県

田村新造

植木市春風鉢で持ち帰り
孫五歳どういうわけか章魚が好き
茗荷食べまだ呆けぬこと確かめる
五月晴れ目刺しのような鯉のぼり

吹田市

栗谷春子

淀川の光る左の席をとり

陽ざしぼちぼちバスの座席も考える
バスで一番働きものの面替機
わがままも無邪気に見えてけしの花

鳥取県

太田幸枝

あぐらをかいた男の鼻があたたかい
肩書も机も消えた日の安堵

給料をもらう机を拭いている
あたたかい言葉で錠を開けてやり

熊本県 高野宵草

なに着ても似合う若さが羨まし
キューピットにそっぽ向かれてあせり出し
ここまではビキニこれからストリップ
傷がない手術前夜の腹を撫で

熊本市 北川一進

口答えするには姑まだ元氣
代理でも椅子は招待席の位置
部屋中の壁へ若さがあつた夢
軽い中だったら抱けた孫の守

堺市 小西小雪

定年の夫にこんな癖が有り
小さな尺取り虫がひとり居る
落ちていた豆靴目立つとこに置き
人形が迎え待ってる無人駅

守口市 森川まさお

町名を当て字で請求書が届き
戸を閉める店を見てきた戎橋
風薫るのに絶食の指示があり
背広着た人は公園通るだけ

今治市 月原つくし

恋占いレモン一切浮いたまま
振向いてばかりで橋が渡れない

追憶の小路で拾う恋の詩

言いのがればかりしている愛の曲

鳥取県 羽津川 公 乃

新緑の誘惑熟女髪を切る

ロボットに長寿の秘訣洩らすまい

あやとりの指に広がる夢空間

七曜の番組暗記ああ無職

静岡県 渥 美 弧 舟

人生の厳しさ柳句知ってから

故郷を出た子を待ち侘びて妻と老い

つつましく暮し不義理な共白髪

音楽に明けて句に暮れ日々弾む

大阪市 井 上 白 峰

急ぐのにゆっくり開く自動ドア

念入りに化粧して行く美容院

飼犬の鎖を野良犬不思議がる

弾んだら止まらぬ老いの滑り台

寝屋川市 宮 崎 菜 月

蒨葎草好きで純血守られる

カラカラと回る矢車恋も去り

本物のドラマを照らすお月さん

大阪の匂いをきつつ育てられ

兵庫県 森 脇 和 子

指切りに少し疲れた母子草

草笛が吹きなくなった春の土手

玉手箱と言うからみんながあけたがる
母の味たっぷり詰めてUターン

鳥取県 土 橋 はるお

休肝日を定めてまだまだ頑張るぞ

みんなの箸箱に合掌と書いておく

農協に春闘の旗がゆれている

のどかな日孫と毒気を抜きに出る

伊丹市 山 崎 君 子

袋帯といてくつろぐ茶の香り

老いらくの恋がまぶしい初夏の雲

仲のよい夫婦一つの皿に盛り

さりげなく男の戸籍きいている

兵庫県 奥 野 テ ル

吉報に便乗父の酔い気げん

夢に見る里の小川は何時も春

年金が旅行ブームの波に乗り

やわらかい雨が絵にする菖蒲園

新発田市 上 鈴木 春 枝

二次会でや々と本音が出る無口

エプロンを持参で父母に会いに行き

言うだけは言うてふたつのお茶を入れ

お互いの趣味認めあう老夫婦

唐津市 浜 本 ち よ

わらび狩りオホホぜんまいばかり穫れ

法要で亡母にたっぷり逢うてくる

外食で中流意識少し持つ
冬中を着物で通し背筋伸び

益田市 里 本 たかし

残照があるうち二人の夕餉とる
儲けている社長倉庫の隅に居る
同じ日の同じ時刻に羽蟻湧く
投句するハガキを妻が目を通す

尼崎市 尾 宮 弘 治

一日の無事を喜ぶ作業服
廊下まで古い道具が置いてある
拭き込んだ廊下で母も健やかで
缺より母が自慢の糸切り歯

尼崎市 吉 永 伊三郎

出会い頭の顔が思い出せぬ
香具師の声周囲の顔を手繰りよせ
人並みにかぜを引いてる鼻を持ち
メーデーの旗を振つてる肩車

尼崎市 小 熊 江 美

足癖を知つて靴で歩きよい
逢いたくて招待状を送ります
ひと駅を見送り別れにくくなる
恋文が四月一日に着きました

泉南市 坂 根 流 水

溪流に山の躑躅ははえうつる
駅前の蘇鉄の大葉夏をよぶ

ダイアナ妃時に鋭い目も放つ
人気とは浮気者です雲ながれ

愛媛県 八 塚 三五島

行政をまき込んでゐる土ぼこり
女からのボールを素手で受けとめる
ひとりで歩く町裏の白い道
友情の傘に半分ずつ濡れる

竹原市 石 原 淑 子

いろはには日本語益々好きになり
憶い出が有って焼けない文の束
せめてもの笑顔で送る单身赴任

守口市 結 城 君 子

ジープがとっても好きなスニーカー
とは言うものの夫の帰りが遅過ぎる
春雨を見くびっていたハイヒール

岡山県 福 原 悦 子

逃げ道の一つ残して子を叱り
いろいろな顔もして見るガラス拭き
旅先の淋しさがわく昼の月

高槻市 笠 松 高 子

さかろうてみても私の影法師
旧友と約束ばかりのフルコース
そよ風は隣のピアノ気にならず

桜井市 前 山 美 恵 子

頼もしい事言うてくれるがまだ五歳

ひとりだけ息卷いたとてどうになる
かぎつ子の体操服が白いまま

島根県 小田川 智重子

つい本音喋ってやがて黄昏れる

ささやかなぜいたく独りのお茶をたて

いい朝ですケーキを食べに来ませんか

鳥取県 さえき や え

分校は朽ち花みずきが匂う

水平線のギリギリにいる父の舟

麦の穂がゆれてひとつの旅終わる

貝塚市 池 田 寿美子

ファッションも風もさわやかグイアナ妃

嵐山にて

借景も舌に加えて膳和む

忍の字がわたしの前に立ちふさぐ

高槻市 芦 田 静 江

ラブソング蝶を舞わせた花の彩

はずませた賽銭竜の目に出逢う

大宮人の余韻はのかにお茶の客

尼崎市 森 安 夢之助

失恋をして無茶苦茶に髪洗う

嵩高の薬を抱え旅に出る

夜業して明日を生き抜く座りだこ

和歌山市 森 敏 子

蛍の光流れて帰らせかされる

月の光思いおもいの帰り道
カラオケと潮騒を聞く旅の宿

堺市 桜 沢 あかり

ジョギングのコースポストで折り返し

力にはなれぬが愚痴はきいてやり

母の日に夫がお茶をいれてくれ

出雲市 竹 治 ちかし

カードだけ増えて暮らしは変わらない

苦勞など語らぬ父に増えた皺

菜園で見つけた春に一人酔い

寝屋川市 立 床 晴 風

敵になり味方にもなる浮動票

テレビ部屋客も家族も自由席

ミニバイク路地の奥から出るひびき

岡山県 後 安 ふさえ

達筆の手紙に返事出しそびれ

病む妻のメモを片手に市場籠

百姓の嫁が野菜を買って来る

兵庫県 東 浦 砥 代

茶柱にはやる心を覗かれる

仕返しは伏せて女の爪を研ぐ

なめらかな舌で都会の娘が帰り

川西市 野 村 静 雄

気に入ったおんなが直ぐに席を立つ

気のおけぬ上司は先に酔うてくれ

五十年もつ妬き方を心得る

静岡市 青柳金吾

美味しいね言つて平和な嫁姑

薄味で何と頼りのない食事

死を覚悟したラバウルのテレビ見る

大阪市 今西静子

孫三人音楽が好き夢が翔ぶ

潮騒の宿で別れることにする

思ひ出は繕い上手な母だった

米子市 大田みさと

先輩が親より偉く見えました

高い木に止まりたがつてる小鳥たち

一度だけ炎のような彩を着る

鳥取県 田村きみ子

中流のくらしビールの栓を開け

夏の海好きな水着を又買った

鯛つつく箸幸運を招きそう

旭川市 朝倉大柏

そんなこと言つたかしらと今日の女

左遷への送別会は早く済み

拍手する側にいつでも母はいる

豊中市 辻川慶子

日帰りのミシガンの旅水ぬるむ

妥協する言葉を捜す羽根ぶとん

花時計伝言板に返事あり

豊中市 小畑よし子

あの友もこの友も逝き喜寿の杯
育児書で育て暴力ふるわれる

心配をしないでくれと置き手紙

河内長野市 植村喜代

雨上るますます静かになる夜中

目が覚めて夜中に一句書き残し

派手かなあ娘に買った服着てくれず

大阪市 宮下とし

ありがとういつか役立つプレゼント

プレゼントしてから胸のときめきを

三浪も何の苦もないこの寝顔
米子市 門脇晶子

えさ運ぶ蟻の細道日が暮れる

腹の中知つてしまえばカギ明ける

般若心経心の中に書きのこす

高松市 竹川憲一

こんな娘が息子に欲しい道を開き

買うまでもない立読みで知恵を借り

春暁の詩ふと口ずさむ雨の床

島根県 園山世似

どの花もそれぞれ蝶に慕われる

顔へ陽があたりうるさい春の床

花見客石段さえもおもしろい

豊中市 一瀬福一

胸元にふくらみ見せて卒業日
赤頭巾増えて地蔵に彼岸くる
何もかも胸に納めて春コート

竹原市 岩本笑子

家計簿の引き算をして米を買う
ただいまだいま一直線に母の胸
待つことにくたびれました女酒

岡山県 牧野秀香

一枚を脱いだり着たり花日和
眠れぬ夜思いが廻る走馬灯
いろいろとあったドラマを書いておく

青森県 荒田つる

上野駅ガヤガヤとお上りさん
猫にひざ貸してまどろむ昼さがり
思い出はそぞろ歩きの下駄の音

弘前市 真喜内 實

夜汽車から降りると都狐雨
ビル砂漠野菜サラダの店捜す
湘南の潮におしっこ注意こむ

米子市 川上より子

おさげ髪切って舟出の仕度とや
台本を山羊にたべられないように
切れ味を誇るハサミよ芽を摘むな

岡山県 富坂志重

子と話す若い話題を仕入れとき

境い目をしらぬ草の実こぼれ合い
猫の子を貰い多忙さ倍になり

(前月分)

尼崎市 木下義嗣

つぐないの罪に生きてる独居房
親切に教えた事が仇となり
若き日の手帳に妻の愛がある

尼崎市 木下義嗣

あの山を越えると妻の里がある
バス旅行今日もマイクを離さない
別れ来た女にあつた泣き黒子

堺市 宮本かりん

口をあけさせて歯医者が問うてくる
孫にだけ頑固な殻を脱ぐ夫
船頭へはっぱをかける川下り

呉市 蔵重成人

銃口を向けて平和を説いている
藤棚の花で紫好きになる
一つの絵保母は上手に読んでいる

寝屋川市 太田藍子

待つ人のないアパートの鍵を開け
自分だけ取り残された日曜日
お土産が又増えそうな雨宿り

唐津市 山口高明

ピラニアを飼って女が独り住む
ティーサロン窓に写った無言劇

這い廻る孫に家中踊らされ

羽曳野市 麻野幽玄

救急車二度目も無事に退院し

裏印がないから約束せぬ夫婦

掛け湯もせずにテレビの美女が入る温泉

京都市 小林英子

しずけさの緑の中に影二つ

年金の懐具合で済ます義理

ゆつたりとビルの谷間を浮く機影

岡山県 黒住美穂子

春日傘手に満願の礼参り

朝のバス逢える予感の紅をたす

美しい嘘は女の保身術

青森県 波ただお

散髪の帰り青空いい気分

真直に歩いて蟹に笑われる

スーパで隣の奥さんと並ぶ羽目

愛媛県 石手武

寝返りを打って楽しい夢が消え

なで肩の男に似合わず意地っ張り

真夏日へ挑戦白で押し通す

高知市 北川竹萌

京旅路安らぎ拾う庭の石

あの人が来たなと思う排気音

マスコミも群集の目もダイアナ妃

島根県 喜島ノブ

仲がよく友達みたいな嫁姑

遠慮なく気取らぬ人が声太い

猫の足跡をたどれば金魚鉢

十和田市 阿部進

留守番を犬に頼んで旅三日

給料が上がらずストレスばかり増え

選挙戦昨日の同志と果し合い

唐津市 筒井朴竜

島影を濤へ翳して沓岐遙か

雑草覆う休耕田尻目日銭追う

涅槃像も春眠覚す御開眼

八尾市 椎尾公子

間違つて地下鉄乗りかえ逆もどり

孫からの電話最後におばあちゃん

割かんで乗るタクシーのやかましい

八尾市 鷺見章

母の日の今日寝たきりの紙オシメ

寝たきりに今年も帰って来た燕

廃業の湯の煙突に昼の月

大阪市 島路太郎

コンサート終り公園たそがれる

仏恩をさかなでにする志納金

賑やかに飲んで唄って戦友忌

岡山県 平田たけよ

矢車がカラカラ孫の夢育て
心まで緑にそまり山おりる

針箱の針がさびつく日のあせり

広島市 望月 はるひこ

学校へ行って油を売って来る

プライバシーズームレンズに狙われる

鞭うちにもならず揺れてるマスコット

岡山県 戸田 種子

ばあちゃんの行った母校へ孫もゆき

これでもかと言わぬばかりに降り止まず

我が家には嫁の笑顔という宝

尼崎市 的場 十四郎

誘惑はどちらがしてもよいお酒

不器用な男マイクに馴れている

サラリーマン袋の中に妻がいる

岡山県 松本 元江

五月雨に濡れて程よい遊歩道

脱皮して過去振り向かぬ蝶の舞い

昼下り新茶が香る五月晴

大阪市 榎本 路児

さんりんば割箸さえも馬鹿にして

自動ドアだって不機嫌な時もある

結局は破ってしまった花名刺

西宮市 秋元 てる

涙さえ見せない女で物足らず

花びらの流れて行くのも止まるのも
再婚を涙の渴れた頃と見て

愛媛県 西山 えつ美

調子いいはずの投手が打たれすぎ

電報のような便りを子がよこし

子供の日過ぎてても派手にこいのぼり

鳥取県 鈴木 ふみ子

胃が丈夫歯のない老母の食べっぷり

母の居ぬ郷の祭りは他人じみ

安定剤のんで生き抜く老いの日よ

大阪府 横山 為子

日本に生まれて住んで四季の味

舟遊びツインのビルがのぞき込む

孫からの肩もみ券のプレゼント

大阪府 亀井 円女

亡き母を想う

御先祖さま新参の母頼みます

亡き母よそんなに急ぐと転びます

夢枕同じ時刻に母が立つ

今治市 渡邊 伊津志

国訛り探して駅の中に居る

良い顔をしている鯽の瞳がきれい

一人だけルール守って嫌われる

鳥取県 黒田 クニ子

農をつぐ足は裸足のままでよい

二の腕のきずが半袖避けて居る
休日をつろうろしてて利用され

茨木市

堀

良江

ウエディングドレスは着ない彼好み
娘が嫁って猫と夫婦になりました
夫より猫との話多くなる

出雲市

河原

恵美子

しめなおすネジに願いをこめている
かの山にホテルも建って日暮れる
そうですよ棘があるからバラですよ

山口県

高崎雀声

散るさくら残るさくらを見て酔って
流行を着てマネキンは街に立ち
高級な部屋が待ってる天下り

唐津市

浜本治幸

恐いのはペンの暴力使う人
一抹の不安がよぎる救急車
貿易の黒字国家がうさぎ小屋

和歌山県

山田久子

おのずから決った席につく安堵
神様がよそみした間の事故らしい
解決をせぬまま朝日高くなり

西宮市

飯森泰世

身に付いた労るしぐさの老夫婦
結納の来る日娘は紅をつけ

鼻柱やさしくなでる春の風
つくしんぼう顔を並べて春うたう

出雲市

小白金房子

迎え傘園児の瞳いきいきと
生れ出る仔牛拭きとる霜の朝

鳥取県

乾喜与志

裸夫五人加えて旅の老夫婦
男女同権パパにお乳は出ませぬが

鳥取県

乾隆風

マイカーの上に布団を昼寝させ
じいちゃんもケーキを貰うこどもの日

鳥取県

西川和子

降り続く雨に紫陽花色を増し
微だって生きて行きますご免なさい

新潟県

高野不二

孫に買う土産を嫁に叱られる
乾盃へビールがぬるくなる祝詞

鳥根県

菅田かつ子

鯉のぼり緑の風が美味しいか
また一つ買つてないしょが増えました

岡山県

伏見すみれ

頭脳明晰代役の方が光ってる
参観日うちの子見るにしのびない

鳥取県

津村八重子

野仏の眉に朝露ひとしづく
すべり出たひと言本音かも知れぬ

富田林市 田原久子

淀殿へまいらす文の人間味

ロボットの様なタクシー運転手

和歌山県 森三枝子

ママの顔紙いっぱい三歳児

ワンカップ窓に女のひとり旅

唐津市 相葉あき

マンモス団地同県人という強み

精巧なロボットに職場追い出され

京都市 森川春子

渡し舟の自転車に乗る蝶もあり

引越にため息の出る箱の山

富田林市 大澤三四子

ポケットに幸せ少し入っている

足元を気にして歩く蛇の目傘

岡山県 中嶋千恵子

小説の様にはゆかぬ恋もある

薫風に踊ってるよな鯉のぼり

大阪市 藤森小雅子

チャルメラが何時もの角を曲る音

肩の荷がとろとろ溶けて祝う酒

吹田市 山田里子

犬の恋血統書が許さない

下町に住んで豆腐のりんを待ち

泉南市 中井敦子

混線の電話で受けたラブコール

ふるさとに帰る列車の声高く

岡山県 矢内寿恵子

空想の一時楽しい粗大ごみ

旅の子を追う指先は地図を這う

奈良県 和田萬里

吉野路は葉桜になり静かなり

返事待つポストに今日も夕日照る

兵庫県 北川とみ子

人並みに苦を乗りこえた老いの倅

罪消して飾らぬ心鈴をふる

大阪市 工藤陽子

公園の桜で春を満喫し

公園で四季の移りを知らされる

泉佐野市 大工静子

タクシーのメーター毎に小銭出し

一字毎めくる辞典のいたみかた

大阪市 川原章久

キャッシュカードつい越えている守備範囲

寡黙な上役を饒舌な部下が困らせる

和歌山県 北山凡太

裏を嗅ぎつつ表の話聞いている

結着がついたところで酒が出る

大阪市 田中節子
花吹雪十一階の我が家まで
果て知らぬ奢りへ原子炉爆発す

藤井寺市 菊地繁男

雑草と言う名で生命引き抜かれ

ゆり椅子が満たされた今日を和ませる

樺原市 西本保夫

輪をつくる中にひとつの石がある

横顔がただ美しいひとと居る

大阪市 松岡久留美

見栄っぱり値段で決める物の価値

恩を仇で返す不肖の子を育て

今治市 山田宝保

浮世絵へ心豊かに無駄を買い

蜘蛛の子の生きる自信は風に乗り

(前月分)

八尾市 向井しづ子

けいこ事費用もママは目をつぶる

皆出かけ主婦は寝ようと起きようと

八尾市 向井しづ子

おとろえと痛みをかくす色めがね

やすらかな出勤にある若さ

鳴門市 八木芳水

肩書が付きそれらしい顔になり

身におぼえあつて妻にも角が見え

島根県 森山英子

円高へ労使鉢巻しめなおし
葉桜へ小雀たちの見えかくれ

米子市 宮本佳女男

役立たぬ身だが対応出来る齡

八十路坂ギネスブックの夢を追う

呉市 岡田寿美

親思う子に我を捨て旅に出る

帰り道野菊みつけて安らぎを

河内長野市 大西文次

庖丁の切れ味妻にだけ解り

週刊誌の美人を連れて春の旅

藤井寺市 福元みのる

膝の手を見つめたままで返事せず

何時来ても特別防犯期間中

倉吉市 田中八太朗

やった歩が金の威力で攻めてくる

飛車が成りたいばかりに将棋負け

吹田市 西岡豊

湯に浮かぶ春の女を盗み見る

報酬のない肩書で燃えている

和歌山県 田中隆積

元町のショーウィンドを雀行く

文教地区でスワンが舞いに舞う

茨木市 井上盛雄

この先は自分でつくる道標

良い水が出るまで自分の井戸を掘る

泉佐野市

真崎 浪速子

初孫の成長を見る写真帖

選挙だけに来る握手朝の駅

川西市

田中 喜俊

栄転に赤飯たいて泣いた母

勝ち試合爽快な汗光ってる

弘前市

斎藤 島

万倍になる一粒の種を蒔く

山の動きをスーパードで見て帰る

島根県

岩田 三和

深呼吸吸胸がふくらむ春の峰

迷わずに親から継いだあぜ歩く

岡山県

池田 半仙

旅終り軽い財布と無事帰る

近道で自転車担ぐはめになり

富田林市

友碇 雅子

面喰いで惚れた男もいまは並

中流が問屋へ行つてまだ値切り

島根県

高尾 よし子

こも脱げば覗く牡丹の芽が赤い

喜びの余韻しみじみワイン干す

米子市

神崎 あいこ

あまりにも正直過ぎる鏡だな

ごめんなさいすんなり言つて笑ってる

小さくて大きな母の風呂敷よ

鬼の顔映す鏡もつらからう

米子市

木村 富美子

老母の屁しなびた様な音がする

信仰もやはりお金が要る仕組

八戸市

島田 昭治

春はよしガードの下の連小便

さまざまのこと思い出す花と酒

大阪市

堀口 欣一

埒もない想いで紅を引いてみる

淋しくて孫に電話をかけてみる

大阪市

富岡 温子

聞くよりも打つ相槌に氣を使い

頃と見て出前の届く花筵

八尾市

松下 蕉路

入園児初プレゼント紙カブト

ファミコンを孫から習いキーたたく

豊中市

額田 明吉

聞きたがる子供に問われるいわし雲

春雨が続くとナメクジ這い廻る

大阪市

喜多 佐津乃

新緑と満席で行く水上バス

長谷寺で献花と稚児の行列が

大阪市

渡部 トキワ

フィアンセに会って親馬鹿さけ出し
自販機は冷たくたばこ値上げする

静岡県 丹羽定次

卒業して一人前の人となり
割勘でほど良く酔うて赤い顔

大阪市 平井露芳

購読料小さく書いて値上げする
にらめっこオランウータン笑わない

和歌山市 三谷周三

理学部が天気予報の詳し過ぎ
朗朗と唸る山野の朧月

岡山県 後安江山

優しさが少し気になる子の厄年
嫁ぐ娘にきめこまやかな母心

京都市 山脇正之

夫婦写真金婚記念に額に入れ
老夫婦痴呆防ぎに苗貰う

新宮市 船越正

西日受け豆腐くずさず持ち帰り
失業の娘雨の日旅に出る

寝屋川市 井上すみれ

予感抱く哀し女に有る苦界

大阪市 橋本悦子

処女のように心ときめく宝石展

大阪市 野村八重

氣にしてぬようで氣になる人の恋

大阪市 朝田晃世

春雷は主の心を変えさせる

広島市 花田繁子

桜散り牡丹満開テレビで見

◆ジュニアの部

枚方市 二宮正彦

月りよ行もうすぐぼくたちゆめじやない
父さんと食べに出かける休みの日

大阪市 北夏美
(小四)

たんぼのわたげが風で飛んでいき
なの花の黄色い花にもんしろ蝶

桜井市 前山たかのぶ
(六歳)

百てんをとってはかせになったるで
えんとつのあるいえにすみたいな

桜井市 前山いくみ
(五歳)

ようちえんのカレーからくてのこしちゃう
おばあちゃんのあたましろかったりくろかったり

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

宮園 射月芳

自分がある対象に照射されて映し出された像をあたかも他人の如くに描写したそんな川柳が私は好きである。折角めぐってきたチャンスに槐飯振舞をしたい。

モチーフが突如浮んだ波しぶき

高杉 千歩

ひらめきとはいつてもそんなものであるが、心掛けない人には何もひらめかない生き方が下手でペダルを踏んでいる

木本 如洲

誠実とか正直というのは生き方としては下手なかもしれない。でもお父ちゃんには責任があるのですと働き続けるのである。

こたわっているのは私ひとりの絵

清水 康恵

誰でもそうですよ。割り切ってしまうはこの世は楽しいものであるかもしれないものを。意地をはりひとりぼっちの夜がくる

寺中 三枝子

開け開めの気配に淋しさ分かち合う

永田 俊子

まじめな夫婦にもひよいと隙間風が入る。早く和解したい。愛しているだけに淋しい。温い瞳へ問わず語りに身をさらす

藤井 高子

口ごもる返事は水を向けてやり

桜井 千秀

涙が出る程やさしい人がそこにはいる。再会へ駿馬がロバの貌でくる

舟渡 杏花

昔の神童も今は只の人。歳月ばかりでなく努力と生きざまが人を変えていくのである。今日の夢拾い集めて詩にする

山本 玉恵

一生は今日の積み重ねである。せめて心だけでも精一杯美しく生きたい。夕焼けが綺麗だ。

四季の花咲かせ豊かな人が住む

浜本 ちよ

花は正直にやさしい人を知っている。変る事なく花の心を持ち続ける人は本当に豊かだ。向きをかえ人指し指が身をせめる

木村 富美子

人を呪わば穴二つ。とかく噂話や陰口には熱がこもりがちだ。そんな自分が恥ずかしい。古傷が時効にならぬクラス会

松本 一郎

餓鬼の頃の友達は昔の事を良く憶えている。嫌な事もあったけれど今はほろ苦く懐かしい。ライバルの始まり鯉のぼりの高さ

小 林 妻子

人は生れながらにして平等でないみたいである。けれども氏より育ちというではないかいくさは今始まったばかりである。靴音を待っている人羨まし

池田 寿美子

一緒に居ると煩わしくて愚痴も出るが、さりとて独りぼっちは淋しい。儘ならぬ浮世。定退のどの服着てもみな軽い

八塚 三五島

肩書、それは所詮虎の威、嵌められた首輪は窮屈であった。それが取れた今、身も心も軽い。真実を吐けば訛りもついて来る

川島 颯児

何でもない時は標準語でしゃべれるのに、差し迫って激しくなるとつい訛が出てしまふ。ボケットのへそくり顔を出したが

小玉 満江

目を掠めて溜めた金、でも使わなければ楽しくない。お母ちゃん今日よつと奢るつか。何かある娘にビール酌いでやり

渡辺 伊津志

父にとって娘が酌いでくれる酒は何とも美味い。その娘に今日は酌いでやる。父は何も言わない。父娘の間柄は何とも微妙である。客らしい客来ないのに応接間

大西 文次

中流日本の文化住宅 建築家も貧乏であった。それが憧れであったのだ。少々は期待していた玉手箱

山田 宝保

愛染帖

橘高薫風選

今治市 月原 宵明
女もつ躑躅の頃は醒めてゐる
許す氣になつて下り坂降りる
笠岡市 木山 遠二
寝たきりも握り拳はしかともつ
お医者さま患者となられお氣の毒
伊丹市 榎谷 寿馬
煙とはこんなに懐しいもの禁煙
枝豆に生ビールの字よく似合う
青森市 工藤 甲吉
啄木生誕百年手を見つめ
青春はいつもセロリの如くあれ
今治市 渡辺 伊津志
囚われの音に変わった蓑の水
路に落つ声ある如し海紅豆
和歌山市 三谷 周三
雨だれに目覚め点滴かと思ひ
突然の入院汚職かも知れぬ
岡山県 土居 耕花
窓あけて入ればうちかて露天風呂
札束を数えてみたい二本指

寝屋川市 堀江 光子
返事来ずひよつこりやつてくる男
毛筆の手紙へワープロの返事
寝屋川市 岸野 あやめ
叙位叙勲失いしものまた多く
不器用で見てられへんと好きになり
大阪市 小出 智子
酒ぐらい飲んではしくて封を切り
自転車に油を差して思つこと
大阪市 渡部 さと美
いたわつてやろう鏡に傷がふえ
四季咲きのバラに負けない朝のくつ
富田林市 藤田 泰子
芝居みて京都の夜の花あかり
燃えそつなメモがポケットの中にある
岡山市 川端 柳子
それはそれはやさしさのある生き上手
泣きに來て当分ひとりにしておいて
西条市 片上 明水
定年後遊ぶ帽子の数が増え
替えられた靴がそのうち慣れてくる
平田市 久家 代仕男
蜷酒届く辺地の診療所
鯖一匹行商鉢に伏せて去ぬ
吹田市 後藤 火鳥
寝そびれて冷酒一刻春深し
高齡の仲睦まじきに嫉妬する
豊中市 田中正坊
アングルを変えれば魅力のある悪女
お箸とスプーンなれど話が合う二人
島根県 堀江 芳子

祝宴の果てた余韻のなかのお茶
絵ハガキの滝音しかと心打つ
川西市 野村 静雄
綿々と書いて電話で断られ
大阪市 今西 静子
灰皿は裏の裏まで盗み聞き
和歌山市 西山 幸
くたびれたマリオネットの胸のうち
米子市 八木 千代
白い蓮ひらく火花の手くらがり
倉吉市 野中 御前
野放図に開いて牡丹の恥知らず
岡山市 井上 柳五郎
トゲひとつ抜けぬ指から身の疲れ
大阪市 川口 弘生
点滴は疫神に受く手錠かな
高知県 松岡 三吉
泣き笑い人生がある礼服で
藤井寺市 福元 稔
捨ててある新聞阪神負けとあり
唐津市 浜本 治幸
円高の差益を蟻が運んでる
茨城市 井上 盛雄
藤棚の下公達の顔になる
茨城市 堀 良江
牡丹訪ひ見上げて拝む觀世音
尻崎市 春城 武庫坊
ありがたい法話が耳に残らない
島根県 小砂 白汀
どぶろくの味も知つてるベレー帽
西宮市 奥田 みつ子

振りむけばかくれた敵が数を増す

米子市

林

瑞枝

放心の背広にでんでん太鼓鳴る

米子市

林

荒介

流れ矢に当ってからの花畑

守口市

結城

君子

中心がわからぬままに豆の花

鳥取県

新家

完司

伝説の島の泉がまだ涸れぬ

高石市

浅野

房子

愛憎もいつか化石になっている

和歌山市

後藤

正子

食欲が戻ると老母は母となり

唐津市

仁部

四郎

夫婦旅エロティシズムは罪ですか

唐津市

相葉

あき

へそくりの額も段々ばけてくる

唐津市

久保

正敏

保育園もつ横文字で攻めてくる

羽曳野市

吉川

寿美

次女に女の孫誕生

和歌山県

北山

凡太

慌てたか忘れものして姫だるま

八尾市

向井

しづ子

均等法職場の花が散りました

米子市

木村

富美子

菊の苗ひとはち情緒不安定

岸和田市

古野

ひで

青い日の思い沈めた里の川

益田市

里本

たかし

ささなみをたてて夏の日待つブルー

益田市

里本

たかし

吊り橋を見上げる時に歳を取り

尼崎市

春城

年代

お祝いのはがきの文字をそらんじる

鳥根県

堀江

正朗

人並みに気疲れもして生きる幸

唐津市

山口

高明

我が家の中も刑事の眼で眺め

奈良市

森田

カズエ

聴診器もほっとしているいいリズム

岡山県

松本

元江

師を偲ぶ山に白百合咲き初める

寝屋川市

宮尾

あいき

母の日に今年も咲いた赤いバラ

川西市

松本

ただし

妻の死を悼んで

藤井寺市

赤木

和子

坂道の途中で俺を置いてゆき

羽曳野市

田中

隆二

文字にすると思いのたけの半分に

和歌山県

神平

狂虎

独り言多くなつたは父のこと

近江八幡市

前川

千賀子

有刺鉄線どうせ器用に生きたれぬ

米子市

川上

より子

病棟のワゴンの食の無位無冠

松原市

小池

しげお

栄転へ桜明日咲く色になり

愛媛県

八塚

三五島

キャッチボールが下手でセールスからはずれ

鳥取県

土橋

螢

どうかこうにか親父の死んだ齢になる

鳥取県

土橋

はるお

父の恩返しは大きい石でする

大阪市

西森

花村

平和論皆に当る宝くじ

羽曳野市

麻野

幽玄

花冷えや薬価ちよつぱり安くなり

尼崎市

西村

かすみ

止り木で脳死の話などしない

佐賀県

寺中

三枝子

銀河越え宇宙へ嫁ぐ日もあろう

笠岡市

松本

忠三

小心にして異議なしの多数決

宝塚市

吉田

笑女

塀とれてこんなに温い風にあう

倉吉市

奥谷

弘朗

針仕事だけで合格させた母

西宮市

松本

一郎

限りある時の重さの中に生き

富田林市

岩田

美代

ネギ坊主まだまだ夢を見るつもり

米子市

小村

てい子

水溜り小学生の声が浮く

岸和田市

芳地

狸村

花だんご女ばかりの緋毛氈

守口市

森川

まさお

旅行して小銭ばっかりたまりだし

岡山県

池田

半仙

右上りの字を書き恋は消極派

鳥取県

さえき

やえ

あのことは風にもらすな花の精

鳥取県

さえき

やえ

掛軸の山水瀉江の舟にゆれ
高知県 赤川 菊野

仏にはなれぬなれぬと影の声
米子市 青戸 田鶴

心の穴つくろいながら花野ゆく
米子市 沢田 千春

ダイアナ妃来て放射能忘れさせ
和歌山市 山口 三千子

淀川は河川工事とからし花
吹田市 栗谷 春子

無意識に昔の住所かいたらし
和歌山市 森 敏子

石女の還暦はころびそうな花
弘前市 真喜内 實

世帯主扶養家族へなり下がり
唐津市 浜本 義美

派手になる妻に合わせた赤い服
吹田市 井上 照子

舗道だに咲く草花の土根性
唐津市 筒井 朴竜

ファミコンの指は素直な反抗期
岡山県 矢内 寿恵子

百ヶ日亡母が唱えし経を読む
岡山県 林 露杖

母からのいつもの通りで終る文
新発田市 上鈴木 春枝

竹を踏む明日へのいくさ踏むように
兵庫縣 東浦 砥代

白過ぎる女の足袋にある覚悟
和歌山市 坂部 紀久子

岡山県 福原 悦子

すがりつつ山道越えるわがドラマ

岸和田市 原 さよ子

期待した養毛剤も効いてこず

岡山県 千原理恵

商魂がしみついて父の指

弘前市 斎藤 島

ビルの窓より青い空見てこらん

大阪府 上江洲 勝子

花束をもらい自信を持たされる

大分県 望月 はるひこ

巻貝を負うと進めるかたつむり

浜田市 佐々木 裕

矢張り女亡夫に隠れて男見

長岡京市 山田 葉子

春うらら正直すぎる古鏡

広島県 田村 新造

古里へ帰れる夜汽車今日も出る

岡山県 岩道 博友

握手にも何処かひ弱な手を感じ

高槻市 河瀬 芳子

花に魅かれる日のイーゼルの軽きこと

海田市 三宅 保

天秤に乗った夫婦の頼りなさ

寝屋川市 江口 度

目に見える煙素直だなどと思

唐津市 小峰 邦子

袴を脱いだ止り木順不同

唐津市 松高 多駄子

酷使すると思ってくれなこれも愛

唐津市 野田 旭恒

旧婚の土産宅配先に着く

唐津市 福島 紀一

春愁や若者たちの死に急ぎ

高知県 曾我部 裕

極限を生きて男になつてくる

豊中市 上田 登志実

梅雨の入りサウナでうんと汗をかき

豊中市 奥田 満女

湧いてくる積んでも積んでもラッシャーワ

宝塚市 丸山 よし津

粗大ゴミ捨てるときつと要るだらう

米子市 光井 玲子

だんがんに妥協しだした父の背

鳥取県 川崎 秋女

からませた指からとける女の譜

投句先 千560

豊中市中松塚三丁目13-15

橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「夜店」選者 橘高薫風

締切 7月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK

発表

大阪放送局「さわやか広場」係

7月27日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

中国 北京・大同 万里の長城 吟行の旅

永遠の都であり、新中国の首都である北京、悠久の歴史を刻む万里の長城、そして路郎曾遊の地、石仏で有名な大同を訪れます。

9月18日(木)―9月23日(祝) 6日間

お1人(全食付・添乗員同行) 248,000円

(申込金 10,000円)

※他に海外渡航費用・中国入国査証代、傷害保険費用が必要です。

■定員 25名(先着順)

■申込締切 7月31日

	月・日・曜	発着地・スケジュール	食事・宿泊地						
①	9月18日(木)	午前：大阪発（上海経由） 午後：北京着	<table><tr><td></td><td>機</td><td>夕</td></tr><tr><td>北</td><td>京</td><td>泊</td></tr></table>		機	夕	北	京	泊
	機	夕							
北	京	泊							
②	9月19日(金)	終日 万里の長城と明の十三陵観光	<table><tr><td>朝</td><td>昼</td><td>夕</td></tr><tr><td>北</td><td>京</td><td>泊</td></tr></table>	朝	昼	夕	北	京	泊
朝	昼	夕							
北	京	泊							
③	9月20日(土)	北京 ++++++ 大同 軟座列車の旅をお楽しみ下さい	<table><tr><td>朝</td><td>昼</td><td>夕</td></tr><tr><td>大</td><td>同</td><td>泊</td></tr></table>	朝	昼	夕	大	同	泊
朝	昼	夕							
大	同	泊							
④	9月21日(日)	午前：大同市内観光 （雲崗の石窟、九龍壁など） 夜：大同発 ++++++	<table><tr><td>朝</td><td>昼</td><td>夕</td></tr><tr><td>列</td><td>車</td><td>泊</td></tr></table>	朝	昼	夕	列	車	泊
朝	昼	夕							
列	車	泊							
⑤	9月22日(月)	朝：北京着 午前：北京市内観光 午後：文芸人との交流会	<table><tr><td>朝</td><td>昼</td><td>夕</td></tr><tr><td>北</td><td>京</td><td>泊</td></tr></table>	朝	昼	夕	北	京	泊
朝	昼	夕							
北	京	泊							
⑥	9月23日(火)	午前：北京市内観光 午後：北京発 夕刻：大阪着	<table><tr><td>朝</td><td>昼</td><td></td></tr></table>	朝	昼				
朝	昼								

※機…機内食

〈申込先〉 ●川柳塔社…大阪市阿倍野区三好町 2-10-16

ウエムラ第2ビル202号室

TEL (06)629-6914

〈取扱旅行社〉東急観光

主催 川柳塔社



■中国吟行の旅への誘い ④

モンゴルの太陽

東野 大八

るとともに、光緒28年（明治35年）露支条約により商埠地として開放され、露支交通の要衝をなし、奥蒙古への公路の基点として発展した。昭和12年8月15日日中事変のチャハル作戦により日軍はここを占領し、察南自治政府を置き、内蒙古を統轄する蒙疆連合委員会の本拠をこの地と定めた。

○オノン河畔の草青く

馬は肥えたり ああ祖国

これは八木沼丈夫作詞の「蒙古青年の歌」のすべり出しである。成吉思汗を賛仰し、蒙古青年の精神作興に献じたこの歌詞の後章に「東野の野を潤す天地」がある。この字句の東野こそ、右の八木沼先生が24歳の私に授けられた筆名である。この姓を私は長い大陸生活において本姓で通し、今も柳号に残っている。「若い君の貌はモンゴル人とそっくりだ」と笑った私にとってのこの詩文の師は、満州時代から私をモンゴルへと指囃して止まなかった。私が召集令状を受けたのは、張家口の蒙疆新聞本社赴任八カ月目であったことを思えば、私の運命はよくよくモンゴルとの因縁殊の他深いものを感じる。

ちなみに八木沼先生作詞には、有名な軍歌「討匪行」がある。どこまで続くぬかるみぞ、三日二夜は食もなく、雨降りしづく鉄兜、

モンゴルの太陽は成吉思汗（一二六―一二二七）である。幼名テムジン。天命をうけた着い狼が、白い牝鹿を妻とし、オノン河の源のブルカン岳に住みついたとする部族の血をうけたテムジンは、モンゴル東部のハラハルジトの緒戦で、全満州・華北の支配者金軍と戦い、これを破りナルキト部族とナイマン部族を従えたことにより、チンギス・ハーンの称号をうけ、大モンゴル国の統一君主となった。時にテムジン四十四歳。（一二〇六）

このあとチンギス・ハーンは、金の首都中都（今の北京）を目指し、二十万の大軍を率いゴビの砂漠を横断し、陰山山脈ぞいに南下

を開始、長城東端に位置する居庸関・張家口を攻略し、この大勝利によって、金王朝および中国の南宋を滅亡させる足がかりを作ったのである。かくて彼の軍は、北はロシアより西はイラン、南は中国という強大な版図を拡大する。モンゴル人は挙げて彼を主聖君（エンケハル・ハーン）とあがめた。いわば彼にとっては居庸関・張家口の華北侵攻作戦の勝利こそが、大蒙古元王朝建国の重要な導因となったわけである。

張家口は蒙古語でカルガン、明代には都統張文が市域を構築したので張家口といわれた。万里の長城に設けられた約三十の関門中、山海関とともに京師を扼する最重要な要害であ

がそれで私の手にした赤紙は、この歌の文句通りの試験をそのまま体験させてくれた。

昭和18年春、私は北京在勤を解かれ、張家口に本社をおく蒙疆新聞社勤務となった。八木沼先生が私への念願だったモンゴルの地を私は踏んだのである。感無量であった。

張家口赴任と同時に、私は北京特派員時代から昵懇だった岩崎柳路氏を訪ね、赴任挨拶をした。全館赤いピンク色の塗装に、東亜会館の文字を浮き出させたキャバレーの経営者が彼であった。豪華な大ホールに私を迎え入れた柳路さんは大満悦すぐさま酒がきた。

「早いもので昭和13年9月麻生路郎先生をこの席にお迎えして五年経った。蒙疆での一番の土産は大同の石仏見物だよ、と大喜びしやはった先生のお顔が忘れられません」

とひとくさり路郎礼賛のあと、私を階上に招き上げた。階段を上るなり私はアツと思つた。そこには約二十点ばかりの全紙大の大きな写真が目白押しで、なんとそれらはすべて路郎先生の蒙疆旅行のスナップだった。古い川雑の表紙を飾つた、あの石窟の露天仏の膝に乗った路郎先生得意の一枚が、この写真サロンの最大の目玉だった。路郎先生が蒙疆を去って五年にもなるのに、その間、この写真

サロンを守り抜いた柳路さんの心証はそも何であつたか。この時の、得意のチョビ髭をうごめかして語る彼の顔を今も私は忘れない。

こうして駱駝の体臭溢れるカルガンの夜の柳路さんとの寧日なき交友の中で、赤帯の佐官殿が登場した。駐蒙軍の軍医少佐の川柳同人小川静観堂さんである。

○蒙古風みるみる山を埋めたり 静観堂
○多摩川の砂利も敷いてる候爵家 柳路
の二枚の短冊が、夜具一つしかない荒涼たる社宅の私の部屋を佻しく飾ってくれた。

張家口目抜きの大通りに君臨する東亜会館前を北の坂口を真直ぐに上ると、戦艦なみの白亜の洋館が威張っていた。ここが私が籍を置く蒙疆新聞本社であつた。この社屋は、邦文と華文と蒙文による三種の日報紙を編集印刷していた。赴任早々、私は早くも一人の好朋友を得た。蒙古系中国人李志乾君であつた。大阪外語の蒙古語科出身である。

司馬遼太郎が何かにこんなことを書いている。「大阪外語に入るとき、蒙古語科を選んだ。ライバルが皆無だったからだ」

私はこれを一読するなり李君を憶い出したものである。日本語と蒙古語はウラルアルタイ語で実によく似ている。パーマネントをかけたような蒙古文字は、元朝の頃、シリア文

字を原型としたもので、母音文字と子音文字を巧みに変化させた美しい文字である、と李君は説明し、私に蒙古語と蒙古文字を教えたいといったが、こちらは酒と女でそれどころではなかった。惜しいことをした。

この李君とともに私は張家口北方二百キロの百靈廟へ取材旅行をした。この五日間の旅こそは後にも先にも一回きりのモンゴルの感銘深い旅であつた。頃は六月酷暑の盛りであつたが、百靈廟のラマ教の大祭のルボが仕事であつた。李君の顔で蒙疆自治政府の近衛兵一個小隊の護衛つきでトラック二台に分乗しての快適——というより地獄の道中だったが、

昼は四十度の酷熱、夜は零下二十度の酷寒が背中合せだった。ラマ本尊は歡喜仏で、巨大な牛鬼に金色の尻も露わな女神が正面からしがみついている壮大な交接の現人仏だ。今日ではこのラマ仏は門外不出の秘仏として固いベールに包まれ、垣間見ることも許されない。またモンゴル人民共和国では成吉思汗は口にするさへ刑罰がまつという絶対タブーの奸雄なのである。モンゴルの太陽はかくして地に墜ちた。ああ。

■参考文献 E・フライリップス「モンゴル史」

(この項終り)

三つの橋

岩井三窓

られます、そのアンチ度が上昇しそつである。甚だ子供っぽくてお恥かしいが、それは桑田のせいである。PLの桑田、そのPLが憎いのである。

PLは、59年4月、大阪市立西商との対戦で43対0というすごい記録を打ち立てた。五回のコールドゲーム、五イニングで三十六安打、六ホームラン。ギネスものである。

その記録試合に苦闘、善戦した大阪市立西商業高校こそ、我が母校なのである。

西横堀川（今は川でなく阪神高速道路となり車が北へ北へと流れている）の清水橋、その西詰に私の家があり、昭和9年から14年まで西商へ通学した。

先日の巨人・阪神戦は、巨人の新星、桑田が初先発で好投、八回迄は完封の力投を見せた。が、九回には岡田のホームランがあり、阪神ファンもこの一打で、やっと救われた思いをしたことであろう。（巨8―神2）

この巨人・阪神戦を見るたびに、いつも畏友、漢介、薫風両氏の顔が浮かんでくる。あの江川をも、愛してやまぬ巨人べた惚れの漢介氏と、徹底的なアンチ巨人の薫風氏。戦局の展開につれて、箕面と岡町の悲喜こもこも顔が交差する。

私も昔からアンチ巨人であったが、今年か

清水橋の一つ北の橋は御池橋。その西に、「笠半」という大きなお茶屋さん、茶舗があり、よい香りを漂わしていた。その香りを嗅ぎながら、目は隣の家へ移る。隣はしもたやで、数奇屋ふうの小さな門構えがあり、石畳が敷かれていつも開き戸は閉まっていた。門には二枚の大きな標札があり、鮮やかなよく分る字で、教育タイムス社、脇田勇、川柳雑誌社、麻生路郎、と記されていた。

家から百米位のところだったので、通学時は勿論、しょっちゅうこの二枚の標札を、お茶の香りの嗅ぎ納めとして見詰めていた。門構えに似合わぬ真新しい標札。教育タイムス社、脇田勇、川柳雑誌社、麻生路郎。十代の

第10回 全日本川柳大会

大会賞受賞作品

島に娘はやらぬが嫁はほしい父母

宇都宮広二

島を去る老医に代り老医来る

三輪よしみ

運命に勝ちぬく強さ車椅子

坂本まさ子

鉢巻をゆつくりほどく覇者の指

北野 岸柳

玉音は神風平和の御代が開け

山口都一郎

神秘の扉開きハレーが去ってゆく

尾花 白鳳

真心に触れると愛の樹が茂る

上杉 波路

対の樹を茂らせておく父の墓

米田 鉦平

でこぼこ道古里なれば苦にならず

宮川 艶子

凡夫凡婦の道に笑顔が落ちてくる

松永 千秋

狂わずに生きて喜劇の中にいる

玉利三重子

花を泣き風を笑って父生きる

波 乱丁

妻の知らぬ箸で女と食べている

間瀬田紋章

箸ではじると茶碗の民話喋り出す

西村 在我

右の作品は、文部大臣奨励賞、



各賞の候補作品です。

川柳大賞、

好奇心は、この家の中に、どんな人物がいるのか、どんな調度品が置かれてあるのか、想像をめぐらしたものである。

その斜向いに石造りの五階建、山葉楽器、山葉ピアノがあり、西へ電車道（南北線）を越えて行くと、婦人科専門の東條病院があった。その東條病院の西に、田頭良子さんが住んでいたという。

御池橋の北には公設市場があり、川添いに四つ橋まで続いていた。

玉子屋の一つ落したあわてよう

という、よく引用される句を作った、ご本人が玉子屋さんだった古い番傘の同人、小川舟人氏も、この公設市場に居られたとのことである。

清水橋の東詰に、川柳雑誌社の異色作家、高橋かはる氏が住んで居られた。高橋家と母は昵懇で、十日戎や節分にはねじり飴、普段は朝鮮飴などを分けてもらっていた。戦中の品の乏しい時にも必ず入手出来た、由緒ある飴屋さんだった。

大阪は轢かれかけてもよいところ かはる
という名句の作家の住居跡は、いま高速度道路となり、びゅんびゅんびゅんびゅんときと際限もない車の洪水となっている。

高橋さんの七八軒南に、昭和初期が大正末期だろうが、曽我廼家五郎劇団の至宝、曽我廼家蝶六が住んでいて、いつも憂鬱な面もちで横堀川の川面を眺めていたという。

御池橋の東詰には、御池湯という風呂屋があった。ひよっとしたら、いや、多分、麻生路郎氏も、脇田梅子氏（勇氏夫人）も、小川

舟人氏も、高橋かはる氏も、田頭良子氏も、同じ湯船に、どつぷりと身を沈めていたことであろう。

清水橋の一つ南の橋が木綿橋である。この木綿橋を東へ二、三丁行くと左手に御津八幡宮がある。小さなお宮さんだが、子供のころ遊び場としてよく通ったものである。

この八幡宮の社務所で、川柳雑誌社の本社句会が開かれていた。例会には、社務所の入口に、大きな提灯が据えられて、ローソクが灯されていた。提灯には、川柳雑誌社とあったが、句会場と書かれていたか、憶い出せないが、その如何にも寂しげな、ローソクの灯りだけが妙に印象的であった。

以前、川柳塔の句会で、この印象を、新選組の屯所のようだ、と言ったが、我ながら適切な表現だと思っている。川柳を知りそめて全く句会処女？ だった私は、この提灯の灯に二の足を踏んだのである。もし勇をふるって入っておれば、私の川柳人生はどうなっていたであろうか。

道頓堀、中座の前に、明文堂という書店があった。ここに毎月、川柳雑誌、番傘、ふあうすと、川柳研究、川柳きやり、と所謂五大雑誌が店頭に並べてあった。昭和十年代の頃である。今、川柳は随分盛んになったと言われているが、この五つの本を毎月並べて売る本屋さんはないと断言してもよい。

関西の雑誌はともかく、きやり、研究など

あるいは、脇田梅子氏あたりの尽力で持ち込まれていたのではなからうかとも思う。この本屋で番傘、川柳雑誌、ふあうすとを購入し、遂に私は、番傘への道を歩むことになる。

清水橋をどんどん東へ行く。心齋橋筋を越えて堺筋までの間に玉屋町があり、共済会というお寺があつて、そこが番傘の本社句会の会場であった。

八幡宮でびびった足は、共済会の石畳にはそうためらいもなく入っていったようである。何故だろうか、これはやはり、運命としか言えないようがない。

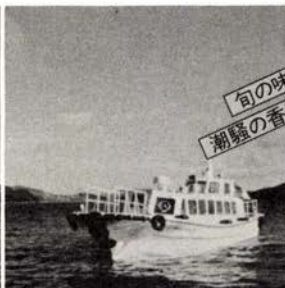
昨日、久しぶりに御池橋付近を散策した。笠半はいまもあるし、山葉ビルは建物としては残っている。東條病院は北堀江病院として健在、八幡宮も再建されて、絵馬がたくさん並べられている。

一番の変わりようは、高橋かはる氏の旧住居付近で、今は大阪の新名所、というか新悪所というか、アメリカ村というのがその辺りである。横文字だらけの看板、看板、性別不明の異様な風体。そう、《新人類》の闊歩する町となってしまった。

軒なみのペンキの横文字に、思わず目を閉じると、ふっと、奇麗なひのき材に、墨痕淋漓と書かれた、あの鮮やかな字が浮かんできた。

教育タイムス社 脇田 勇
川柳雑誌社 麻生路郎

海族のタカラジマ、 鳥羽《答志島》。



旬の味覚を存分に…
潮騒の香りでおもてなし。



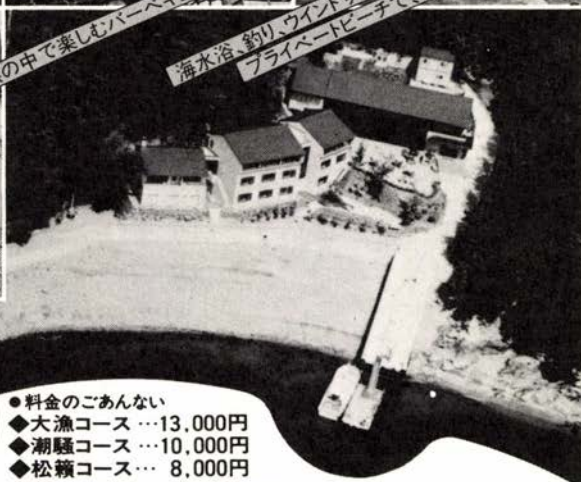
鳥羽第一のフィールドアスレチック。



海水浴、釣り、ウインドサーフィン…
プライベートビーチで、ちょっとリッチに。



仲間と自然の中で楽しむバーベキュー。



幹事さん
ラクラクのご宴会
バックから、ご家族・
少人数さまのプライベート
プランまで、各コース
をご用意いたして
おります。

- ◆料金のごあんない
- ◆大漁コース…13,000円
- ◆潮騒コース…10,000円
- ◆松籟コース…8,000円

※1泊2食、税・サ込です。※休前日は2,000円増です。
※12月31日～1月4日 4月28日～5月5日 7月20日～8月25日は除く

交通のごあんない

- 大阪ナンバより鳥羽(近鉄特急)……………2時間
- 名古屋より鳥羽(近鉄特急)……………1時間40分
- 伊良湖より伊勢湾フェリー……………60分
- 大阪よりお車で西名阪～伊勢自動車道を経て約3時間
(専用駐車場あり)

施設のごあんない

- 全館冷暖房完備 ●大・中・小宴会場、ラウンジ、展望大浴場、
アスレチック、プライベートビーチ、キャンプ場

とっておきのパーソナルアイランド

リゾートホテル



サンペイ島

中勢市豊田公園 鳥羽・答志島

三重県鳥羽市桃取町字平石1591番地
鳥羽郵便局私書箱16号

お申込みご予約は●大阪案内所 ☎06(226)0931 ●ホテル ☎0599(37)3315

メッセーシの憂うつ

紀市郁栄

さきごろ昭和二十年代、三十年代の川柳雑誌（川柳塔誌の前身）と、ふあうすとを読む機会があった。毎日むさばるように読んで、倦きることがなかった。切ないほどの懐旧の情に少し仰々しいが、涙がこぼれるような思ひであった。

古い柳誌を読んで、強く印象に残ったのは文章が豊富なことであった。それはまことに多彩で、百花繚乱と表現すべきか。もともと今日との比較論はなりたないであらう。柳界の変貌が、余りにも大きすぎるからだ。

姿だけをとらえていうと、当時の柳誌の紙幅が30頁からせいぜい40頁程度。その半分、或いは半分近くは文章で埋まっている。しかもそれが斬新でユニークでフレッシユで。

作品は同人と誌友、二つの雑詠欄が主であった。現在の柳誌の在りようは、当時とは比較にならない川柳人口の増加がもたらした、さまざまな現象といえよう。同人や誌友が増えたことも、必然的な結果にすぎないし、それに対応するための作品欄への配慮もつなす

ける。

だがそれにしても、一般論として今日の柳誌は作品が溢れて、文章の貧しいことは否めないと思うのだが、どうだろうか。俳誌と見較べたときその感を深くする。

作品が作者、それぞれの生活詩であるとするれば、文章は柳友へのメッセーシと言えないだろうか。物質的に洪水のような飽食の時代に、精神文化の貧困を唱えているのは、ひとり宗教家だけではない。哲学者、文学者、教育学者、社会評論家達の絶叫が聞こえよう。

社会的な、そして家庭的なメッセーシの憂うつが、傷つき易くて論理の乏しい少年少女や孤独におちいりがちな老人達の不仕合せをどれほど招いていることか。

わたしが真つ先に目を通す編集後記、それは正しく柳友へのメッセーシであり、編集者からのナレーションである。雑誌のあとがきだから、編集にかかわらねばならぬという生硬な観念は全く無用、むしろ自由闊達で、ロマンで、ファンタジーが望ましい。こんな愉快な読物が、なぜ本文に登場しないのか不思議でならない。

「奥の細道」は芭蕉の作として、広く知られているとおり。およそ二百年の昔、江戸から大垣まで、前後七カ月、道程二、四〇

〇キロに及ぶ大旅行の紀行文である。

文中に発句を効果的に点出して、必ずしも旅の忠実な記録ではなく、人間の愛情に馴染んだ潤色のあとがかなり見られる。独特な俳文スタイルで、しかも韻文的なりズムのあるすぐれた散文というのが近世の評価である。

わたしは寡聞にして、これと対照的な川柳家の作品を知らない。川柳作家によって、叙述される長編の詩的散文の浪漫を、想像するだけに楽しいのであるが。

このような名作の詩文は例外として、求めるならば書き手にはこと欠かぬ。十分に潜在しているはずだから、企画よろしきを得ば、本誌三月号や五月号のように、忽ち数頁をエッセイでかざしてくれる。

川柳理論、もとよりけつこつ。しかしむしろ美しい柳論は学者や、研究熱心な川柳作家にお任せしておけばよい、というのがわたしの持論である。川柳をやっているくせに、卑怯な逃避かも知れないが、聞いてもらいたいこととや伝えたいこと、開陳したい意見を、柳友へメッセーシできたらよい。

文章もきれいなことにしたことはないが、少々文脈が乱れていようと、筆者の思いが、読者に響くようであれば、いいではないか。プロのものの書きではないのだから。

いずも創立60周年記念川柳大会参加の記



春 城 武 庫 坊

■五月二十五日(土)

新大阪駅下りホームに栗主幹ご夫妻に紫香、太茂津、雀踊子、凡九郎、三男、一郎、佳秋、女、英子、武庫坊が勢揃いして乗車、岡山で紀雄合流し十三名の一団は「やくも五号」に乗り換え一路出雲市へ。米子で千代、千春両氏より心こもった差入れを頂く。凡そ見込で出迎えられたとのこと。

出雲市駅到着、「ご不自由なお身を杖に託しての尼縁之助会長はじめ独仙、代仕男、多賀子、きみえ、文子の諸氏のお迎えを受け一行は大社線の列車(一輛だけ)に乗り込む。出雲の女性三人は大社、日の御崎案内のため我々同行して下さる。

大社駅でマイクロバス、タクシーに分乗し出雲大社に参拝、境内一順の後、一路日の御崎に向う。途中美しい海岸線に沿って走る。運転手さんが稲佐の浜の神々の上陸の模様を実況放送のように語ってくれる。日の御崎神社に参拝し灯台に向ったが見学時間に間に合わず残念ながら灯台には登れなかった。視界の開けた台地に有名な尼会長の

灯台の夕陽神話を抱きよせる

の句碑がある。一同句碑を囲んで記念撮影。更に足を延ばして展望台よりうみねこ繁殖地

川柳塔社常任理事会(6月2日)

出席者 栗・紫香・形水・太茂津・柳宏子・萬的・鬼遊・岳人・凡九郎・重人・文秋・白溪子・杜的・智子・笛生・寿馬・小路・正坊 一二三・武庫坊・史好

〈議事並に報告事項〉

▽麻生路郎二十三回忌、麻生霞乃七回忌、中島生々庵一周忌に当る来年七月、高野山において追悼川柳大会を行うことになり、日時、会場を別項(表紙裏)のとおり決定。
▽むらくも観桜川柳大会、いずも創立60周年記念川柳大会に出席した紫香氏より報告あり。
▽八月二十四日の茗人忌川柳大会(鳥取)に本社より萬的(お話、太茂津、白溪子、岳人(選者)の参加決める。

■7月の常任理事会は1日(火)

の経島を見物する。今は雛の成育期で七月には南方に去って行くとか。うみねこに別れを告げ大会前日のお忙しい中をご案内して頂いたお三方に感謝しつつ宿舎ちどり荘へ。

夏季専門の宿屋で、ひっそりしているが前は海、うみねこが此処まで歓迎に来てくれる。夜は一軒も店を開けてない静かな岬の尖端、一同談笑の中に明日の出句を推敲して就寝。

■五月二十五日(日)

前夜手配のマイクロバス、タクシーに乗車
出雲市商工会館へ。六階の会場には十時半の
開場前に続々と参加者が席を埋め、あちらこ
ちらで温い挨拶が交される。投句^メ切昼食後、
午後一時開会、出雲市長、小林由多香鳥取県
川柳作家協会会長、柴田午朗島根県川柳協合理
事長の祝辞あり、全国で例の少ない六十一年の歴
史あるいずも句会を運営された尼会長の功績
を讃える言葉が続く。尼会長のご挨拶のあと
黒川紫香さんのユーモアたっぷりのお話あり
披露に移る。

大きな声、小さい声いつも変らぬ披露風景
の中、遠征軍の活躍続々と呼名の声、盛況の
裡に終り六十一年の歴史を祝福しつつ閉会。

遠征軍は直ちに^{出雲市駅より温泉津に向う}温泉津に向う。
駅前より町営マイクロバスで宿舍ますや旅館

に到着、町は海岸沿いの低い山すそに一本街
道が通り小さい温泉宿が並んでいる静かなた
たずまいである。すぐ入浴したが、透明な湯
はあとで聞くとお湯で温泉は女湯だけ、
あとで交代して入るとか、湯の穿鑿より腹の
虫が泣いている。某主幹夫妻を囲み会食、句
会を終えた気安さとアルコールで軽いジョー
クが乱れ飛ぶ。食後、街に出たが、暗くスナ

ック兼喫茶店とそば屋が夫々一軒だけだった。
あとは軒のシンフォニーで温泉津の夜は更け
ていった。

■五月二十六日(月)

五時過ぎ起床、昨夜のお湯に懲りて連れだ
つて元湯へ行く。旅館の並びの先に一見銭湯
風の建物があり、前に由来が記されている。

天和三年御代官由比長兵衛様御入湯

元禄四年浜田城主松平周防守様御入湯

以下お役人の入湯記録が列挙してある。お

湯は自然湧出で淡茶褐色、適当にぬくもって
街をぶらつく。元庄屋敷跡とか往時、石見

鉦山最盛期には大いに賑わった街であらう。

朝食後、車で石見銀山跡を尋ねる。大森代

官所跡の石見銀山資料館で説明を聞き陳列の
絵図や品々で銀山繁栄振りを偲び、羅漢寺に

詣り、龍源寺間歩^ま(坑口のこと)で坑道を中

まで見学し大田市駅に向った。

列車待ちの間、駅前で出雲手打の割りそば

を賞味し大田市発、途中出雲市駅で特急に乗

り換え岡山經由大阪へ。今回は迷子も出さず

全員出雲の皆々様の温いおもてなしを胸に抱

いて帰りました。最後に大会前日から色々御

世話になりました。川柳会の皆々様に厚

くお礼申し上げます。ありがとございました。

第17回

奈良新聞川柳大会

とき 昭和61年7月20日(日) 10時開場
ところ 当麻寺中之坊

奈良県北葛城郡当麻町当麻

近鉄南大阪線当麻寺駅下車徒歩10分

題

「門」前

歌藤 一麦選

「味」方

川妻またし選

「染める」

平井 綾女選

「守る」

稲葉 長生選

「生まれる」

古川 佳子選

「水」

河合 渡口選

会費 二千元(昼食・発表誌呈)

▽欠席投句五〇〇円(切手可)

7月7日必着

〒630 奈良市北市中町71 杉野睦朗宛

※ご出席の方は7月10日迄に奈良新聞社

文化事業部川柳係(奈良市三条町606

電話〇七四二一・二六一一・三三二一)まで

お申込み下さい。

主催 奈良新聞社

後援 奈良県川柳連盟

初歩教室

題 — 公園 —

阿 萬 萬 的

課題「公園」に対して皆さんの句は身のまわりにとらわれて視野が狭く、国立の自然公園や外国の公園等のような雄大な句に接し得なかったのは残念でした。

まず都会の朝は公園のジョギングから
まだ眠い朝が公園から明ける 緑 良
公園を走る見慣れた汗の顔 姿 洋
ジョギングで朝の公園顔馴染み 新 造
公園の池がジョギングの折返し 温 子
公園の常連になる車椅子 稚 代
(公園がジョギングコースの車椅子)
万歩計公園まではもう少し 高 代
公園をぐるっと回った万歩計 だ だ
(公園で見せ合っている万歩計)
孫連れて朝の公園同じ顔 喜代子
公園は近道故の顔に逢い 悦 子
(公園を斜めにいつもの顔に逢い)
それがお昼時ともなると、 繁 男
公園の芝生で〇し姦しい

(小公園の昼〇しは姦しく)
公園の芝生に靴を脱いでみる テルミ
公園の木々の洩れ陽に光る壁 綾 子
(公園の木洩れ陽二人は魚に似て)
公園のみどりの蔭はペアルックで 寿美子
(公園のみどりへ若いペアルック)
水上バス公園横に見て通る 慶 子
水上バス公園の恋見て過ぎる)
だが、公園の昼にはこんな人もいました。
公園で昼寝職安へも行かず 保 夫
公園へ職安あぶれの重い足 芳 水
公園を横切りに来る退勤者 たかし
(職退いて公園の昼そらぞらし)
公園に無冠の今日も恙なし 章 久
(公園の陽は老人の背にまるく)
公園のベンチの人は父に似て 方 子
(銀杏散るちるベンチの人は父に似て)
また、公園の昼にはこんな句も、
メーデーで子供公園追い出され 新太郎
反核の集会公園に団結す 市 雄
(反核集会 大人公園占領す)
そして夕暮れ時ともなると、
公園に子供がいな淋しいね 克 子
子の散った公園元の風もどり 志 重
(子等散った公園元の風が吹く)
公園のブランコ揺れたまま日暮れ 寿 子
パートの母待つ公園に夕陽落つ 稔
下五夕陽落つはちと固過ぎませんか。
夕焼けの公園に子は背を向ける 博 子

公園に独りぼっちもいるベンチ
公園が更けてブランコ孤独なり 新 造
公園は朝昼晩と別に四季の顔もあります。
忘れられた公園の木に風ひとつ カネ
公園の茶店じつくり春を待ち テルミ
(春まだ遠い公園の店戸を閉ざし)
夜桜を昼から陣取り公園で トキワ
(公園の夜桜昼から陣を取り)
公園はデートの季節藤の花 凡 太
フラワーデー川面も和む中之島 明 吉
小公園景色こわさぬ句碑がほし てる
(小公園の句碑へささやく風が吹く)
公園は季節の花が迎え呉れ 芙久枝
季の色をまず公園が塗り替える 八太朗
(季節季節の色公園の花時計)
帰途寄った城跡公園菖蒲咲く よし津
(公園の菖蒲絵になる傘が行く)
公園の若葉かいてる豆画伯 千代子
(公園の若葉へ父子の画架を立て)
公園の樹々に恵みの雨つつく サワ子
(雨上りの公園みどりがまぶしくて)
公園の師の句碑今日もにこやかに 輝 月
(公園の師の句碑季節の風見てる)
老夫婦公園手を取り散歩する 登美子
(公園のみどりに濡れてる老夫婦)
公園で四季を味わうマンション 喜代子
(ビル谷間小公園が四季を告げ)
緑との対話 公園へ来てすわり 久 子
公園に仔犬一匹雨上り 博 子

雨降りの公園も濡れそぼり
(雨降りの公園犬も尾を垂れて)
犬が出たからついでに

糞袋持って公園ひとめぐり

公園へ隣の犬もついてくる

公園の犬が全てを知っている

(公園の小径先さき行く仔犬)

犬が出たので次は鳩

平日の公園鳩とお年寄り

公園の鳩にまじっている雀

あぶれた鳩は公園で眠ってる

公園で遊ぶ児鳩の傷見つけ

(公園で傷ついた鳩児が見つけ)

又、公園は懐かしい思い出をためています。

七色の噴水心にも生きています

(噴水に今も心に残るひと)

元の二人になると公園広すぎる

平和公園アイスクリンが懐かしい

ブランコに揺れて故郷の幼友憶う

公園の隅で指きりした記憶

そして公園には明るさが一杯でした。

憎めない児が公園の花を摘む

公園で空缶風と遊んでる

わんぱくランドに投げ童心を呼戻す

(わんぱくランドの陽が童心を呼戻す)

だが公園も段々他人行儀になって来て...

史跡公園孫の遊びも稚児めいて

(史跡指定になり公園のよそよそし)

周 三

新太郎

実男

隆 積

やすお

太 郎

喜代志

保 夫

里 子

緑 良

寿美子

弧 舟

稚 代

八重子

よし津

寿 子

陽 子

公園に樹齢しのばす注連飾り
公園に格もずしり資料館
(公園に格付けをする資料館)

だが明るいとはかりは限りません

公園のベンチ二人は沈みがち

公園のベンチは愚痴も聞いてやり

(公園の隅のベンチで愚痴も聞き)

肩に置く手に反応もない公園

公園のベンチで馳落ち日時決め

(公園で馳落ち決める人も居り)

公園に女一人が沈んでる

(女ひとり公園の灯に首を垂れ)

楽しい話なら沢山あるようです

公園へ持ち寄る孫のいい話

公園の砂場の母子絵の如く

又、公園にはいろいろな人がいました

公園で気になる人に又出会う

公園に重荷を背負う人もいる

公園で多忙な策を練っている

(三角公園でメモ練っている人がいた)

海の見える公園、墓地公園などいろいろ

公園を歩いて海の見える場所

公園のかたに見えて海の青

(海見える公園二人は手をつなぎ)

(島にある墓地公園は海が見え)

公園を目玉に墓地が売り出され

墓地公園骨埋める日が近くなる

(公園墓地の広告目につく齢となり)

高台の公園 外人墓地真昼

麻 黄

静 江

志 重

久 子

実 男

兼治郎

金 吾

春 枝

カ ネ

房 子

豊 太

八太朗

高 代

太 郎

里 子

輝 月

て る

無縁塚供養のつもりでゴミ拾う
(墓地公園のゴミ拾うてるボランティア)

兵舎あと公園に付テラックス

(忠魂塔もある公園は元兵舎)

被爆跡また不発弾出た公園

(被爆地の公園に出た不発弾)

最後は公園のいろいろと老人の句

公園の予定地があるマイホーム

(公園の予定地もある分譲地)

ビル谷間お稲荷さんもある公園

(公園の隅ちんまりとある祠)

公園は世界に自慢奈良の鹿

(世界親善のひと役を負う奈良の鹿)

公園の隣でカーテン閉めたまま

公園のベンチに坐る共白髪

亡妻と来た公園にひとり佇つ

公園を老いの憩いの場所ときめ

孫膝にそつと乗りたいブランコ

(孫と乗るブランコ風もそよそよと)

題 「封筒」 7月10日締切(9月号発表)

「城」 8月10日締切(10月号発表)

宛先 千598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿 萬 萬 的

恩

仁部四郎選

お日様に花は開いて返す恩 美穂子
恩返し出来ずに重い喪に服す 砥代
ふる里は恩と涙を溜めるとこ 白
御近所のおかげで子等が育てられ 白
報恩へ写経の筆のほを揃え 白
ちちの恩杉の梢で光つて 實
恩讐の片鱗も見ず河の青 虹
洞門を潜る片手に文庫本 高明
旧姓で恩師が親しく呼んでくれ 忠
報恩の術なし恩師の忌がめぐる 元
浮世の義理に先輩の恩受けておく 多
人生の階段恩の石を積み 駒
円高の恩恵も無し米をとぐ 芳
念押して恩売つてもう選挙戦 不二
防衛の恩被せられて基地造り 白
恩を仇で返したような政治劇 倫
兄弟子を痛がらせてる恩返し 子
まだ恩を返していない遠廻り どん
虎の尾を踏んで返さにならぬ恩 ち
助からぬ命もらったメスのあと 公
恩のある人の死を知る地方版 義
子育てのページに沁みた母の恩 森

恩のある人が古傷知っている 道
七転び八起き恩人ばかりふえ 佳
温い一言だった墓磨く 静
恩にきる程でなかったのし袋 枯
恩給を押し頂いて寡婦の夢 あ
恩人の癖を私は知っている 重
目を掛けて出世払いを期待せず 正
優勝旗これは大きな恩返し 落
女だから恩を売られることもある 邦
恩を売るカラスが落ちる町はずれ 規
恩がある人の悲しいスキャンダル 素
親の恩何度も忘れた事がある 雀
軍恩にシベリヤ分も入っている 新
高い木に登って恩を知らない子 三
恩人と紹介されて箔がつき 泰
佳
保険屋になつた恩人から電話 宵
戦時中の恩を脱げない祖母がいる 達
本人の知らない恩を弔詞にし 子
恩があるすこし不安の判をつく 本
恩を売ること手馴れた薄い唇 代
恩師米寿教え子の名を間違わず 可
人 地 住
謝恩会親の苦勞を吊って行き 冬
天 子
恩返し済まして首の輪が外れ 明
神仏のおかげで飯を山と盛り 水

交 替

藤後実男選

人気ある看護婦の交替を待つ時間 規
妻楊子せせり窓口交替し 不
交替は朝これからは父の夜 繁
交替の勤務妻の弁当腹仕度 男
口を割るまで交替で取り調べ 妻
愛憎の染みが重なる回り椅子 多
精巧なロボットに職場追い出され 賀
交替の時は正確渡り鳥 本
交替に孫が出てくる電話口 蔭
椅子一つ栄転 左遷になる交替 優
交替のせりふを準備してる鬼 虹
交替のその一瞬に魔がさして 汀
窓際に居て交替の時を待つ 美
交替で知る看護婦にある個性 可
交替で鶯の声競い合い 住
辛抱の苗を育てた子に譲り 静
交替のときサスペンスが起る 子
最初から交替劇があつた裏 千
番台へ交替待っている若さ 鶴
尻取りに弾んだ孫と風呂の中 男
張り込みの交替パンと牛乳と 静
子が生まれ交替の船待ちわびる 子
一 路

二代目で見せた細腕繁昌記 市朗

役員の交替出来ず今年また 博子

交替へ三番がたは睡魔討つ どんたく

交替のない人生の坂登る 義美

陳列をみどりの風が夏に替え 明水

ありあけの月交替の窓のぞく みどり

点滴の様子見ている父と母 里風

交替のナース目薬さして去に 冬子

四季の彩染め替え新緑深呼吸 寿恵子

交替でめし屋はめしを済ましとき しげお

交替に愛が揺れるイヤリング 文平

交替の筈へ顔出す親でいる 智恵子

気兼ねをしてたら部長に成って来る 与呂志

たのもしい歩幅で交替来てくれた 重人

母さん役交替してのおママゴト 理恵

標札を子に書き替えて喪が明ける 久仁於

佳 ユニホーム疲れて交替するナース 邦子

古葉散り浮世の交替思う春 輝月

交替の裏にあった落し穴 サワ子

交替で風邪を引いてる共稼ぎ 正敏

左遷地へまだ交替が来てくれぬ 白李

人 マルコスの独裁排除アキノ陣 朴竜

地 交替の菌しりを聞く汽車が発ち 雄々

天 交替をする場所はなし核兵器 伊津志

交替で少し濃いめのコーヒ飲む

団 地

片上明水選

東京がいつち大きな団地です

同じ年の子はかり揃っている団地

人嫌いの団地の窓はそれぞれに

名は知らぬままで挨拶する団地

当落の鍵は団地が握っている

決算期卸団地の灯が揺れる

霊園の団地サイズに住む先祖

出勤が過ぎると団地員となる

駅まで五分団地の貌に馴れてくる

団地の窓思い思いの陽の恵み

鍵っ子が帰る団地が冷えている

団地から兵士の服がつづく朝

風鈴屋団地の窓を目で数え

僕の犬飼えない団地大嫌い

たばこ屋に団地の地図が置いてある

異彩かな団地谷間の焼芋屋

鍵っ子が乗れぬ団地の縄電車

今日のドラマが終る団地の灯が消える

寄付帳も右へならえをする団地

八太郎

白李

枯梢

三五島

本蔭棒

虹汀

テルミ

大柏

三枝子

可住

どんたく

ただし

正敏

京子

規不風

米朝

山久

たず子

悠泉

屋上で消える団地のシャボン玉 みどり

酔うて戻ると狸など出る団地 佳雲

最上階で夢をさがしている団地 緑良

居心地よい団地で花屋が二つある 砥代

団地には目刺しのような鯉のぼり 新造

振り返る団地にドラマを置いて出る 博友

草を引く団地の隅にある善意 暁明

ベランダから片手拌みに団地の死 右近

あいさつの上手な団地妻に逢う 里風

団地にも虫が鳴いている夏の風 雄々

故郷捨てた団地いくさのねじを巻く 伊津志

走馬灯ぐるぐる回る団地の夜 裕

団地から働く蟻の列が出る

佳 里へ来て団地疲れの背をのばし 久仁於

団地への宅急便は地の匂い 克枝

どの窓にも仮面を干している団地 雀踊子

団地族風に逢いたく旅に出る 美穂子

ドアチェーン団地に愛が飢えている 文平

人 蟻吞んで吐いて団地の灯が続く 高子

地 来るたびに団地で迷う里の母 宵明

天 裏窓はさびしい団地の風が吹く 実男

軸 絵に描ける山が近くにある団地

柳界展覧

集録・板尾岳人

主権 名古屋川柳社

★第37回柳都川柳大会

日・7月13日(日) AM 10時

所・新潟厚生年金会館

耳(三柳)・女(寿)・ゆ

らゆら(良子)・貝(監治)

生きがい(寒坊)・カド番

(美竹)・雑詠(風柳)欠

席投句7月5日迄・〒695新

会

★61年度噴煙西日本川柳大

日・7月6日(日) AM 10時

所・熊本市民会館

流行・渦・傷つく・楽園(架

空吟も可)・元氣

(2句吐・同一句共選)

投句・噴煙吟社あて6月20

日迄

★川柳いちのみや200号記念

誌上川柳大会

資料・度胸・満足・合図・

口実・数える・意外・終着

駅 切り6月30日

投句先・〒491一宮市商郷町

5-43 酒井政子あて

★堀口塊人遺句集「つくも

帖」が故人の七回忌を記念

して発刊された。和装B5

判一冊千円。申込み先〒663

西宮市高松町3-4-3

堀口富未。

★吉備団子36集(川柳岡山

社)年一度の合同自選句集

で50名の参加者と作品を通

して対話の出来る句集でも

ある。A5判・132頁・頒価

一、五〇〇円

★泉北あすなろ川柳会創立

5周年記念泉北川柳大会

日・8月3日(日) AM 11時

所・堺市梅文会館3F

(南海ナンバ発泉北高速鉄

道梅・美木多駅下車スグ)

題と選者

瞳

眠る

舟

男

掟

泳ぐ

菜

輪

2句・締切午後1時

主権 泉北あすなろ川柳会

▽消息・お便り△

★汐風川柳社主権の第32回

竹原川柳会創立三〇周年

「竹の里」合同句集第二集発刊

山内静水古稀

記念川柳大会

日時 昭和61年9月14日(日) 9時開場

場所 竹原市竹原町新開 大広苑

兼 西尾 栗・石原伯峯

お 三浦 宏選

話 小松原爽介選

場 「情」 森中恵美子選

所 「街」 田中 好啓選

「地」 橘高 薫風選

「学」 各題2句・締切12時

特別課題 「友」 山内静水謝選

(特別課題のみ8月31日必着投句)

投句連絡先 〒725 竹原市竹原町田中

山内 静水

電話 〇八四六一(二)四五五四

★句集「竹の里」ご希望の方には、二千元で

お届けします。

主権 竹原川柳会

主権 竹原川柳会

主権 竹原川柳会

主権 竹原川柳会

主権 竹原川柳会

主権 竹原川柳会

主権 竹原川柳会

主権 竹原川柳会

日、今治市に於て開催、190名の盛会であった。

★浜野奇重氏（弓削川柳社会長）は山陽新聞へ「子どもさん」と題して随想を寄せられた。

★弓削川柳社副主幹山田止水氏が久米南町会議員に当選された。

★7月13日（日）開催予定の寺尾俊平句集「葦川」発刊記念の会「俊平さんのころを覗いてみませんか」は俊平氏入院加療中のため延期されることになった。健康回復後、今秋開催の予定。

■外泊出来る程良転しているのですが、何故かこれにて退院おくれいています。そのうち主治医の御意向で塔社へでも行けるかと思ひ居ります。

（川口 弘生）

■私どもが主催いたします合同句集「風」出版記念川柳大会を御案内いただきありがとうございます。内容ある充実した大会に努めた

いと存じます。

（金栗 雨学）

■初出席して選をさせていだき一挙に15句もの没句佳句があったのではと、没句は両川洋々さんに没句供養でもしていただかねばと思っております。

（前川千賀子）

■先日神戸から大阪へ参りまして川柳塔社の皆様にお逢いして楽しいひとときを過ごしました、いつもありがとうございます。

（八木 千代）

■神戸のふあうすと社の川柳大会で川柳塔社の皆さまにお逢い出来うれしい一日でした。幹部陣の若い力を御期待しております。

（林 瑞枝）

■体調を崩すということは大・小によらずどうも大変なことである。句集発刊までには回復しないことには話にならない。

白い部屋白いばかりの狭が病み

（寺尾 俊平）

■ときせん準賞受賞大会に

大勢の川柳塔社同人のみな

さんが参加して頂き感激しております。ありがとうございます。

5月11日の熱い余韻を胸に抱く

（松原 寿子）

鹿野町みか月川柳会

結成6周年記念大会

日時 昭和61年9月14日（日）9時開場
会場 鹿野町農業者トレーニングセンター

鳥取県高都鹿野町鹿野
電話0857（84）2131
国鉄浜村駅下車バス15分

お話

「太鼓」 西田 柳宏子
「駅」 高杉 鬼遊選
「田舎」 寺尾百合子選

「狸」 小林由多香選
「情」 両川 洋々選
「薔薇」 八木 千代選

特別課題

席題 当日発表
「薔薇」 黒川 紫香選

会費

各題2句 締切11時
会費 一、五〇〇円（軽食・発表誌呈）

懇親宴

会費一、五〇〇円（9月6日まで）
投句先へ予約のこと

★欠席投句八百円、9月1日消印まで
小為替希望。

投句宛先 〒689-04

鳥取県高都鹿野町鹿野一二七九
中原諷人方 鹿野町みか月川柳会事務局
電話 0857（84）2100

主催 鹿野町みか月川柳会

本社 六月句会

六月七日(土) 午後六時

メンズファッションセンター

人間ドックに一泊二日してきたという薫風氏のおはなしは、句を鑑賞することのむかしさ、楽しさといったテーマ。

『古い「大正川柳」という柳誌を見ていて吉川雄子郎の「此の先を考へている豆のめし」という句を発見した。雄子郎には世に知られた多くの句があり、その中にたしか「この先を考へている豆の蔓」というのがあったと記憶しているが、この「豆のめし」は今日我々が食べる豆ごはんを考えると理解を誤る。豆が主で米が従という。そんな粗末な豆の飯と考へてはじめて、当時貧窮のどん底にあった雄子郎のつきつめた気持が理解できるといふものである。主観的な「豆のめし」に対し、「豆の蔓」は客観的で、大きくは自然の摂理をも考へさせる句である。蔓から飯への推敲は三年七ヶ月が経過している』

初出席は井上白峰(大阪市) 波部白洋(大阪市)。呼名賞は佐藤藤子、吐田公一、波部

白洋の三氏。月間賞は正本水客氏が獲得。

(進行「天笑」)(受付「はつ絵・いわゑ」)

(記録「射月芳・健司・山久」)

出席者―笛生・春蘭・柳伸・冬葉・紀雄・いわゑ・はつ絵・敏・健司・康恵・作二郎・雀踊子・喜風・紫香・武庫坊・年代・白峰・杜的・諷云児・白溪子・狸村・満津子・道子・隆一・勝美・太茂津・郁榮・美智子・柳宏子・寿馬・射月芳・三男・英子・水客・池田寿美子・柳影・千代三・凡九郎・みつ子・照子・公一・正坊・吸江・悦郎・白兎・鬼遊・萬的・蕉露・愛論・章久・重人・庸佑・規不風・きよ・三十四・白洋・一郎・勝晴・藤子・文秋・与呂志・楓樂・形水・度・洋敏・天笑・月子・東雲・智子・節子・頂留子・岳人・あいき・山久・史好・安藤寿美子・薫風・英壬子・美代子・寿美・寿子

席題「柱」

児島与呂志 選

ふるさとの柱の疵はよくしやべる
頼りない柱を家族支え合う
柱の傷のこして子らは皆果立つ
北山杉の柱は女の手で磨く
坐る人が坐つて落ち着く床柱
一本の柱で家が建つ普請
門柱の影にひそんでいる小犬
大小の柱それぞれ持つ役目
黙つて坐る男の背の床柱
萬的 千代三 山久 蕉露 杜的 萬的 藤子 智子 楓樂

家訓つき柱こよみにさとされる

落書きの柱を見る通夜の席

話上手で一家を背負う柱です

白蟻が巣喰う柱に住み慣れる

父と言う柱があつて平和です

どの柱欠けても我が家成り立たぬ

一族の大黒柱へみなもたれ

湖の底に眠っている柱

外燈を付ける柱は決めてある

細くても主人の柱よりかかり

蟬がいつかとまつたことのある柱

手袋の片っぱが電柱に掛けてある

これということはしないが柱です

先輩を君づけで呼ぶ床柱

建売りの柱の数がちゃんとする

主柱の添えに成りたいなと思ふ

席題「区切り」

春城年代 選

ここからは誰も入れない仕事部屋
何はとも区切りをつけて酒を飲む
ひと区切りつけて出直す女坂
黒髪やおんなころは区切れない
区切られた女の城が重くなる
区切られた土地に建たない設計図
自分史に区切りをつける定年後
区切りまで読んで捨猫もつ寝たか
区切りなくくらし男が一人住む
子の巣立ち区切りし別れ話など
稜線を区切って違ふ山の色
萬的 千代三 山久 蕉露 杜的 萬的 藤子 智子 楓樂

紀雄

健司

柳影

千代三

寿子

英子

洋敏

健司

はつ絵

東雲

作二郎

杜的

美智子

諷云児

鬼遊

与呂志

柳伸

勝晴

月子

寿子

藤子

蕉露

正坊

作一郎

笛生

公一

杜的

区切られた金魚に値札ついている
働き蜂で仲々区切りようつけず
やけどして区切りをつけた不倫恋
天と地を区切る砂丘の砂ぼり
沈黙で区切りをつけるある決意
この辺で葉の深さを区切らねば
行間の区切り区切りにある本音
偏差値が進路の区切りみせつける
ころにも区切りをつける衣がえ
主家との区切りに亡父の顔がある
たび白く干して区切りをつけた恋
砂時計区切りをつける恋心
七人の敵へ区切りなどつけぬ
死を選ぶ女の区切りとは悲し
ひと区切りつけて蛇口をしめにゆく
定退に区切りがついてフルムーン
人妻と区切りをつける橋渡る
人生の区切りを秘める角かくし
離婚届に区切りをつける判を押す
人生の区切りは女のことにつれ
明と暗区切りを付ける足になる
区切り目に女の謎がかくれている
人間と阿修羅を区切る黒い河
今日明日の区切りきれいに陽が沈む
もめた縁へ区切りをつける娘の荷出し
直木賞女が売られゆく区切り
そこで区切ってそれから考える
他人との区切りボタン掛け直す
生きざまに区切りをつける本に会う

紫 香 柳 宏子 風 云児 吸 江 是 づ 絵 寿 子 藤 子 照 子 天 笑 武 庫 坊 藤 子 照 子 三 十 四 雀 踊 子 健 司 白 峰 重 人 千 代 三 文 秋 与 呂 志 水 客 武 庫 坊 武 庫 坊 度 公 一 作 二 郎 凡 九 郎 智 子 正 坊

男と女区切る大きな深い河
花つらないはひとつの区切り尼の寺
ひと区切りあつて身軽な旅に出る

兼題「下積み」

田中正坊選

下積みで覚えた田い言葉尻
下積みの出番会議の多数決
下積みでいい勤労の汗光る
下積み頃が光っている自伝
下積み耐えた暮しにある笑顔
下積みへ妻は黙って従いてくる
下積みで小さい汚職にまき込まれ
下積みパワで抜ける社のピンチ
下積み苦勞も知らぬ七光り
下積み苦勞を知らぬ高級車
下積みでジョーカーばかり擲んでる
下積み夢を育てる立志伝
下積み苦勞に耐えた芸の中
下積み生活に飽きたクレジット
下積み気楽さ雑種の犬を飼う
下積み頃素うどううまかった
下積みで終りたくないボールペン
下積みが続くタバコは止められず
下積み長い板場の冴えた腕
下積み汗が支えている企業
下積み石が支える天守閣
下積みは下積みなりの彩をぬる
下積みらしい物腰がやわらかい

楓 楽 作 二 郎 年 代 太 茂 津 白 峰 妻 子 三 男 軒 太 楼 智 子 あ い き 与 呂 志 柳 伸 い わ ゑ 鬼 遊 楓 楽 度 雀 踊 子 英 子 楓 楽 雀 踊 子 頂 留 子 月 子 き よ 紫 香 敏 美 代 子 白 兎

下積みの時代美化して立志伝
下積みに耐えて出番を待っている
下積みの父たのもしめし茶碗
下積みが続いていふし銀の芸
下積みに日本一の妻が居る
下積みの演技に主役支えられ
下積みでいつか翺ぶ日を待っている
下積みの釘は曲つたままに錆び
下積みに妻の陽気なフライパン
下積みの集まる店は決めてある
下積みのころ懐かしむ古箏笛

一 郎 東 雲 重 人 千 代 三 満 津 子 柳 宏 子 是 づ 絵 健 司 藤 子 作 二 郎 藤 子

御札

このたびは、皆さまのお力を借りまして、七回忌の供養に出しました堀口塊人句集「九十九帖」を、早速、お申し込みいただきありがとうございます。今後共、よろしく願っています。日本川柳協会も、皆さままで育てくださるようお願いいたします。

皆さまの力を借りてつくも帖
あの世から笑顔で話すつくも帖

富 未

西宮市高松町三一四—三号

堀口富未

下積みの石は大きな夢を見る
下積みの頃の作まで陽の目みる
下積みのころは優しい目をしてた
下積みの僕にも見える空がある
下積みのババ関白にしてあげる
エリート不幸下積み知らず生き

兼題「暗記」

松川杜的選

暗記する脳がだんだんくたぶれる
あの頃は確かに暗記出来たのに
カンニングと間違えられるほど覚え
三次会あたりで暗記狂いだす
料理までコンピュータが暗記する
暗記には強いが数字になめられる
当てはめる場所がわからぬ丸暗記
豆を煮る母の暗記のそのように
暗記する自信がメモを取っている
トイレから出ると暗記したのを忘れ
あやふやな暗記へ代理メモを出す
ファミコンはうまいが暗記駄目な孫
暗記した祝辞と違い雨となり
人を斬る殺し文句を暗記する
暗記力試して自分の呆け計る
暗記力孫が心経先き覚え
方程式定石とおり暗記する
暗記するテープどんどん逃げていく
初恋の電話番号まだ覚え
憲法の第九条を暗記する

東雲 文秋 満津子 萬的 紀雄 正坊
与呂志 博子 美智子 鬼遊 美代子 武庫坊 作絵 冬一郎 紫香 白溪子 狸村 寿馬 隆二 公一 三男 美智子 太茂津 楓楽 天笑 鬼遊

暗記した言葉ばかりが胃に溜り
暗記より絵を描くこと上手な子
駒の位置で解いてる詰将棋
暗記した方程式に背かれる
ロボットが乾いた暗記告げに来る
一晚で暗記一日で皆忘れ
暗記せねばならぬ数字が多すぎる
追伸の殺し文句を暗記する
某種梅雨番号ばかり暗記する
カタカナが暗記出来ない外来語
かこめかこめ暗記していた故郷のうた
初舞台千役の台詞にはらはらと
途中から聞かれてどる丸暗記
暗記した通りお悔み申し上げ
その声も暗記している父の遺書
レモンティ吞んで暗記をくり返す
旧陸軍理屈は抜きに暗記させ
六法を暗記きくしやく生きている
暗記どころか今の事でまず忘れ
葱坊主晩春の言葉暗記する
人間の暗記ぐらひはしたたもの
暗記した通り石庭しやべり出す
五ヶ條勅語半分程は未だ言える

兼題「比べる」

櫻谷寿馬選

暗記した言葉ばかりが胃に溜り
暗記より絵を描くこと上手な子
駒の位置で解いてる詰将棋
暗記した方程式に背かれる
ロボットが乾いた暗記告げに来る
一晚で暗記一日で皆忘れ
暗記せねばならぬ数字が多すぎる
追伸の殺し文句を暗記する
某種梅雨番号ばかり暗記する
カタカナが暗記出来ない外来語
かこめかこめ暗記していた故郷のうた
初舞台千役の台詞にはらはらと
途中から聞かれてどる丸暗記
暗記した通りお悔み申し上げ
その声も暗記している父の遺書
レモンティ吞んで暗記をくり返す
旧陸軍理屈は抜きに暗記させ
六法を暗記きくしやく生きている
暗記どころか今の事でまず忘れ
葱坊主晩春の言葉暗記する
人間の暗記ぐらひはしたたもの
暗記した通り石庭しやべり出す
五ヶ條勅語半分程は未だ言える

節子 藤子 白洋 はつ絵 いわゑ 柳宏子 寿馬 隆二 健司 勝美 萬的 洋敏 三男 太茂津 照子 蕉露 楓楽 寿美 水客 健司 作二郎 杜的
山本富士子と妻を比べるのはよそマネキンと同じ服着て見比べる手を出さず西瓜の切身見比べるちちははの愛へ天秤動かない
重人 幸一 武庫坊 美智子

川柳に乗って残そう若桜線 △若桜線車中川柳大会▽

日時 昭和61年7月20日(日)

受付 鳥取駅コンコースで8時30分より

行先 若桜町

参加費 大人三、〇〇〇円
小人一、五〇〇円

(往復汽車賃、昼食、缶ビール、ジュース、発表誌、ニジマス、賞品等含む)

兼題

「町長」 岩原 喬水選
「フアイト」 土橋 螢選
「枕木」 松田 吞水選
「祈り」 江原とお選
「雲」 新家 完司選

席題 当日一題、発車と同時に発表
各題2句

☆欠席投句七百円(切手可)7月15日必着
鳥取市東大路64 両川洋々宛へ

△川柳列車日程▽

鳥取発 〇時〇〇分 若桜着 〇時23分 兼席題披露 〇時26分
10時23分 11時30分より

昼食、ニジマスつかみどり 〇時30分より 若桜発 13時30分 17時19分

鳥取着解散 18時24分

主催 国鉄ふうもん川柳会

人さまと比べるものが何もない
 美人とは言えぬ氣立ては妻が上
 成長を母が比べる古い靴
 母の優しさは計りにかけられぬ
 器量よしの姉を二人も持つてゐる
 横の墓レモン添えてある彼岸
 見比べて選る六月の花の旅
 父の日に利口な次男と純い兄
 比べると敵が大きく見えて来る
 戦力を比べ喧嘩は止めにする
 損と得貧しく揺れるやじろべえ
 財産と愛を比べて離婚する
 我が事は棚に値踏みの高望み
 お互いに心のなかで比較する
 比べてもどうにもならぬ昼の月
 値を比べながらファッション見る女
 女と女比べる事が多過ぎて
 風を比べて風上の無人駅
 下を見て暮らすと足る靴をはく
 おない年でつかとママに見つめられ
 比べると馬鹿が一番出世する
 比べたらホクロの数も似て親子
 比類ない夫と信じてたがわす
 偏差値という包丁で輪切りされ
 日和見が過ぎて誤算の風招く
 凡人の欲は何でもすく比べ
 無神論者で聖書の厚み比べている
 本当は比べてほしい指の石
 幸せは他人と比べぬ方がよい

智子 山久 章久 緑良 寿美 岳人 英王子 射月芳 規不風 庸佑 はつ絵 月子 章久 水客 健司 与呂志 萬的 白兔 重人 天笑 与呂志 白洋 あいき 正坊 章久 天笑 作二郎 狸村 射月芳

妻よりは軽い秤を確かめる
 熱い瞳にバストラインを比較され
 ご近所と比べていつも叱るママ
 お隣りの旦那と比べないよう
 お隣りの妻に比べて我慢する
 もひとりの僕と比べる自己嫌悪
 すれ違いざまに比べる女の眼
 お隣の堀より一寸高くする
 ご近所の主人と何を比較する
 絵を二枚描いて比べている夫婦

兼題「牙」

高杉鬼遊選

掛布の牙折れて低迷タイガース
 温泉で牙を抜かれた仏たち
 時により八重歯も牙となる恐れ
 飽食に牙は飾りになった虎
 二次会の女の牙のすさまじく
 何も牙むく程でない痴話喧嘩
 傾国の美女の影絵に牙が見え
 毒舌の牙札束で引き抜かれ
 開発へ神も時には牙をむく
 はないちもんめもう牙なんか用は無い
 冷やっこ柔らかなくなる父の牙
 ママゴンへ必ず牙を描く児童
 均等元年女の牙も恐ろしい
 まだ生きた横りか牙を磨いている
 赤い牙青い牙待つネオンの灯
 赤鬼の牙は治療中だった
 世は平和牙を抜かれた男達

耕花 寿子 文秋 三男 耕花 諷云児 公一 芳子 鬼遊 寿馬 萬的 太茂津 芳子 博子 市雄 笛生 蕉露 公一 章久 道子 寿馬 いわゑ 諷云児 千代三 雀踊子 射月芳

牙抜いた鬼が男性化粧品
 酒一本ぐらいで抜かれる牙をもち
 牙の無い虎に馴らされ昼を寝る
 踏まれ邪鬼牙は父似か雨期に入る
 逢うときは牙を外した顔で行く
 駅前へ資本は牙を向けてくる
 泣く時は牙をはずしてからにする
 噛みついた牙が後から疼き出し
 見えてない牙がいちばん恐ろしい
 駅員怒鳴るくらいは牙は持っている
 隠してる牙が時々笑い出す
 牙をむく人間様が多過ぎる
 牙がぼろりと欠けてお酒が弱くなる
 日本もそろそろ牙をとき始め
 牙ぬかれゲートボールをやっている
 お多福の面をなでると牙があり
 いつも磨いて牙は使ったことがない
 女の部屋にうっかり牙を置いてくる
 蜜蜂の群れへ仔犬は牙をむく
 乳歯が抜けて牙になる牙になる
 何のけれどもなく糸を切る糸切歯
 自画像へ鬼は小さく牙を描く
 牙抜けてからは茶碗飛んで来ぬ
 鬼の牙悲しい事も考える
 昼の電車牙のゆるんだ貌で乗る
 引っ込みのつかない牙で横を向き
 振り向いた時には牙はもう見え
 カルシウム不足笑えぬ鬼の牙

武庫坊 柳宏子 与呂志 作二郎 芳子 白洋 康恵 満津子 天笑 郁栄 康恵 雀踊子 智子 藤人 岳人 天笑 智子 水客 白兔 白兔 杜的 岳人 萬的 作一郎 紫香 水客 鬼遊

三振をして新人の大見出し
ハイミスの眼が新人を絶えず追ひ
嘘のない寝顔で丸く暮して
新人へ教訓一つだけ贈る

春ですよ息子よ髭を剃りなさい
新人の抱負に情にくすぐられ
あの人に叱られたくてドジをふむ
揚貴妃に話すことあり通り抜け
自宅では見せぬ男の顔があり

四月馬鹿乗せられたふりしときます
鉢植の花が孤独と住む土管

妻も子も電車の寝顔知つてない
楽しみな新人だから使つて鞭

龍宮の夢が笑いの部屋に凜と咲く
一輪挿しが独りの部屋に凜と咲く

花が咲く夫の形見の君子蘭
自転車ママの背中を信じ切り

ただいまへちゃんとヒールが出る自宅
さい果ての單身赴任髭はやす

ローン済む頃はこわれて来る自宅
ばあちゃんの寝顔に近くなり

伝統の重さを新人知らされる
新人の愚痴食堂の皿が聞く

自宅から一歩も出ない甲虫
口開けて居るけど妻のいい寝顔

フルムーン妻の寝顔も久しぶり
尼崎尾浜川柳会

春城武庫坊報
どの指が味方だろうか爪を切る

妻の手帖にかけ込み寺の地図がある
恋文が四月一日着きました

スカートのひだへ思ひ出畳み込む
すみ

あやめ
かすみ
一途

シマ子
勝一

明代
静江

冬葉
てまり

晴風
三郎

博泉
頂留子

亜成
一笑

英壬子
三子子

度
右近

敬山
礫城

鼓城
亜鈍

小路
薫風

札子
牧郎

江美
すみ

旅の宿旅の心になるも酒
笑うなら私の恋に手を貸して
花近し老妻着替えて若返る
へソクリが減つても楽し孫の守り

繋かれた犬慰めるモンシロ蝶
古い手帳ええことばし書いてある
罪深い女が見せるまむし指
新しい手帖に呪文が書いてある
花筏疎水の雨に送られて

尼崎尾浜川柳会
春城武庫坊報

下手で良い児が描く母は温かい
何しとも下手な夫で憎めない
字の下手な妻に頭があらがない
袋帯しめてめでたい席に居る

達磨の目賭けてマイクの西東
五月晴れマイクののびる遊園地
バス旅行今日もマイクは離さない
独り居て葉袋に老いを知る

婆さんの日課電灯まめに消し
寝たきりの母へ届けよ花吹雪
減量してはお箸と思えない
罪一つ消して遍路の杖をつく

ラーメンを食べに行くからネクタイす
モーニングコーヒーに昨夜の酔い残る
また離婚罪な男が多すぎる
東大阪川柳同好会

春城武庫坊報
借金と言わずローンと言う響き

借金をものとしないう事業欲
借金だけ出して借金言ひ出せず
借金をするタイミング考える
初耳の飲み屋の付けが来る忌明け

十四郎
よしつぐ
いわお

弘治
昌子

清太
紫香

武庫坊
寅之助

江美
礼子

牧郎
すみ

貞男
十四郎

よしつぐ
弘治

貞吉
晴子

歌子
武庫坊

夢之助
紫香
いわお
雅風
勝美
晋吾
千代子
美子

ギャンブルをやめたら金は貸してやる
サラ金に追いつめられた社会面
寸借が十指に余るコップ酒
サラ金に雁字搦めの耳鳴りよ

男泣きした借金だ札を積む
景気よく呑んで借金またふやし
返す当て無いのに手軽に借りてくる
颯爽と来て電車賃借してんか

借金はならぬと明治の父どなる
信用は子供にあつて貸してくれ
国債という名で国に貸してある
ひとことも触れず母は貸してくれ

返す時あはらしくなる金を借り
作業衣の釦に父の詩がある
ボタン社会の中で老人落ちこぼれ
西宮北口川柳会

奥田みつ子報
手から手に渡るお金がありがたい

そして少女もきつと一度は通る道
父に似た人から招待券がくる
菜の花を植えながら海までの道
行く先はあなただけと自動車に乗る

タイアナ妃のファッショに魅了され
川柳がなくてもよく効く惚け封じ
手の内を見せたその術に乗ってみる
石段を数えつくす風と会う

幸せな手をポケットであたためる
母の日の亡母にも赤いカーネーション
一生を縫い子で終わる器用な手
平坦な道に隠した落とし穴

郵便やさんに飛びつくように道を聞く
予防線張って追手の隙を突く
園歩

柳影
弧舟

滋啓
信治

三十四
みつる

眉水
頂留子

俊一
貞子

雀踊子
百合枝

度風
文秋

鬼遊
智子

蘭恵美子
千代

みち子
日の出

米朝
紀雄
はつ絵
静子
笑子
よし津
芳子
幽香
園歩

核の灰ヨード剤など効くのかな
 訣れるならばその手は汚さないように
 淋しさを握りしめてるピエロの手
 子防線女は長い爪を持ち
 叱るときはめてる時の手の仕草
 子防線張って無い言っている
 逢う人はみな働いている島の道
 石橋を叩いてたいて乗りおくれ
 むすんで開いて人妻と手をつなぐ
 別れ道信に切つてる手が振られ
 強がりを言うのはよそう負け犬は
 道端に咲くタンポポの背がのびず
 いいわけは車に乗ってからにする
 エプロンよ今据え膳の旅終わる
 怒る波テトラボットが慰める
 口下手がとてども器用な手で喋る
 御陵には陛下の道がついてる
 風呂上がり素直に切れる鬼の爪
 石段の数かぞえる子のジャンケン
 母の手は優しいだけと限らない
 近道を迷い迷うて遠くする
 乗り替へはもうないのんびりローカル線
 この道はほほえみ交わす人ばかり
 平手打ち男とちらも泣いている
 面白くないから噂拡がらず
 画き上げて五月の風へ深呼吸
 東京の娘のアバウトで顔洗う
 唇に子防のいらぬ愛の紅
 握手する右手をいつも光らせる
 孫の手を引けば目線が低くなる
 手拍子で歌うたならついでゆく

隆子 年代 子
 武庫坊 礼子
 凡九郎 求芽
 いわゑ 一郎
 陽露子 風云児
 志子 照子
 英子 保蔵
 伊三郎 柳影
 春蘭 紫香
 かすみ 白溪子
 春声 水声
 正一 みつ子
 和友 伊升

子防線二の矢は胸に伏せておく
 文鳥を掌に乗せている人嫌いの
 花びらが窓辺に散った春のベン
 裏道人生青い空には気がつかず
 並木道小指の影は小さく
 床柱背にして肩が凝ってくる
 どの道も父の墓標へ続く道
 岐れみち女はあとを振り向かぬ
 近道を選んでばかり鬼と会う
 命の絆確かめ合える緩い道
 ブライドを捨てるとき生きた道が見え
 ループタイ一寸照れるよ花時計
 バスツアー少うし知識人になり
 ゴキブリに怯える男が憎めない
 騙されてまだ人が好き花が好き
 馬はとも食べよと妻がキャベツ盛る
 旧友に出会う昔のオモチヤ箱
 落ち着くといふと雲から論される
 老いらくの恋もまたよし老花子防
 古時計のような息子でネジがいる
 裏道が好きで小金を貯めている
 合掌の指一本が反りたがる
 母の手にひかれた道で老母をひく
 菜の花句会 高杉
 聖者のように鶴は足どり確かめる
 紫の煙許こととし
 葱坊主母が活けると花になり
 吹き抜けて風は五月の仁王門
 雑役に惜しいパートの字を見たり
 幸か不幸か抜け穴が見つからず
 人妻の魅力に揺れるおにあざみ

杜的 三笑子
 眉水 俊子
 房山 曲手
 文平 春江
 千秀 散歩
 美津枝 一進
 右近 博造
 新造 百合子
 高子 千世子
 良征 寿馬
 枯梢 紫香
 紫遊報 壯之助
 幸シマ子
 春章 冬蘭
 悦郎

競い合う苗に間引きの運不運
 隠れ家を祭り囃子が通り抜け
 煙突と赤旗振った時のまま
 菊枕ゆかしき人の夢を買う
 手に職を持つと男が小さく見え
 人情が消えない里に立つ煙
 職のある男が知つてる水の味
 どんぐりが半歩抜ける矢を受ける
 本を買った花屋で花を買おうように
 栓抜いた耳は噂に飢えてる
 母の日へ臨時に出来た花売場
 電気瓦斯煙の出ない里にされ
 お茶が冷えている足もしびれてる
 酒止めてはや一年の花時に

佳句地10選 (前月号から)

堀端三男選

枕木を積んで動かぬ貨車がある
 ドアチェーン夫も一度疑われ
 子の胸に響かぬ太鼓打ちつづけ
 少年の机宇宙と向かい合う
 染め替えが出来ない旗を一つ持つ
 空白のページは折る事ばかり
 絶頂の男を狙う紙つづて
 白鳥と同じ助走をするアヒル
 芽の出ない男にコーヒーいれてる
 遺言を書かねばならぬ事なし
 満津子
 美代子
 鬼遊
 隆二
 みつ子
 菁居
 美代
 昭二
 観洋
 君子

柳宏子
 糸葉
 寿馬
 鬼遊
 弥生
 雀踊子
 幸生
 射月芳
 柳伸
 勝美
 喜風
 健司
 蕉露

花火師がひと足早い梅雨を知る
駒つなぎ川柳会 里

信治

冥土まで妻に内緒が一つある
資生堂もボーラもいらぬ健康美
銭湯で軽い生命を紛らわす

八重野

あやまちを平気な顔でいる恐さ
制服はちきり決つて健康美

勝美

深酒を呑まねば日本一の父
主人のはあやまちでない病気で
健康美お行儀悪いのが困る

美幸

くすりやのボスターいつも健康美
道楽の果て山が消え煙が消え

曲手

窓口にぬくい言葉を聞く安堵
健康美びちびち跳ねている浜辺

金太

道楽が過ぎて謀反を考える
あやまちへ長い国際電話する

新造

窓口の女がにこりとしな
道楽も知らず佗しい父の背な
おかめにもあやまちはある春の宴

外吉

無いたを貴方に求む健康美
さびしさを酒に紛らす冬おんな

柳影

悪は悪に紛れて少し生き伸びる
窓口はあやまちな二と気付き
道楽をしたのがしじみ意見する

史好

道楽へ自業自得のつけが来る
闇に紛れてふくみ笑いの美女ひとり

頂留子

審査員もかたずをのんだ健康美
金出しに來たのに窓口のご愛想
道楽へ片足突込みかけた趣味

千代三

あやまちもあるさ人間なんだから
病みあがり他人はみんな健康美

恒明

群衆にまぎれ思想を確かめる
道楽も知らず踏切に咲く菜種
踏切に会つては困る人がいる顔

浩一郎

どさくさに紛れてハート盗まれる
窓口ですつたもんだともめている

素灯

春風も脱帽している健康美
千体の仏に紛れてた阿修羅
横着な窓口を撃つモデルガン

萬風

道楽もカラオケ夫婦で仲が良い
あやまちの願望もある主婦のうつ

花仔

塵線も知らず踏切に咲く菜種
踏切に会つては困る人がいる顔
踏切の向こうもいららして顔

柳宏子

どさくさに紛れてハート盗まれる
窓口ですつたもんだともめている

文秋

踏切が渡り終えたらベルが鳴り
踏切がドラマチックにおいて恋
遮断機も過密ダイヤに疲れてる

鬼遊

道楽もカラオケ夫婦で仲が良い
あやまちの願望もある主婦のうつ

克己

出勤の足へ踏切の長い貨車
踏切に人情などは落ちてない
さわやかな手話の笑顔で春になる

天笑

あやまちもあるさ人間なんだから
病みあがり他人はみんな健康美

幸治

衣ずれの音ささわやかに春を着る

笛生

あやまちもあるさ人間なんだから
病みあがり他人はみんな健康美

壯之助

踏切に会つては困る人がいる顔
踏切の向こうもいららして顔
踏切が渡り終えたらベルが鳴り

柳伸

どさくさに紛れてハート盗まれる
窓口ですつたもんだともめている

節二

群衆にまぎれ思想を確かめる
道楽も知らず踏切に咲く菜種
踏切に会つては困る人がいる顔

小柳

あやまちもあるさ人間なんだから
病みあがり他人はみんな健康美

善信

踏切に会つては困る人がいる顔
踏切の向こうもいららして顔
踏切が渡り終えたらベルが鳴り

柳伸

どさくさに紛れてハート盗まれる
窓口ですつたもんだともめている

美津枝

群衆にまぎれ思想を確かめる
道楽も知らず踏切に咲く菜種
踏切に会つては困る人がいる顔

小柳

近畿文字放送作品募集

題「あいさつ」 3句
締切 7月10日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市東区谷町2丁目36
大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

合格の子とさわやかに雲にのる
さわやかな汗を流して日課とす
さわやかに花道飾る靴の音

さわやかな風が呼んでる北の窓
さわやかな人生でしたデスマスク
さわやかに辞めて気ままなスケッチ帳

さわやかな情けばかりでもの足りぬ
割箸がスカッと割れたさわやかさ
二度目は決意して押す保証印

よっぽどの決意まむしを上にする
妻の決意が堅いので印を押す
引退を決意している話しぶり

なに決意したか付合ひ悪くなり
三度目の決意禁煙パイポ買う
入社式決意新たな顔ばかり

禁煙を決意したのに笑う妻
観覧車が廻るゆつくり決意する
決意する言葉を歩幅と考える

勝一

白李

伊三郎

房高子

年蘭

春遊

決意してその落日が赤くなる
転動のドラマを秘めている靴
たぐつても数珠に終りのない悟り
鎌倉の風は仏の肌に合う

クラス会足腰痛む友が増え
週刊誌二番煎じの方が荒れ
目に青葉底さし漁は閉めだされ

人生はもぐら叩きに似て哀れ
弾むもの抱いて決まらぬ旅の服
れんぎょうの傍を動かぬかたつむり

散髪へ行くに三日も思案する
こだわりは捨てよう草の芽も伸びる
逆立ちをしともわびしい足の裏

翠洋会

中西兼治郎報

公園の恋を船から見て通り
大都会忙中閑あり五月晴

水上散歩八百八橋を通り抜け
この川も空も続いている他人

水上バス川の流れは見すにおく
ビルのはずれに白壁の土蔵みつけた

太公望船を尻目に夢をつる
大阪城うらまで見える舟の旅

大阪城ツインのビルも走つて
橋々は下ぐられてはすかしや

水の都昔を今に船あそび
繁栄とうらはら水都の水濁る

還暦を共に祝うか水ゆたか
大阪市の恥部を水上バスで見る

大阪を水の上から見る五月
大阪も三十三階めしの味

Y・F・C川柳会

人見

翠記報

紫香

明子

井寒

盛雄

よ志子

求芽

逸

鼓城

ゞ女

里子

松子

芳子

さと美

良太

兼治郎

萬里

文子

美津枝

君子

春子

為子

照子

東雲

綾子

光子

楓楽

みつ子

登志実

鬼遊

薫風

友達を立てて亭主にうとまれる
人波に押され花見通り抜け

申告期気ばかりあせる風邪の床
心待ちする人があり薄化粧

薄化粧自信ありげな目鼻立ち
コンパクト職安を出る靴の音

恋人が出来る化粧の具合
化粧したママを振り向く参観日

ものすべて春立つ光薄化粧
ケーキにもチョコの兎の花菖蒲

川柳泉尾

お土産の花によろしき酒の壺
お土産に初孫抱いて帰郷する

たそがれは美人に見せるうしろかげ
愚痴つる暇はおまへん日が暮れる

友の句をやつと見つけた紅手毬
手の内を見たぞ今度は俺の番

信頼が出張先を聞き忘れ
体型を無視し似合うと信じ込む

病む人の心たすねる春の風
春うらら添い寝のママが先眠り

ローテーション組まぬ職場の肩たたき
永年の夢が叶ったあつけないく

泥道が春を告げてる北の町
日だまりを追って花見のむしろ敷く

三日間沖繩かなしき跡ばかり
鏡台は紅白リボンと亀がつき

十五の春曇りのち晴れ祈る子へ
吃水線男の海に唄がある

聴障川柳

泣き顔を吾子に見せまい火吹竹

稲田

豊作報

承平

房子

モトエ

紅葉

たず子

泰州

翠記

よし津

豊平次

久仁子

節子

吉川

寿美報

トミ子

敏

義一

美代子

シメ子

淑子

満州子

伴子

弘子

シマ子

美子

三千代

三世

ふみ

白水

恭子

多和子

寿美

若い日の母はトイレで泣きました
泣くとこを一度笑つてみませんか

時々泣いて女の桶とする
子に笑いに泣きいつか老いてゆく

泣き神に賞状貰った過去の子
難聴は黒くに足りない見えぬより

耳鳴りに黒髪結い結い泣いた青春
夜歩きに黒髪結い結い泣いた青春

意地っ張り話を聞いてやれば泣く
悲しさも嬉しさも泣く老いた母

泣き笑い秘めて背中丸くなり
泣き声を出してはならぬ我慢の子

尼崎いくしま川柳会

角野かず子報

路地を出てさつき別れた人に会う
ピンク赤青カラフルに孫の箸

合格へ疲れた幹に花が咲く
お茶漬がいちばん好きな父の箸

食い逃げが卒業すれば家を出る
こつくりと箸を落とす孫寝入る

白木蓮今日はなにやら会えそう
帰待つ箸に不安の救急車

能登の旅あかい塗り箸買っている
割り箸を口で割つてる屋台そば

退院の許しで箸が軽くなる
中流の門出犬まで美容院

会う人に会えず柳の芽吹く町
それぞれの温みが点る団地の夜

白い木連いつかひらいて石を蹴る
全快の箸が素直に空ける皿

お彼岸にそれらしい箸添えてある
ばんぱりが点くと多弁な箸になる

文古

鉄火

珍顔

三香

みつる

行江

八恵子

たみ

峯生

一眺

和江

豊作

みち子

一郎

美代子

いわゑ

幸子

かね子

みつ子

春子

君子

伊三郎

紫香

文夫

水声

はつ絵

作二郎

冬子

郁榮

静江

康子
かつみ

雄々々

火車雄々
樂々

天松王
雀女

天雀
明

柳風明

ゆり子 風

十六夜

アキミ
喜美子

喜美子
秋人

みなと

幸滿
苑春

英幸
治苑

英觀
治洋

秋女

とみお
はるお

はるお
完司

端や完
文之司

瑞
枝

文子 蜚

紫文
泉子

紫
日
枝
子

荒御
介前

荒介
石花菜

康子
かつみ

雄々々

火車雄々
樂々

天松王
雀女

天雀
明

柳風明

ゆり子 風

十六夜

アキミ
喜美子

喜美子
秋人

みなと

幸滿
苑春

英幸
治苑

英觀
治洋

秋女

とみお
はるお

はるお
完司

端や完
文之司

瑞
枝

文子 蜚

紫文
泉子

紫
日
枝
子

荒御
介前

荒介
石花菜

野の緑に置くととはしやぐ魔法瓶
水圧が落ちても夫婦に井戸がある
文化勲章僕なら天へ返します

川柳はびきの

田中

隆二報

母親に見抜かれて隠しごと
悪人を隠す仏の掌の広さ
母の肩我が行末の姿かな
肩書がとれて定年一休み
燃える血は肩肘張って村を去る
合格がどつり父母の肩に乗る
なぜ肩のまんまで融けた雪だるま
頑固な父婿が頑固と腹を立て
思い出の父の笑顔に酒があり
孤児たちの脛に浮かぶ老いの父
父の汗あいたをくれる子に賭ける
片意地な父の寂しい怒り肩
母さんにそつとあまえる父である
父として言いたいことがたんとある
父さんの靴玄関で酔ったまま
五十坂亡父の言葉が重くなる

星空の夢を科学が剥いでくれ
酒のあて母の伝授の木芽あえ
見たい人いるから見せて金になる
病院で知らぬ振りする思いやり
東京で黙然になった河内弁
馬子唄が風に乗るよな中仙道
薬のむ夫婦で痛み分ち合い
好きやねん眼線が交す夫婦酒
ガラクタをかくして仲人さん迎え
春愁へひと娘が嫁くという
敷き藁を押し上げ新芽コンニチワ
四月馬鹿笑うてすます嘘がよい
広告に郷里の味を乗せてくる
まあ一杯位牌の父に酒をつぎ
お水取り春待つ老いへ空碧し
ファミコンで子供がいなくなる視界
角栄殿病氣越後路景色色

隅谷

義一

愚痴一つ語る人なく花を見る
悔やむ日があつて愚痴らぬ事にする
もう一人の私が愚痴をたしなめる
大きめの壺にたまった妻の愚痴
陽の蔭の蕾の愚痴をそつと聞く
澄んだ空愚痴を言うのはもつとよそ
姉妹の愚痴は一派相通じ
欺されてから正体が解る悔い
ジャンボ籤がすかな期待又外れ
禅寺の心をたたく音が澄み
民謡の先生が居て場がなごむ
姑となる盃を受けている
末つ子が泣いて上の子皆黙り
老いの身に明日も予定のある安堵

岸和田川柳会

植山

武助報

茶柱の今朝は立たずに春の色
背筋立て猫どこかへ行く積り
行けるうちにに行けばよかつた旅のこと
背きりりわたしに甘えないように
貴男また柳誌来ましたお灯明
この御縁そむかぬ様にあたためる
告白をする気は毛頭ないレタス
頼枝の思案結論までゆかず
念には念いれて頼枝長くとつき
クラス会頼枝の癖今もなお
頼枝の蝶々が庭を舞っている
頼枝のかわいいしぐさを叱られる
頼枝を崩して一匹蠅が逃げ
頼枝へ雲アンパンに見えてくる
頼枝はきれいな嘘を聞いている

杜的報

榮

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

敏正

白李

敏正

幸

花代子

芳子

年子

巨詩

笛珠

陽露子

美穂

紫香

弘生

水客

いい湯い味テレビで観てるだけの春
石仏の角を曲がれば湯豆腐屋
逢いたさに訪えば留守だと知る失意
留守たのむ犬にラジオをかけて出る
留守番の犬は律儀に吠え続け
ひさびさの朝寝朝酒の留守
他人行儀なメモ置いてある妻の留守
電話口横から留守だと手を振られ
ああそう今日は留守だと聞いてたわ
嫁姑沸騰点のひややかさ
お湯割りに次の言葉を沈めとく

川柳高知

川竹

松風報

病室に春の便りを運び込み
窓際も今年かぎりの宮仕え
新婚の窓にムードを添える花
表面は妻に負けてる平和な日
善人でいつも表に立たされる
矢表に立つと家内が強くなる
年金を欲の袋へ詰めている
口下手がすんなり書いたラブレター
色あせた国旗ゆれてた過疎の村
豪快な笑い本音はのぞかせず
赤ちゃんが笑って温い待合所
本当の笑い涙が出てしま
働いてもらう夫へ口が過ぎ
歯車が合って夫婦の精が出る
陰日向なく働いて平社員
啓蟄や働く蟻になる動き

川柳藤井寺

赤木

和子報

飛鳥 鼓城 明子 英子 葉子 風雲児 杜的 求芽 和友 武庫坊 幸泉 熊男 かず子 朱坊 佳風 三吉 功 春枝 菊野 節子 松風 白雨 竹萌 高重 紫香 志洋 与呂志 志洋

太閤も拍手をおくるツインビル
走るのを止めたらこける人生さ
満足に何も出来ぬに愚痴が先
エプロンの数ほど料理作れない
天皇の背の昭和史が丸くなる
根比べして見る様な今日の釣り
満ち足りた心に鍵をかけ忘れ
泳いでる元氣良いのが料理され
えりまきトカゲ走らぬままで姿消し
品書きはシェフの帽子の中にある
お坊さん中身気になる志納金
老骨のまだ蜜声が出る軍歌
春一気 桜前線走り抜け
一番に走れとママが氣負い立ち
年金へ生きていきますと返事する
井戸端の話題も三日桜散る
鍋かけて裏の筍掘りに行く
お母ちゃん走れば走るほど太り
縄のれん一寸覗いて又歩き
解散の風に怯えて里帰り
時計まで眠そうに見え花曇り
走るからつられて走の中に居る
気に入らぬ返事はのとの奥でする
風の抜け道漂つていく初蝶
春雨に少し濡れてる置手紙
風光る白いスカート春弾く
ストレスが受話器を通して汚染する
孫が来て今日のメニューの数が増え
大山を右に左にバス走る
靴音に耳を澄まして待つ料理
組に乗せると男に骨がある

つや 美房 須美 昭江 吸江 重樹 治三 三秀 作秀 美代子 祐二 本蔭棒 伴園 秋園 哲正 ふみ かな女 正人 清心 たかし うめ 繁男 みのる 和美美 雅美 彩 正枝 末一 麻雄 由紀夫 和子

川柳塔唐津支部 久保 正敏報
箸握る孫の喰い初め匙と替え
茂みから離れたくない蝸牛
袴を脱げば大臣只の人
簡単にやれぬ手塩にかけた花
竹光を鴨居の父へ抜いてみる
忘却の日ふと娘語り出す
新任の二十歳はにかむ薄化粧
どの窓も愁いを知らぬ団地の灯
雨降って女笑顔を取り戻す
あの日から隣の垣が高く見え
こぼれ陽を妻と拾うている余生
川柳わかやま 堀端 三男報
母が来る西陽を浴びて母が来る
気が付けば母とおんなじ道を踏み
父さんに一歩遅れて歩く母
母を語る人の笑顔が美しい
事ごとく母が一番頼もしい
花火でも上げたい母は九十五
母の日に始めてもらったプレゼント
アルバムをあけると遠い笛太鼓
遠くなる耳はよいことだけを聞く
喪が明けて父母がだんだん遠くなる
栄転が遠いあたになつてゆく
武者人形戦は遠くなつたけど
遠いとおいたを狙つてみる男
髪切つて昨日を遠いものとする
遠火火おんなの胸にだけ残り
遠まきに見守る父の愛確か
逝くまでは一度逢いたい遠い人
さわやかな風頂上の顔となる

朴竜 虹汀 旭恒 あき 四郎 多駄子 高明 邦子 今子 久仁於 正敏 道夫 紀美女 正博 智子 美智子 登志代 藤子 雅子 稚代 信子 武雄 緑良 桂香 照子 文子 正子

肩書のないさわやかな名刺出し
 さわやかな風が運んだ愛の種
 さわやかに話せる自分でありたいネ
 さわやかな恋です青葉の下の道
 さわやかな笑顔へ鏡の良い反事
 さわやかに譲ってくれた温い席
 さわやかに別れて女振り向かず
 さわやかに笑って殺す腹の虫
 さわやかな目にまこつている野心
 さわやかな顔で献血車を降りる
 大切に今日を積み足す灯を点す
 大切に仕舞い急場に間に合わず
 大切な残り時間だ向い合う
 大切な父の寝酒を買いに行く
 逢うまでは大切に抱く火の玉よ
 大切に生きたし路地の紅い花
 ニセ物を後生大事に持っていた
 大切な人だプラスになる人だ
 大切な価値観ずれてる粗大芥
 御身大切に恋も飾りも抜けました
 大切に写真を一枚持つっている
 大切に生きておんなの灯を守る
 大切な話は腹の空いた間に
 川柳塔まつて五月例会 恒松
 山彦の緑をかえすハイキング
 風は春みどりの中の野の仏
 菜の虫のみどりへ眼鏡かけなおす
 街路樹のみどりに街が生きてくる

勇太 三枝子 凡九郎 萬的 千寿子 柳宏子 紫香 太茂津 公子 幸 豊太 政一 光代 雀踊子 裕美 狂虎 克夫 守勝 紀久子 きみ 郁栄 輝子 寿男 紅報 芳子 寿美子 童子 愚童

ふる里に緑の山と老母が待つ
 みどりなす山は大きくあばれない
 新緑に陽氣を乗せたバス通る
 船酔いも山のみどりに救われる
 虹の橋渡つて女蹴つますく
 虹の立つ死角に立つたふしあわせ
 虹越えて平和を乱す弾がある
 虹少し縋せて佗しい都市砂漠
 虹を追う男は皺を気にしない
 虹の橋渡ればおとぎの小人たち
 園児らの部屋創作の虹がある
 草臥れた靴で男は虹を追う
 教室を出てからうるさい塾通い
 教室の優等生が父の海
 教室で肥満が汗かくレオタード
 教室に悲しい席がひとつある
 カルチャーの教室熟女が幅きかす
 教室の静けさ破る花ばさみ
 教室も鉄筋冷えた血が流れ
 鞭が飛んだ昔の教室なつかしい
 教室は岡田有希子で騒がしい
 コップ二つ妻も飲む気でいるビール
 山盛りの屋台で売れるコップ酒
 花一輪挿せばコップも喋り出す
 大ジョッキいっきにこれ均等法
 いたずらな風が裾吹く交差点
 交差点左に曲った不倖せ
 青春の地図には多い交差点
 決断にまだ迷つて交差点
 サークル棟樑
 神代からいきさつがある男女
 田形 美緒報 今日子

昭二 静翁 翠星 由郎 玄艸 芳枝 友子 代仕男 ちかし みえ 育子 貢範 妻子 四男 鳳人 きみえ 満江 静江 正朗 巡歩 孤呂二 舞吉 壮樹 多賀子 緑之助 紫丸 鶴丸 与根一 叮紅 美緒報 今日子

旧友はいつまでたっても男の子
 世の文目知った男の背の丸さ
 私の一人の男を大切に
 元気なら窓際族でいてもいい
 たそがれを少うし自覚した男
 穴あいて幸せポケットから逃げた
 好物は芋タコ南瓜髭面で
 ポケットから柳身赴任なり
 南大阪川柳会 中川 滋雀報
 單身赴任焼めしばかり巧くなり
 職人の魂を焼くのはり窯
 草を焼く炎は春へのびてゆく
 焼け残る扉に行き先書いてある
 焼くまでは治らぬ癖を三つ持ち
 焼鳥の罪な匂いのタミナル
 本読めば茂吉も芭蕉も生きている
 みの虫よ生きていたのか春の風
 考える輩で上手に生き残る
 こつこつと小石を積んで生きのびる
 野に生きたる花は愛でも手折るまい
 一枚の辞素直に生きてみる
 十字架が生きてる証しだと思つ
 磨いても磨いても泥靴になる生きる道
 自尊心捨てる強く生きられる
 胎動に生きたる女の幸を知る
 精一杯生きて楽しい老いがある
 床しさが欲しくて心練つている
 床しさはコートをもと脱ぐときも
 床しさは亡母によく似た割烹着
 ものあわれ知る床しさを抱えている
 ミニバイク床しさ消えた娘の育ち

雅子 智恵子 泰子 千代女 美代 三四子 美緒 薫風 隆二 洋子 滋雀 寿美 千代三 しんじ 楓楽 勝美 柳伸 度 善信 白兔 美佐子 章久 雀踊子 公一 久子 智子 悦郎 智恵子 喜風

奥床しいなどとスローな人を賞め
奥床しい佳人と語る花時計

日本も知らぬのに海外へ行きたがり
師曰く友遠方より来てくれぬ

遠方へ一度行きたいブーメラン
望郷の念島をだんだん遠くする

サハリンに残した父の立志伝
OB会遠方の友は飲まされる

二度三度春の陽気に欺される
七転び八起き陽気に笛を吹く

偽れる陽気ビエロにある悩み
何よりの供養陽気な通夜の席

一合の酒が陽気な父にする
ピリオドを打つ日も陽気に振舞おう

川柳大阪
塩満

入学の祝いに追われて花も散る
水苦が昔を語る法善寺

京男いい顔色でやって来る
二番目の舌は陳謝に馴れている

亡き友の好きな銘柄飲んで通夜
定年に明日も予定のある安堵

道頓堀で恋の買物してかえる
姉妹で何を買ったのかき齋橋

千円の時計を買った戎橋
柳友にミナミの句碑が笑いかけ

とんぼりの噴水むかしの話する
天国があつちこつちにあるミナミ

地下足袋の男ミナミで酔っている
天平の遺産大仏の豊かさよ

挙げた掌に男の彩をしかともつ
木登りのへたな男の猿芝居

頂留子
真砂

文秋
慶三

信治
小雅子

晴風
雅風

柳宏子
浩一郎

春蘭
重人

庸佑
恒明

敏報
柳弘

与呂志
本蔭棒

しげお
希久志

瀬洗
みる子

晴生
醉舟

甚八
重人

笑風
一介

一介
一介

紅鳥
一介

ビル二つ露払いして大阪城
童心にかえるふるさとの木に出逢う

野仏が遺産の行方ならんでる
週末の不倫を赦すミナミの灯

くだいおれミナミの客はよくたべる
ほろ酔いの足はミナミへ向いている

母の木はいともやさしい風をもつ
桁一つ違ひ買ひ物見て帰る

駆け落ちを包むミナミの灯が温い
まごころを父に遺産としてもらう

濫伐へ怒りか杉の花粉症
鯉のぼり抱いた子に見せ上げる父

捨て駒で困り崩して王手飛車
将棋駒指し手にまかすその命

駒のない詰将棋は口で勝ち
駒一つ動き一つで勝負あり

春近しハイカー呼びこむ駒ヶ岳
月いちでよいかと娘利子をとる

内職はしても中流意識もち
内職で我が家のローン払う妻

ふところのとっても深い父の木よ
声挙げて非核の政府作らんか

川柳ひらい
行吉

年だから病気だからと腹に吞む
愚痴つめた袋を開けず持ち帰る

交際のよい顔が集まる形見分け
女二人風がまとつて離れない

狂いたくなる日も女ボーズする
老いらくのかほんわか木の芽立ち

溜息の女心に浮気雲
温室に雨を知らない芽が育ち

雅果
エース

鉄心
比呂志

みつる
天平

酔虎
青嵐

テル男
金太

弘生
眉水

三千雄
喜楽

喜楽
花舟

小藪
哲流

一步
河南子

辰男
天笑

敏
照路

幸江
やすえ

良一
愛

典子
方己

博
敏和

ため息がコーボの壁を突き破り
程々の交際しとこ馬鹿をみる

芽ぶく春肩で風切る大学生
千光寺花に酔ったか道迷い

旗色が悪くなつたら年のせい
ツツバリの芽を斬る鋭い母の愛

冷や酒でいいの一人の宴には
砂の器へ精一杯の今日を盛る

茶柱に今日を占う女坂
遠慮のない溜息つける仕舞い風呂

打水に庭の石さえ呼吸する
生き抜いて開く扉の重いこと

溜息も乗せて女の一人旅
妻といってお酒のほかはまかせきり

捨て切れぬ自分が重い老いの坂
溜息がうまい女で嘘が好き

ため息を風船に入れ飛ばしたい
溜息をついて変身化粧する

ウインドへふつと溜息女去り
ガラス玉詐欺師は指で夢をみる

抜擢に交際上手な妻があり
背信の炎は冷たいお茶を飲み

豊中もくせい川柳会
田中

プレゼント貰うと腰がしゃんと伸び
譲られた席まだ若いと腰かけず

腰折れて帰る故郷は遠くなり
腰おろし女遍路は紅をぬる

針の座に耐え抜いてきた柳腰
ルノワール描く女の腰の線

逃げ腰でも一度番犬吠えておく
清水の山あい響く先師喝

年子
トモ子

アヒル
柏翁

栄翁
美代志

愛子
孝子

千恵子
寿子

ともゑ
志寿子

せつ子
かずを

胤親
美佐保

裕子
博友

柳五郎
草風

真備雄
照路

正坊報
慶子

隆
美弥子

富子
きく子

正坊
寿美子

明吉

音響の効果抜群フエスティバル
響き合う二人だったと亡夫想う
毎日を悲しい別れた駅へ
悲しみの底で泣かない母がいる
悲しい調子外れの歌ばかり
タレントの挙式離婚は目に余り
俺に似る内弁慶を持て余す
忘れ傘国鉄販売所で買い

病み上がりどくだみそつと生やしおく
寝たきりの母が痛ましビル工事
世渡りが下手でコツコツ積んだ富
雨続く花の名札を書いている
人妻とレモンティ飲み若くなる
異人さんの子供をあやす日本語で
イギリスに僕の好みの女たち

富柳会

藤田

泰子報

又逢える期待医院へ足弾む
毒のある矢が飛んで来る男坂
必要な時だけ詣る神だのみ
くすりに毒にもならず生きて来た
ナンセンス劇場を出て毒になる
必要な時にアルミ貨見つからぬ
必要なときに出てこぬのみとつち
女の暦のところでどこに毒を置く
その時は必要だった花言葉
毒入りの愛妻弁当かも知れぬ
必要のない女だが世話をやき
毒のある科白濁いた胸に満つ
致死量はあるが毒とは書いてない
水溜り飛んだ拍子にも忘れ
盃に歎を溜めて呑む男

房子
英子
満子
よし子
紫香
明
曲ん手

必要もない年寄りが早く起き
単身赴任が必要が生んだ家事掃除
必要とされる心にゆとりあり
必要な時だけ呼ばれる親になり
必要もないのに掛けた通話料
下り坂弾んで逃げる掌のてまり
藤井明朗喜寿記念

文次
章久
喜代
美津子
トシエ
泰子

わが青春明るく翔びまわり
激論のネジを緩めて睨み合い
ネジ一本欠けた姑でちよんどうよし
あこがれの椅子に座った苦しさよ
あこがれた柳裏が読みきれぬ
お喋りへ不安なネジは抜いておき
あこがれた子がUターンの腰を据え
やんわりと締めたネジがよく利いて
あこがれのひと添えない人魚姫
ぬけそうな空を雲雀が呼んでいる
宝船折ってあげよう箸袋

緑之助
白丁報
翠星
ヒデ子
聖子
世似
酔夢
かつ子
鈴江
笑子
英子
智重子
民子
清泉
はるみ
歳栄
天痴人
白汀

むらくも観桜川柳大会 藤井 明朗報
朗らかな余韻でできた電話口
朗らかな子連れアヒルの部隊長
物忘れ上手な妻で朗らかで
少女かしくいつか教える月になる
教え過ぎ積んだ積木が崩れだす
人生を教える父の無言劇
満たされぬ少年いつも木に登る
二人ならどんな山でも登ります
やすらぎがあると信じて登る坂
朝夕の感謝家族の和をむすぶ
ありがたくいただく箸を白く割る
宅急便母に感謝のひもを解き
二十一世紀へ若い理想を信じとく
脱サラへ踏みさける若さうらやまれ
風を切る若さ知ってるハイヒール
伸びる芽を両手でそつとふれて見る
爪だけがよく伸びわびしさふつと湧き
おしゃべりがしたい庭の芽が伸びる
きすきす詩に歴史を踏んだ桜土手
ジョギングも一息いれる桜土手
野良犬も通って桜土手が混み
しあわせの彩が明るい春の画布
許す気になれば明るい声になる

明朗報
叮紅
太伸
雀踊子
嘉寿子
ゆき子
ヤス子
車路
雪路
桂子
明朗
紫叻
鶏生
明朗
快哉
芳子
克子
秀子
叮紅
みどり
三津江
白漢子
舞吉
松女

三幸川柳教室 桜井 千秀報
歲月は昔を遠くするばかり
城とビル昔と今が背くらべ
やまと仮名母が残した古日記
おむすびの味に昔の詩がある
すて切れぬ昔を紡ぐ糸車
西暦は凡そでばかす江戸情話
白い花散らして青い実に賭ける
これつきりやめるつもりがつきまくり
青空があると信じて賭けてみる
今日は今日明日の風に賭けてみる
ドラドラと患部にひびく義理見舞
寝たきりの友を見舞って共に泣き

千秀報
愛子
可笑
千枝子
靖子
百合子
千秀
桂香
忠昭
三千子
智水庵
重次

病む友へ春の匂いを活けてくる
産院ででかした嫁の汗を拭く
諺言のパンチ見舞われ目が覚める
スキヤキの肉だけ孫のほうに寄せ
牛鍋は煮つまり謀議は進められ
シャンソンが流れステッキ噛み切れず
フルコース肉よりソースの味をほめ
松阪も神戸も縁のない暮らし

川柳たけはら

森井

青居報

こともかいグリーンピアへきました
ああようちやがとんでいるも春だ
あたらしい先生あたらしいお友だち
折り紙で小さい小さいツル作る
どんなの少年野球に育てられ
母ちゃんのくついに追い越すぞ
美しいフォームいこの晴れ姿
つくしんぼコンニチワって挨拶し
母とけんかごめんないが言えなくて
お祝いは子供同士のようこびで
現実には我田引水などきかぬ
春の服思わずダンスしたくなる
雑兵の遠吠えを聴く夕桜
舞を舞うとしき妻の丸い背よ
よかったと誰より嫁によるこばれ
高三のくりくり坊主にある自信
プロ野球開幕男の子が欲しや
戴いて少うし早い鯉のぼり
父ちゃんに男同士という五歳
アザレアに春をもらった台所
夫と子のサイズも同じ彩を選ぶ
間に合った最終電車が動き出す

幸子 保 千香子 文子 孝子 邦郎 小昌 小三 小三 小三 小五 小六 小六 中一 中一 中二 中三 高一 青居 静水 静枝 敬幸 蘭幸 千恵 栄恵 淑子 令子 春美

農道を往き交う人の背が丸い
シャッターを降ろしてからの一仕事
亡母の顔ちらつとグブる古鏡
捨てないでよかった鉢に芽吹くもの
おぼろ月声かけようかけないか
どなたかと思えば風が吹いている
流されてみると気楽に今日が済み
りポーター自分で調べたように言う
蛇の目傘夢が逃げないようになし
なかなか晴耕雨読とはゆかぬ
晩成の子にランドセル重すぎる
自我を持つ男に飯面など要らぬ
語気荒いお方へあめ湯などすすめ
水ばかり飲んで動悸がおさまらぬ
もう一人の私が写るワインドウ
割り込んだ話少々ずれている
身のほどを知らぬブランもたてて春
生きている確かな証拠陽が昇る
泣きそびれ笑いそびれて貨車待つ
閃きは鉛筆削る間に消える
あまるほど時間があつて句が出来ぬ
それから先は何も言えないコケシたち
子を信じ明日の窓を開け放つ
風当り気にしていたら進めない
城北川柳会 野呂 右近報

八重美 澄江 房枝 太虚 松子 一路 笑子 貞子 房子 比呂子 康子 礼子 操子 春恵 山久 鬼焼 笑排 不動 観杏 臣ゲヨ 正之 悦子 泰世 満津子 千世子 達子

久しぶり法事の席が賑やかで
春雷は主の心を委えさせる
衣がエタンスに思案のひとり言
相槌を打てば話が丸くすむ
ルキーの蘭志五月の空に舞い
花吹雪惜しむかのようそつと踏む
満開の牡丹テレビに誘われる
働き蜂車中にてリュック小さく居る
野草摘む母と歩いたあわい夢
見栄つ張り値段で決める物の価値
愛惜の情沸々と念珠持つ
自分史を書けば涙で字がかすむ
かたまつて咲けば聞える花の私語
恩のある人へ悲しい矢を向ける
気にしてぬ様で気になる人の恋
点滴の夢はブツリブツリ切れる
ふところがピンチの時は家へ直行
低金利老後の不安つららせる
白く笑うまだこたわりの解けぬ人
団地風きまつたコースで夏を呼ぶ
若緑映えて顔まで青く染む
円高も無縁国内小旅行
貧乏になったら親類減つて居た
筋道を通せば煙たい人にされ
友達に励ます声に蘇る
胎動に生きた女の幸を知る
死火山と思つた妻に出る噴火
販売機気楽な酔いをひき受ける
埒もない想いで紅を引いて見る
五十回忌迎えて思も軽くなり
落日に明日のしあわせ信じよう

悟郎 晃世 市郎 白峰 静歩 清治 繁子 寿実 久留美 ただし 道子 笑風 弘重 綾珠 トキワ 倫子 麻黄 文子 右近 新一郎 登志代 カネ 公一 頼一 温子 陽子 静子

■各地句会だより

翠 洋 会

〓夏は水上バスから〓

中西 兼 治 郎

二十年振りという豪雨が大阪を見舞った翌日の五月二十一日は、夏のような日差しに恵まれた。薫風先生の還暦お祝い吟行、宴は水上バスから、である。

鬼遊先生をはじめとして、翠洋会会員十六名が淀屋橋に集合した。前面にそそり立つ市役所の新庁舎を眺めながら船に乗る。初めて見る水上バス、船室はなかなか感じがよい。これならきつと良い句が生まれそうな雰囲気である。お互い好みの飲み物お菓子でしばし童心にかえる。

船は五月の風を切って時速九マイルで滑るように走る。水上バスは、一名アクアライナー、市民の通勤と観光とはじめられた。日頃表から見ている街並みを裏から見るのも一興である。中之島剣先きを迂回して東洋陶磁

美術館脇へ。それから、また川を溯って川崎橋をくぐる。通り抜けはすっかり葉桜になっているが、花の時に川の上から眺めたいものだと思つた。双子のツインビルから大阪城へのコースがメインで、夜はお城が青白い光に浮き上る。私達が意外に思つたのは、この船独特の橋をくぐる時、屋根が低くなることである。まるで橋にお辞儀をしているようにも感じられる。これも充分句になる。船中ではガイドの説明が続くが、女性のお喋りで、その方ははつきり聞こえない。約一時間の楽しい巡航は終つた。



水上バス乗場にて (カメラ・結城君子)

祝宴は駅前第三ビル三十三階の河久、大阪の展望は格別で、夜はなお素晴らしいことだろう。鬼遊先生が音頭として薫風先生の還暦の乾杯、続いて会員から先生に心からの記念品を贈り、先生のご健康を祝福した。還暦にまだまだ余生など来ない 兼治郎
なお、藤村宏子さんも遅れてかけつけられたことを付記いたします。

〈入選句〉

高杉 鬼遊選

水上バス八百八橋を通り抜け 文子
ビルのはずれに白壁の土蔵見つたり 春子

水上バス流れのいろは見すにおく 君子
薫風の五月目出度き船めぐり 美津枝

大都会忙中閑あり五月晴れ 萬里
太公望船を尻目に夢を釣る 為子

橋々も下くぐられてはすかしや 綾子
蓬萊山還暦祝う風かおる 照子

水の都昔を今に船遊び 光子
還暦を共に祝うか水豊か みつ子

大阪城ツインのビルも走つて 東雲
公園の恋を船から見て通り 兼治郎

大川に花と緑が映えてよし 登志実
繁栄とつらはら水都の水濁る 楓 楽

大阪も二十三階めしの味 薫風

(軸) 大阪を水の上から見る五月

7 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
菜 の 花	10日(木) 夕6時より 雑草・眼・力(ちから)・投げる	八尾西郷会館 近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 八尾神社境内 〒581 八尾市山本町5-4-6 内海幸生
川 柳 塔 ま つ え	12日(土) 午後1時半より 帆・浴衣・まじない	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	13日(日) 午後1時より 炎・船・図星	紀の国会館(県民文化会館西隣) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口	14日(月) 午後1時半より 不足・利口・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
富 柳 会	17日(木) 午後1時半より 痛い・回す・箸	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3-22-18 藤田泰子
南海電鉄 川柳句会	17日(木) 夕6時より 美術館・ものしり・みそ汁	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卵 の 花	17日(木) 午後1時より 噴水・疲れる・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白溪子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
南 大 阪 川 柳 会	19日(土) 夕6時より 相性・異色・海・炎天	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅裏南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川 柳 ねやがわ	20日(日) 午後1時より 表情・同情・弾む	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川 柳 会	21日(月) 午後1時半より 海・円・とぶ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒560 豊中市旭丘8番87-2 田中正坊
東 大 阪 川柳同好会	26日(土) 夕6時より 汗・うちわ・海・影	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川 柳 会	28日(月) 夕6時より 廊下・著・サングラス・挑む	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19-28 里 小路
堺川柳会	31日(木) 第4回夜市川柳大会	

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

● 募 集 ●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りです。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 栞 選
水煙抄 (10句)	黒川 紫香 選
愛染帖 (3句)	橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)	
「筋書」	中西 兼治郎 選
「輝く」	狭間 希久志 選
「波」	森井 菁居 選

十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 栞 選
水煙抄 (10句)	黒川 紫香 選
愛染帖 (3句)	橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)	
「急ぐ」	原田メイシユン 選
「全力」	飯田 悦郎 選
「嵐」	河合 茂雄 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を、使用ください。

7月の常任理事会は1日(火)

〒545 定価 五百円 (送料50円)
半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)

昭和六十一年六月二十五日印刷
昭和六十一年七月一日発行

編集兼 西尾 巖
印刷所 藤原 童心 社
発行人 藤原 童心 社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
電話 (三六九) 一六九一四番
振替口座大阪 813336八番

路郎忌 本社7月句会

日時 七月七日(月) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町一 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「甘い」 西尾 栞
「森」 小出 智子 選
「熱」 板尾 岳人 選
「恩師」 岩井 三窓 選
「橘高 薫風 選」 各題三句以内厳守

席題 二題 当日発表
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

8月の兼題 「雑音」 「わがまま」
「鐘」 「宇」

8月の本社句会は7日(木)

「夜市川柳」募集

第5年度 「猫」 神平 狂虎 選
第2回 3句・締切 7月末日
第3回 「卵」 高杉 鬼遊 選
締切 8月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一二
河内 天笑 方
堺川 柳 会

編集後記

☆四月五月はあわただしく過ぎた。旅の合間にお見舞の旅をした。また、年頭の賀状に、還暦を迎えたことを書いたのだ、そのお祝いをと、九組のグループから招待を受けてうれしい日が続いた。番衆の同人の方が多い朝日カルチャーの一期の会も乾杯をして下さった☆日頃尊敬する寺尾俊平、川口弘生さんが病に倒れたのは身につまされて淋しく、私自身、六月二日三日、短期人間ドックに入☆検査を受ける気になった☆結果は、胃半分、肺半分、とうとうやっついているとに尽きる。低血圧と心臓肥大。癌の気は皆無であった。

は容易ではない。☆結局は、自分の体は自分が一番良く知っているというので、これからのためなだらかな行くしかなくという考えに落着いた。☆七日の本社句会の柳話担当をさせて最終の別府航路に乗り、全日本川柳大会に出席した。私が四百六十人への最終出席者となった。全国から参集のなつかしい顔と握手を交わすのも爽やかだが、一別以来の唐津の同人、田口虹汀、久保正敏、筒井朴竜、山口高明の諸氏はなつかしかった。同人とは血の通った思いが入入するものである。☆中旬には栗主幹とYFCのお仲間と信濃の旅を楽しませて頂いた。下旬には、故白岩文衛句碑建立の会に出掛ける。故人と共に語り明かしたところある栗倉の一夜は、まんじりとも出来ないだろう。明暗のくつきりな一枚の幕の表裏のよう旅をしたわけである。☆紀市郁栄、岩井三窓両氏

極的な寄稿をお願いする☆暑中見舞いの広告、まだ間に合います。(薫) ☆最近、金満につぼんとか金満症につぼんの活字を多く見る。はて、何処の国のことかと疑うほど日常感覚から大きくずれている。ずれているのは国なのか、わ

神武以来の物の豊かな時世になった。勿論、昔に負けない豪邸に住む金満家も生まれた。また金満家のような国会議員までできてしまった。しかし、われわれは依然として普通のわれわれである。▼かつて、金(かね)のことを口にするのは、はしたないと卑しめられたものだった。今では、金のない者は首のない例えにまでされた。損か、得か、金がかかる。行して目的の正当性まで狂わせている。『もの云えばこの世は寒い金のこと』(き)

またか、とうんざりする。☆うんざりといえは、こないだ句会でボヤいていた。――父の墓のことか。句会にはあんまり出んボクやが、それでも『父の墓』によう出くわす。最初、耳にしたとき新鮮に感じたけど、あちこちで誰も彼も使いだすと、手垢に汚れた言葉になってしまいそうで、それがこの頃ひどく気に入るんや。――そうしたら使い古された言葉、川柳界には多い。――『鬼』『善人』『やじろべえ』『ライバル』……『ホンマみんな好きや、なんでもやろ。――フリカケいうのがあるやろ。あれと一緒に思うねん。めしにフリカケかけるように、兼題にこういう言葉、バラツとかけると、あんまり苦勞もいらん、味も結構イケる。まっ使いたくなる、いうこっちゃ。――?

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫風
 (掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三
 (掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫
 (掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はかき一枚に三句(首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること)。投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉

〒五三〇・大阪市北区中之島二丁目・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

5つの個性・5つの色味!!

アイスクャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋本店
 なんば高島屋百貨店
 泉北高島屋百貨店
 京都高島屋百貨店
 阪神百貨店
 松坂屋百貨店
 そごう百貨店
 京阪モール店

サンストア中之島店
 サンストア淀屋橋店
 アベノ近鉄百貨店
 上本町近鉄百貨店
 東大阪近鉄百貨店
 奈良近鉄百貨店
 京都近鉄百貨店

なんば新川店
 淀のまち店
 ドーチ力店
 南海難波駅店
 国鉄大阪駅店
 梅田大丸百貨店
 堺東店



大 阪 ・ なん ば



TEL 641-0551